 世代間交流の活性化による新たな
コミュニティ形成に関する研究

研究体制

企画推進	長谷川文雄	東北芸術工科大学大学院長
研究協力	檜 貢	作新学院大学教授
	斎藤 裕美	多摩大学教授
	山畑 信博	東北芸術工科大学助教授
	小山田裕彦	シンク・コミュニケーション
	財団法人ハイライフ研究所	

目次

第1章	研究目的	1
1-1	研究の背景	
1-2	研究目的	
第2章	世代間交流の変化	2
2-1	地域における世代間ギャップとは	
2-2	世代間ギャップをおこす要因	
2-3	世代間交流の意識	
第3章	世代間交流の現状	12
3-1	調査概要	
3-2	ヒアリング記録	
3-3	ヒアリング結果のまとめ	
第4章	世代間交流の事例調査	56
4-1	廃校利用のあたらしいがっこう（山形県朝日町）	
4-2	学生助っ人隊（山形県西川町）	
4-3	とみおか連（横浜市金沢区）	
4-4	長井まちづくり NPO センター（あやっか）（山形県長井市）	
4-5	セントラルイースト東京（東京都千代田区・中央区）	
4-6	アサザプロジェクト—霞ヶ浦の浄化—（茨城県霞ヶ浦地域）	
4-7	森の聞き書き甲子園（全国）	
4-8	その他の世代間交流の事例	
第5章	世代間交流を促進するための社会サービスの可能性	83
5-1	自治体からみた社会サービス	
5-2	民間からみた社会サービス	
第6章	座談会—世代間交流を促進させるには	95

第1章 研究目的

1-1 研究の背景

家族、職場、地域社会のいずれの局面でも世代間の交流が希薄化し、必要以上の摩擦とコミュニケーションギャップが生じている。特に、コミュニティでは祭事やサークル活動で世代間の伝承が低迷化し、十分な活動ができず、深刻な問題になっている。最近では「年金問題」を契機に、支払い側の世代と受給側の世代にギャップが生じ、世代戦争ともいえるべき緊張に満ちた関係性が起きている。

また職場では、年齢構成が逆ピラミッド構造にシフトし、世代が若くなるにつれ、管理職ポストが減少したり、それまでの高い世代が保有している既得権の行使を巡って世代間に摩擦が起きている。

家庭においても、親子のコミュニケーションが十分でないために、非行や家庭内暴力など、いままでと質的に異なった問題が派生している

本研究では、いくつかの具体的な事例から世代間のコミュニケーションギャップの状況を把握し、その原因を追求するとともに、交流間交流を促進し、活性化する方策を研究する。結果としてそこから新たな社会サービスが出現する可能性を探る。

1-2 研究目的

以上のような背景を踏まえ、具体的な研究目的は次のとおりである。
今回の調査研究では、対象領域の中心をコミュニティとする。

- 1) 文献調査をもとに、世代間の交流にどのような変化が起きているのか、またその要因は何かを明らかにする
- 2) 世代間交流の現状を把握するためにヒアリング調査を実施する。
- 3) 都市・地域の中で、世代間交流を積極的に実践している事例をとりあげ、聞き取り調査を行う
- 4) 今後、世代間交流を促進するために必要な社会サービスの可能性について検討を行う

第2章 世代間交流の変化

2-1 地域における世代間ギャップとは

(1) 世代の捉え方

一般に、世代間ギャップというとき、「世代」をどのように捉えるかによって、議論の内容が変わってくる。人口学的には、一定期間に出生した人口集団（いわゆるコーホート）を一つのユニットとして捉え、それを世代と呼んでいるのに対し、社会学的には、ほぼ同時期に出生して、大きな社会的な事件や自然災害、イベントなど共有の体験をしている集団である。

例えば前者には「団塊の世代」、「団塊ジュニア」などの括り方があり、後者には「戦中派」、「全共闘世代」などという呼称がある。こうした分類とは別に、単純に老齢世代、壮年世代、若者世代、青少年世代というように、年齢をもとに世代を分けて考える見方もある。

今回の研究では、コミュニティという空間に注目しているため、さらにこれらの分類に「同じコミュニティで生まれ育った」、ないしは「現在そのコミュニティに生活している」という条件が加わることになる。

(2) 世代間ギャップの定義

世代間ギャップの定義も多様であるが、世代差によって物事に対する考え方が異なり、ときには相互理解に齟齬が生じ、何らかの支障をきたす状態といえる。考え方が異なるということは、何かの行動を起こすときに方法、内容が変わってくる可能性があるということになる。世代間ギャップが生じる要因は、上記の社会学的な定義からも明らかなように、社会変動が激しく、物事に対する共通認識にずれが生じたり、異なった考えを示すことから始まる。

地域での世代間ギャップを考えると、新興住宅地のようにさまざまな世代が居住していても、積極的な交流がない場合と、過疎化が進行した村落のように交流したくとも若い世代が身近なところにはいないなど、いくつかのパターンが考えられる。

本研究では、地域における世代間ギャップを次のように捉える。

- 1) 世代の交流がないために地域の伝統的な行事等が遂行できない
- 2) 地域において世代を通じた交流の場が欠如している
- 3) 地域に伝わるさまざまな仕来りなど古い世代から新しい世代への引継、

伝承がなされていない

- 4) 地域に限定された世代しか居住していない
- 5) 域外からもさまざまな世代の交流がなく活性化が乏しい

端的に述べれば、ここでいう世代間ギャップとは世代間の交流の欠如と捉えることができる。

2-2 世代間交流を阻害する要因

かつて地域には、さまざまな世代が混住し、四季折々の伝統行事も活発に行われ、世代間相互の交流があり、地域社会の秩序が保たれていた。しかし現在では、その交流も希薄になり久しくなる。自治体のまちづくり計画には、どこをみても必ずといっていいほどに、世代間交流がうたわれている。地域を活性化していくには、世代間交流が不可欠だと捉える証と見られる。ここで何が世代間交流を阻害しているのかを分析してみる。

(1) 核家族化の進行

平成15年6月5日現在における我が国の世帯総数は4,580万世帯となっている。核家族化の進行が指摘され久しくなるが世帯構造別にみると、「夫婦と未婚の子のみの世帯」が1490万世帯（全世帯の32.5%）で最も多く、次いで「単独世帯」1,067万3千世帯（同23.3%）、「夫婦のみの世帯」978万1千世帯（同21.4%）の順となっている。（図2-1参照）

世帯類型別にみると、「高齢者世帯」は725万世帯（全世帯の15.8%）、「母子世帯」は56万9千世帯（同1.2%）となっている。（図2-2参照）

三世代世帯とは、世帯主を中心とした直系三世代以上の世帯をいう。三世代家族から核家族、さらに核家族からシングル世帯へと多様化し、身近な家庭内でも世代交流の基本的な場が少なくなっている。また家庭外でも親は小中学校など、学区域で子どもを通じた親同士のつきあいが多く、その年齢も同世代になりがちである。

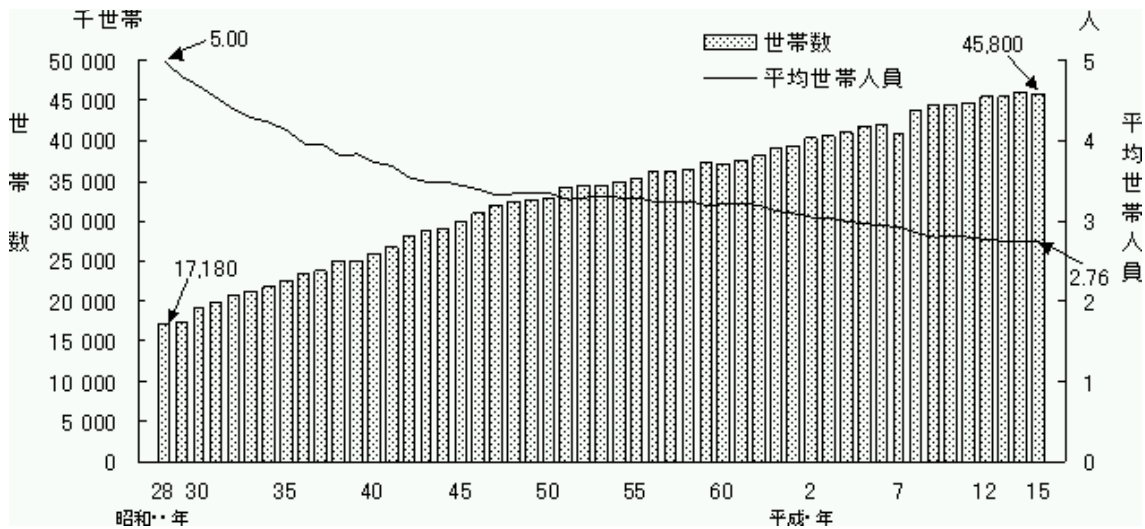


図 2-1 世帯数と平均世帯人員の変化 (出典：総務省統計局)

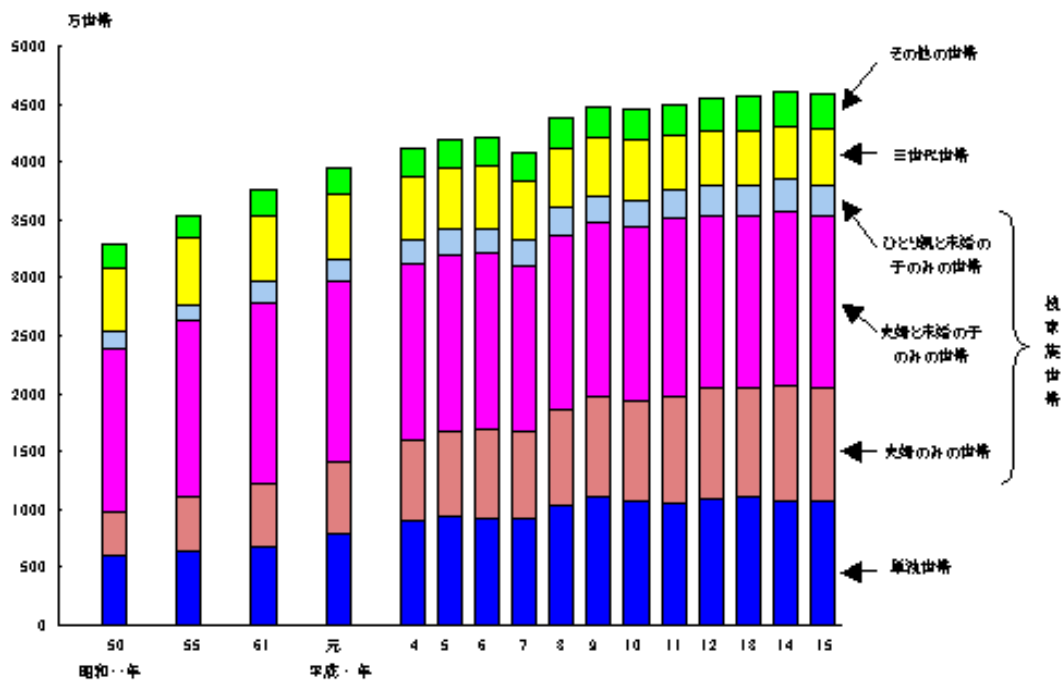


図 2-2 世帯構成の変化 (出典：総務省統計局)

(2) 都市化の進行によるコミュニティの崩壊

30年代後半から40年代にかけ、高度経済成長の過程で都市への急速な人口や

諸機能の集中が進み、特にピーク時には三大都市圏に毎年 70 万人近い人口が流入した。現在ではその傾向は鈍化しているが、一貫して都市化、すなわち都市への人口流入は継続している。

この事象は 2 つの側面でコミュニティに問題を投げかけている。第一は、流出した人々が居住していた地方のコミュニティでは高齢者が残り、若年層が少なくなり、それまでの世代間交流が物理的に難しくなっている。第二は、流入した都市部のコミュニティでは、それ以前から居住している人々とのふれあいの機会やコミュニケーションの場が少なく、結果として交流が起きにくくなっている点である。

(3) 居住形態の変化

全国で約 450 万戸、1 千万人以上の人々がマンションに居住し、一般的な都市の居住形態になっている。3 大都市圏でのマンションが占める割合は 50.8% と全国の 40.0% を上回っており、特に関東大都市圏では 55.0% に達している。たとえマンションにさまざまな世代の人々が居住していたとしても、きっかけがないとなかなか交流する機会が少ないといわれている。皮肉なことに、住んでいるマンションに共通の重大な問題が発生すると、にわかに連帯感が生まれ、近隣同士を含めた世代間交流が活発になるという例も多く見られる。

(4) 自由時間の減少

町内会や地域への行事、ボランティア活動を続けていくためには、そのための時間が必要になる。2000 年に行われた NHK 放送文化研究所の生活利用時間調査によると、これらに費やされる時間は、平日で 6%、土曜日が 10%、日曜日で 14% となっている。それを男女別、世代別に見たのが図 2-3 である。やはり働き盛りの男性、家事に従事する女性・働く女性などを考慮すると、世代間交流に必要な時間が必ずしも十分に確保できていない点も指摘できる。

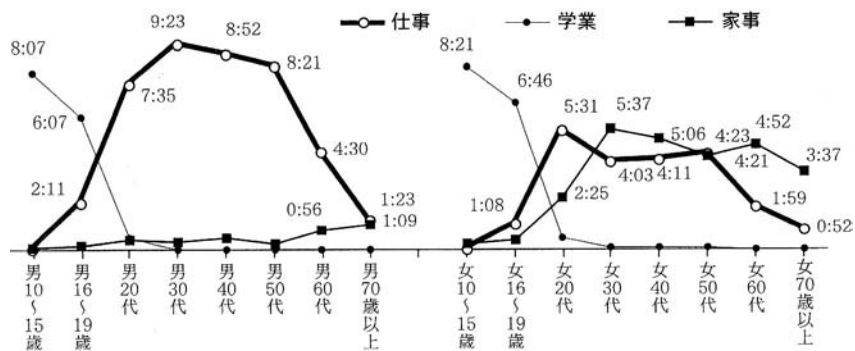


図 2-3 平日の仕事・学業・家事時間（男女年層別、全員平均時間）
（出典：『日本人の生活時間・2000』 NHK 出版）

（5）価値意識の相違

冒頭に述べたように、戦中派、団塊世代というようにそれぞれの世代は共有している体験が異なり、それがコーホートの的に推移していくことから、戦争など激しい時代を経験している世代とそうでない世代の間には、異なった考え方が起きてもおかしくない。その意味では、何時の時代でも常に、世代間には共有しきれない価値観が存在することになる。その結果、派生するさまざまな事象に対し、意見、行動に相違が起きてくる。この、価値意識の相違に伴い、世代間交流に起きてくる問題は、

- ・ 共通する話題が少ない
- ・ 伝統、しきたりに対する重きの置き方
- ・ 組織への帰属意識に対する考え
- ・ 世間体意識
- ・ 自己表現の程度
- ・ 地域社会へのアイデンティティの相違

などがある。特に現在の若者世代には、引きこもり傾向や定職に敢えて就こうとしない“NEET”など、世代間交流に積極性が欠ける世代が増えている。

（6）地域協力作業の市場化・外部化

かつて地域に住む人々の間で協力しながら行われてきた、雪掻き、道路清掃、廃品回収、防虫駆除などの作業が次第に地域の人々の手を放れてきた。こうし

た作業が行政で肩代わりされたり、民間企業で事業化され、地域の人々から外在化されてきた。なかには、地場の祭りで御輿を担ぐ者がいなくなり、外部から応援を頼んだり、自動車の上に載せて域内を回るなどの本末転倒した事態が起きている。

(9) 親戚間でも年中行事が簡素化

冠婚葬祭、誕生祝い、就職祝いなど、さまざまな年中行事がかつては多くの親戚を集めて執り行われていたものが、次第に簡素化され、限られた身内だけで済まされる傾向にある。その結果、いわゆる親戚づきあいも希薄になり、世代間の交流に微妙な影響を及ぼしている。

以上、世代間交流を阻害するさまざまな要因について見てきたが、何らかの方策で解決できる問題と、そう容易には解決できない問題とに分けられる。

「価値意識の相違」は基本的に解決不可能だが、大切な点は、相互の相違を理解しようとする努力が払われるか否かであろう。そのためには時間を掛けてコミュニケーションを続けなければならない。未来志向型でこれからの時代に即したきっかけづくりを行い、その結果として世代間交流が芽生えてくるような発想が重要になる。最初から世代間交流を目的にしたきっかけづくりは長続きしなくなる可能性がある。その具体的な事例については、第4章で考察する。

2-3 世代間交流の意識

世代間の交流状況について直接行ったマス調査はなく、第一生命経済研究所が定期的に行っているライフデザイン調査に関連項目が盛り込まれている。調査結果は『ライフデザイン白書』として、出版されている。本項では、この調査から、今回に調査に関係した内容を引用する。調査は、全国から満18～69歳の男女個人を無作為に2000サンプル抽出した留置記入依頼の形態で行われている。

(1) 地域での日常のつきあいの程度

日頃、近所づきあいで、どの程度親密につきあっているかを問うたところ、男女ともに、年齢が高くなるにつれ親密度が増している。しかし、50歳以下ではつきあいの度合いは低く、「あいさつをする程度」が圧倒的に多い。つまり、地域社会の中で、緊密な交流が行われているとは考えにくい。ましてや、世代

間となると、さらにつきあいの程度が粗になることが容易に想像できる。

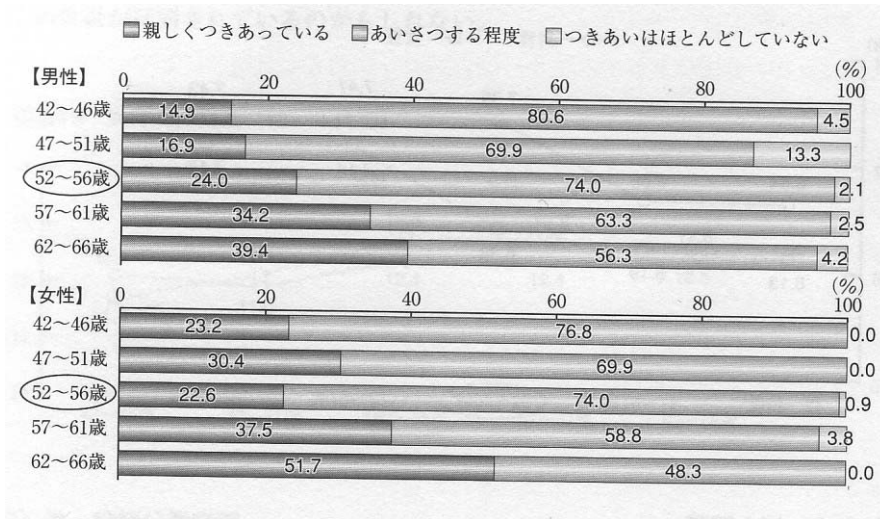


図 2-4 男女別・年代別近所づきあいの程度
(出典：『ライフデザイン白書』2003 第一生命経済研究所)

さらに、近所づきあいの程度が年々変化で見るとどのように推移しているかを見たのが図 2-5 である。男女ともに、年を追う毎に近所とのつきあいが希薄化していく傾向がみられる。特に女性にその傾向が強くみられる。また、年を追う毎に、男女の差が縮まっていることも興味深い。

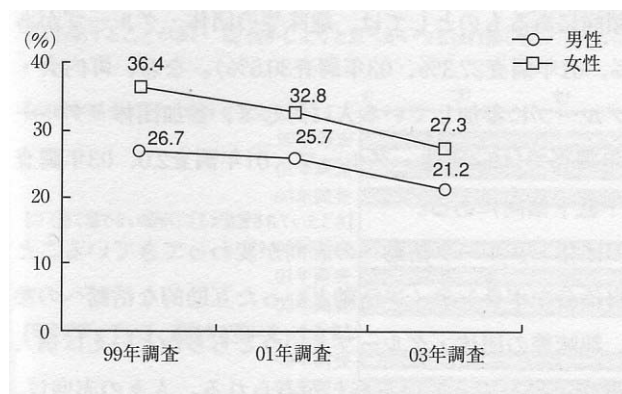


図 2-5 男女別・年代別近所づきあいの程度の経年変化
(出典：『ライフデザイン白書』2003 第一生命経済研究所)

(2) 地域を超えたつきあい

近隣だけではなく、「町内会・自治会」、「趣味や娯楽、スポーツ」、さらに「福祉・環境・国際関係等に関連した各種団体活動、ボランティア活動」などへの参加状況を調べている。

男性は「特にない」が占める割合が高いが、団塊の世代以降から身近な町内会・自治会への関心が高まっている様子がわかる。定年後は趣味やスポーツに興じるのも理解できる。

一方、女性は、逆に団塊の世代以降、町内会・自治会への参加割合が減少している。夫婦で役割分担をし、夫にその任が回ってきたとも見られる。その結果、「特に何もない」の割合が増えている。40代前半は、仕事、家事等への負担からか、やはり特に何もないの割合が高く、ほぼ半分近くに及んでいるのも興味深い。

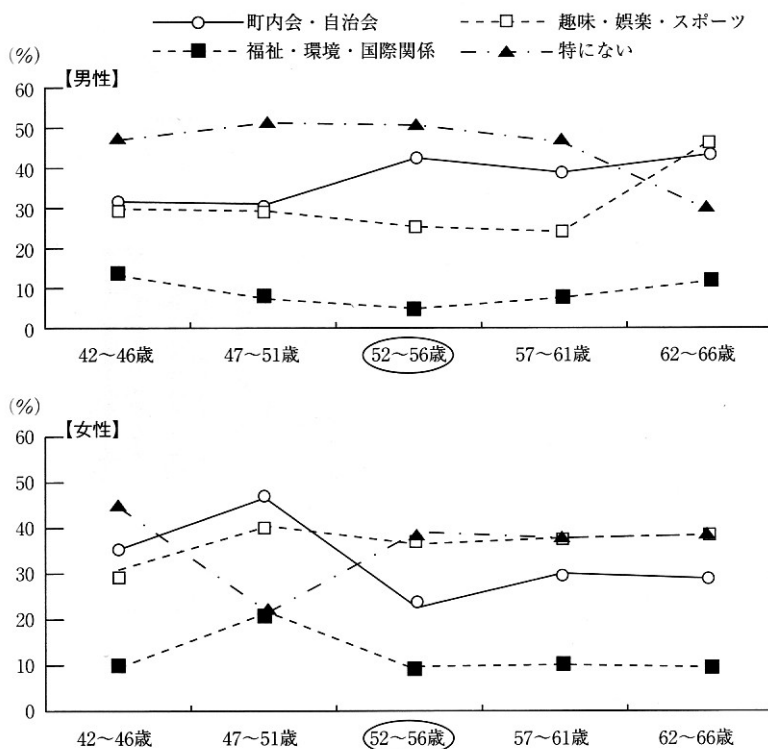
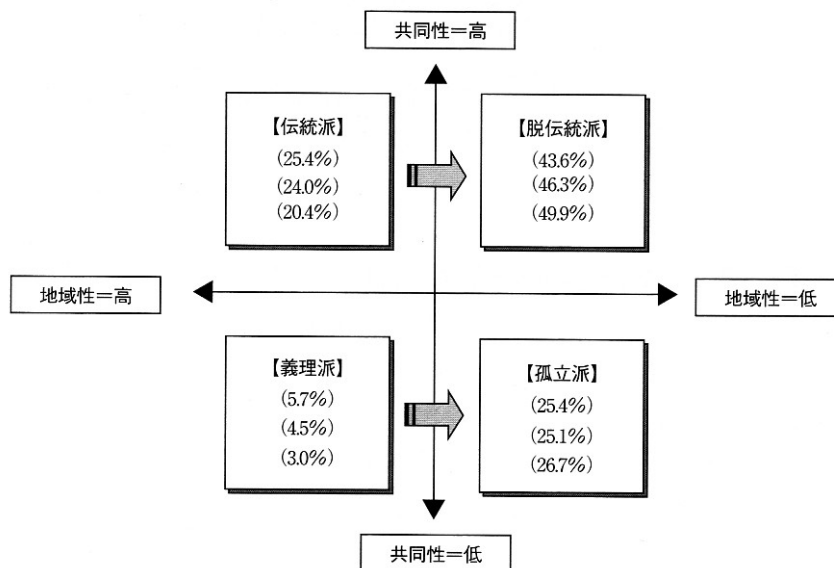


図 2-6 男女別・年代別所属団体等への参加状況

(出典：『ライフデザイン白書』2003 第一生命経済研究所)

(3) 全体的な傾向

この調査では、コミュニティの活動を2つの視点から類型化している。第一の視点は、「地域性」で(1)で見たような近所づきあいの度合いである。親しくつきあっている程度が高ければ、「地域性」は高いこととしている。第二の視点は、「共同性」である。何かに参画しようという度合いが高ければ、「共同性」は高いことになる。この2つの視点で整理すると、以下の図のようなタイポロジーが可能になる。



注) 上段から、99年調査、01年調査、03年調査

図 2-7 コミュニティの活動タイプ

(出典：『ライフデザイン白書』2003 第一生命経済研究所)

共同性も地域性も高い意識の人々を「伝統派」、共同性は高いが地域性が低い人々を「脱伝統派」、また、地域性は高いが、共同性が低い人々を「義理派」、地域性も共同性も共に低い層を「孤立派」と定義している。

それぞれの象限を、経年的に見てみると、「脱伝統派」が台頭してきている傾向にあることが分かる。ほぼ半分を占めている。コミュニティには根付いていないが、共同性はあるということだろうか。一方、近所づきあいはいいが、共同性に欠ける「義理派」は年々減少となり、ほんの僅か(3%)に過ぎない。

コミュニティに根付いて、共同性も高い「伝統派」は漸減にあり、20%程度

になっている。変わって、地域からも社会からも孤立している層は漸増の傾向にある。これな、コミュニティ活動そのものに関心が見られず、いわんや世代間交流どころでないと見るべきだろう。

総じていえば、この調査で見える限り、まずコミュニティそのものへの関心が低くなりつつある。ただ広く社会的にみれば、共同的な活動への関心は高まりつつあることから、コミュニティというレベルを離せば、世代間交流への期待はある。団塊の世代が今後、地域への関心を持ち、世代間交流にどの程度積極的な行動をとるかによって、状況は変わってくる様子が、調査から伺われる。

第3章 世代間交流の現状

3-1 調査概要

世代間のギャップを生じさせる要因や、世代間交流に関する意識を把握するために、ヒアリング調査を実施した。以下にその概要を示す。

(1) ヒアリング期間

2004年11月～2005年1月

(2) ヒアリング対象者

30代から60代まで、各世代の男女 10名

〈団塊ジュニア世代(30代)〉 2名

男---会社員・社会人吹奏楽楽団員、女---主婦・小学校PTA

〈ポスト団塊世代(40代)〉 3名

男---会社員・子供サッカーコーチ、男---デザイナー・小学校活動

女---菓子店経営・中学校保護者会

〈団塊世代(50代)〉 3名

男---会社員・中学校活動、女---教員・よさこい踊り

男---町議員・太鼓伝承

〈団塊以前(60代)〉 2名

男---会社役員・お父さんの楽校、女---主婦・団地組合

(3) ヒアリング方法

今回の研究目的を説明し、下記ヒアリング項目にもとづき、面接方式でヒアリングを実施した。

(4) ヒアリング項目

〈世代間のコミュニケーションギャップについて〉

- ・ コミュニケーションのギャップを感じたことがありますか。それはどんな時ですか。
- ・ 地域や職場で感じるコミュニケーションギャップはどのようなことですか。
- ・ ご家族のコミュニケーションに関して、最近感じたことを教えてください。

- ・ コミュニケーションギャップが及ぼす様々な影響について、どのように思いますか。

<各世代のイメージ>

- ・ 各世代のイメージを教えてください。
(団塊ジュニア世代、ポスト団塊世代、団塊世代、団塊世代以前)
- ・ また、その世代に対する要望があれば教えてください。
- ・ 各世代の見方が変わったことがありますか。
- ・ またその内容(ご自身の考え方変化)について教えてください。
- ・ 年金の負担について、どんなことを感じますか。

<コミュニティ活動について>

- ・ 地域のイベントや祭りには参加するほうですか。
- ・ 「世代間交流」については何が必要だと思いますか。
- ・ 気になる世代間交流の事例があれば教えてください。
- ・ どのようなコミュニティ活動を望みますか。
- ・ 将来、地域へはどのようなかかわり方をしたいと思いますか。

<その他>

- ・ その他ご意見

世代間交流に関するヒアリング結果一覧

質問項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
<ヒアリング対象者プロフィール>	団塊ジュニア	団塊ジュニア	ポスト団塊	ポスト団塊	ポスト団塊	団塊	団塊	団塊	60代以降	60代以降
(1)性別	男	女	男	男	女	男	女	男	男	女
(2)年齢	34才	36才	42才	45才	46才	57才	55才	57才	64才	67才
(3)居住地域	横浜	東京	東京	東京	東京	東京	東京	鹿児島	東京	東京
(4)家族構成	独身	4	3	4	4	5	4	6	4	2
(5)職業	メーカー会社員	パート	メーカー会社員	子役俳優	菓子店経営	会社役員	教員	町議員	出版社役員	専業主婦
(6)地域活動ほか	社会人楽団	小学校PTA	少年サッカー	小学校活動	中学校保護者会	中学校活動	よさこい踊り	太鼓伝承	お父さんの楽校	団地組合
1. 世代間ギャップについて										
1-1. 世代間ギャップを感じる時	物事を決める時	BBS	子供より親	電車	ギャップとは感じない	都会	ご両親	子供	職場	特にない
1-2. 地域や職場でのギャップ	上司との意見違い	PTA活動	人による	海外での感覚	育ちの環境	PTA	教員間	議会	感覚	特にない
1-3. 家族のコミュニケーション	特に感じない	父親不在が気になる	努力は必要	子は大人以上	おしゃべりの時間	父親復活	夫婦の会話	楽しみ	メール	ホームページ
1-4. ギャップが及ぼす影響	地域住民として不安	住みごころに影響	子供優先	生活コストに影響	人さまざま	自治ということ	学校の責任	変化のもと	自分が大変	年の功
2. 世代のイメージについて										
2-1. 各世代のイメージ										
(1)団塊ジュニア	家庭・地域・希望派	マイペース	誘えば	新しさ	センス		極端	即戦力	特にイメージない	皆さんがんばっている
(2)ポスト団塊世代	疲れている	協力的	まとまりがない	個性	自かき	結余曲折	遠慮	まじめ	不思議	同上
(3)団塊世代	うるさいかぶがある	頼れる	一定のこだわり	自信	あこがれ	しつかり	力	かたまり	がんばっている	同上
(4)60代以上	頑張り屋	まじめ役	奮美	力とやさしさ				年の功	以外と元気	同上
2-2. 各世代に対する要望										
(1)団塊ジュニア	自己中心も若干		これからのリーダー	期待の感覚	持続性	難を合わせて		経験		
(2)ポスト団塊世代	特徴が見えない	会社と家族・地域の両立	子供たち	リバイバル	変身できる	時間	健康	重要な任務	力の出しどころ	いろいろと頼むべき
(3)団塊世代	地域でのまじめ役					知恵				
(4)60代以上	特になし	仕切りすぎるのはNG								
2-3. 見方が変化した時	中学生指導	同世代の親の意見	子供たち	散歩	音楽の世界	NHK番組	事件	小学生	研究者たちと	子供の結婚
2-4. 自身の変化	親が難しい	子供会	会社だけでは	本物	きっかけは重要	インターネット	伝統	海外交流	教えたいた気持	引越す
2-5. 年金負担	不透明だが必要	子供のためなら	お互い様	がんばる	しみて必要	がんばってほしい	国の計画性	使い方	当然のこと	感謝
3. コミュニティ活動について										
3-1. 地域への参加	社会人楽団として	PTA活動	少年サッカー	できるだけ接点を	菓子教室	学校から	学校と祭り	太鼓伝承	お父さんの楽校	招待の楽しみ
3-2. 世代間交流に必要なもの	いつもの目標	様々な機会	気づき	はっきりした意見	話題性	場	行動力	神のようなもの	人・仲間	思いやり
3-3. 気になる事例	最近の学校開放活動		学校キャンピング	フックアラウンドイベント			BOXショット			
3-4. 希望するコミュニティ	シニアなコミュニティ	参加しやすい	父親の参加	テーマ性	問題意識の整理	これから発見	無理をしない	持続性	楽しさ	達成感
3-5. 地域へのかかわり方	音楽を通して	子供の成長とともに	やれるところから	責任をもって	私は食から		住民として	引き継ぐもの	様々なアプローチ	勉強
4. その他ご意見	幅広い交流も必要ですが、どこか嫌くいついよにやるのが大事		ギャップに対して何かするといふよりは、別な目的活動においてギャップを活かすという方が大事	交流が目的ではなく、何かをするための交流であってほしい			学校だけではできないことがある。学校という場を活用してほしい	以外と昔からの祭りや行事などはよくできたコミュニケーションのくみ	地域活動としてやりやすい関係があるように思う	ゆっくり、納得のいくことを

3-2 ヒアリング記録

(1) 対象者 A

● プロフィール

- ・ 年齢 34 歳
- ・ 性別 男
- ・ 居住地域 横浜
- ・ 職業 メーカー会社員
- ・ 家族 独身
- ・ 地域活動 社会人吹奏楽部団員

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ 仲間同士でも会社でも、何か物事を決めるときに世代の特徴が出ることがよくあるように思う。
- ・ 人それぞれということもあるが、「わからないヤツだなー」とか「なんで理解してもらえないのか」「若い連中は・・・」という会話はよく聞く。
- ・ 話せばわかるということでもあるが、自分の世代の下と上とでは、やはり基本的な考えかたや納得・安心できる基準というのは違うように思う。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ よくある場面だが、仕事上で上司や役員との意見の戦いは、その議題の内容よりも世代間の考え方の違いに起因するものがあるように感じる。
- ・ 会社においては、論議する時間と場があるからよいが、地域においては、コミュニケーションが無さすぎて、地域で何かをやりましょうとか、意見を求められてもピンとこない。
- ・ 目的意識をなかなか共有できていない中で、役員や事務局を担当している人々は大変だ。
- ・ どうしたらよくなるのかは、あまり考えたことはない。

〈家族のコミュニケーション〉

- ・ 独身なので特にはないが、両親や兄弟とのコミュニケーションは電話が主。

- ・ 両親のこれまでの口癖は、「そろそろ身をかためないと」だったが、「体は大丈夫か」が多くなった。

<コミュニケーションギャップが及ぼす影響>

- ・ 摩擦やギャップの存在は問題であるという認識はあるが、自分自身何をしたらよいかわからない。
- ・ 最終的には、自分自身にかえてくることかもしれないが、具体的な話題や緊急性といったきっかけがないと、何をどうコミュニケーションすればよいか、また誰と話せばよいかかわからない。
- ・ 自分は吹奏楽の社会人バンドの団員として活動もやっているが、そうした活動からはいろんな地域での演奏会等を通じて様々なコミュニケーションも生まれる。
- ・ しかしながら生活時間の問題もあるが、自分の居住地の人々とはほとんど交流はない。それでも住んでいられる社会なのだが、自分としては不安もある。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ 団塊ジュニア世代については、私の周辺も含めて、家庭・地域と仕事の両立を希望また実際にそうしている人々が多く感じる。
- ・ 結構、同世代との飲み会も多い。
- ・ ポスト団塊世代は、どちらかというともまだ会社人間で、常に疲れているイメージがある。最近はいっしょに酒飲みに行くこともなく、コミュニケーション不足な感じ。
- ・ 団塊世代の人々は、たしかにうるさい人が多いが、芯のある話と行動をする世代だと思う。横のつながりは強力。
- ・ 団塊世代以前の人々は、よりパワフルに感じる。なぜか元気。

<各世代への要望>

- ・ 団塊ジュニア世代は、自分のライフスタイルもいいが、もう少し協調性というか、いっしょに燃えるというか一体感がほしい感じもする。自己中心的な行動は反省点。

- ・ ポスト団塊世代は、特徴がない。何かはっきりとしたリーダーシップを発揮してほしい。
- ・ 団塊世代には、地域でもよりリーダーシップを発揮してもらいたいが、やりすぎはいやがられる。

<世代の見方変化>

- ・ 吹奏楽の団員活動をしながら、中学生の指導もしている。
- ・ どこかでは子供だと思っていたが、意見を素直に受け入れ、すぐ音に反映する力はすごい。大人は簡単にはいかない。自分のくせや気持ちを素直になおせない。
- ・ 世代が違うと思っていたが、意外と一番マッチングするかもしれない。

<自身の変化>

- ・ 中学生とのコミュニケーションは大変スムーズなのだが、そのご両親とくに母親とのコミュニケーションは難しい。
- ・ 生徒の家庭内のコミュニケーションに問題があるかもしれない。生徒は学校より家庭内のほうが素直になれないでいるようだ。
- ・ その問題は強い母親にあると自分は感じている。摩擦やコミュニケーションの希薄は、家庭内にまずは原因があるようだ。
- ・ 自分は、技術指導だけでなく、できるだけ生徒と話をして表現したい気持ちを引き出してあげたいと思うようになった。
- ・ 一般的には、うまいとかへたとか親が口出しするケースが多い。子供が一番いやがる会話。

<年金負担>

- ・ ニュースを聞いている限り、不透明であり賛成のできるしくみでもないが、社会的には必要なことだと認識している。
- ・ 私はちゃんと払ってます。

● コミュニティ活動について

<地域への参加>

- ・ 吹奏楽楽団員として、地域への接点を広げられればと思う。

- ・好きだからやっている。きれいなことは長続きしないので、できるだけ好きなことでコミュニケーションをとりたい。

〈世代間交流に必要なもの〉

- ・いっしょにやるための目標設定が必要。ただ集まっても無駄。
- ・吹奏楽では、中学校でも野球の甲子園と同様、全国大会出場という目標に向けてその地域ぐるみで応援の和が広がる。

〈気になる事例〉

- ・私たちの楽団もお世話になっているが、学校という施設の開放。
- ・地域活動、社会活動の場として学校施設を利用できるケースが大変多くなってきた。
- ・様々な事件も多くて課題はあるが、基本的な方向性としてはすばらしいですよ。
- ・出雲市での吹奏楽を中心とした、街をあげてのフェスティバルや学校保護者会活動などはかなりのパワー。

〈希望するコミュニティ〉

- ・できるだけシンプルな構造がよいと思う。
- ・あれもこれも組織となると、進まなくなる。
- ・目的意識をはっきりさせて、シンプル運営組織で無理をせずといったところが基本。

〈地域へのかかわり方〉

- ・繰り返しになるが、当面は、音楽を通して関われることを考えていきたい。

● その他ご意見

- ・交流希薄による摩擦やコミュニケーションギャップが生じている中で、様々な幅広い交流活動促進も大事だが、量よりも質。
- ・ひとつのテーマでとことん濃くいっしょにやることも大事だと思う。

(2) 対象者 B

● プロフィール

- ・ 年齢 36 歳
- ・ 性別 女
- ・ 居住地域 東京
- ・ 職業 主婦、パート
- ・ 家族 4 人
- ・ 地域活動 小学校 PTA

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ インターネットによる掲示板(BBS)などを利用していると、その会話の中でギャップを感じる。
- ・ ネットだけのおそろしさということもありますが、見たことも聞いたこともないのに、もっともらしく意見交換がなりたっている世界があることにびっくり。
- ・ 本当の論議をしていない、架空の論議に慣れてしまっている世代というグループが存在する。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ PTA 活動でもギャップを感じる。
- ・ やはりコミュニケーション不足からくる空回りの論議が多い。
- ・ イベントや催事の活動が、様々な意見でスムーズにすすめられないこともある。
- ・ 活動の目的や意義に関係なく、地域に存在する様々な団体(宗教団体含む)活動が強くなるケースもある。
- ・ また、保護者会等の会議においては、出席者がほとんどがお母様方ですが、かなり極端なご意見を出される方も多い。
- ・ 本来の交流活動の意義が、安全や教育というはっきりしない基準で実行できなくなるケースもある。
- ・ ただ、悪いことばかりではなく、その分ちゃんとしたコミュニティ形成を望む声と体制も整ってきていることも事実。

<家族のコミュニケーション>

- ・ 特に特別なことを感じたことはないが、やはり学校や地域のことになると父親不在が多いのが残念。

<コミュニケーションギャップが及ぼす影響>

- ・ 摩擦やギャップの存在は、自分たちの住み心地に大きく影響する。
- ・ もちろん安心して住める街であることを望むが、そのために楽しみややわらかさ、暖かさが消えてしまいそうな論議はやめてもらいたい。
- ・ もっと街全体で、世代間交流というかコミュニケーションできる機会が増えると、次第につまらない論議も少なくなるように思う。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ 団塊ジュニア世代については、マイペースのイメージ。自分のやりたいことを優先する。
- ・ ポスト団塊世代は、協力的な人が多いが時間がない人が多い。
- ・ 団塊世代の人々は、頼れる人も多いが、頑固な人も多い。
- ・ 団塊世代以前の人々はまとめ役として苦勞している。
- ・ 私のイメージはあくまでもこの地域でのイメージ。きっと人それぞれで世代のイメージ格差は本当はないのかもしれないが。

<各世代への要望>

- ・ ポスト団塊世代には、より家族や地域との時間をとれるようにしてもらいたい。
- ・ 団塊世代以前には、まとめ役としてのご苦勞もあるが、仕切りすぎは禁物。

<世代の見方変化>

- ・ PTAのご両親の様々なご意見に理解不可能なケース。
- ・ 子供のことも自分のこと。
- ・ 学校の責任のことばかり。
- ・ 世代に関係なく、「親」とのコミュニケーションの難しさを感じる。

〈自身の変化〉

- ・ 子供会で、事務局をやったときには、子供たちの喜んでくれる声は何よりも力になった。
- ・ 何のためにやっているのかが、はっきり見えていれば怖いものはないと思うようになった。

〈年金負担〉

- ・ 家計には負担が大きくなってきていますが、子供たちの将来のためにもみんなを支えなければならない状況だと認識。
- ・ ただ、不正事件はなんとかしてほしい。

● コミュニティ活動について

〈地域への参加〉

- ・ 子供が小学生なので、学校(PTA)を通じての参加が主となるが、できるだけ地域とかかわっていきたいと思っている。
- ・ ただ、活動するのは意外と大変です。

〈世代間交流に必要なもの〉

- ・ 会議だけでなく、何かいっしょにやる機会、体験を共有できる何かが必要。

〈気になる事例〉

- ・ 特にありません。うまく進んでいるPTA活動があったら知りたい。

〈希望するコミュニティ〉

- ・ 皆が参加しやすいしくみと雰囲気づくり。
- ・ 一部の色のついたコミュニティに見られがち。
- ・ 偏見のない社会になってほしい。

〈地域へのかかわり方〉

- ・ 子供の成長とともに、かかわり方もかわってくると思うが、まずは新しい学校活動に参加していくつもり。

(3) 対象者 C

● プロフィール

- ・ 年齢 42 歳
- ・ 性別 男
- ・ 居住地域 東京
- ・ 職業 メーカー会社員
- ・ 家族 3
- ・ 地域活動 少年サッカーコーチ

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ 子供よりもその親においてギャップを感じている。
- ・ 子供とは毎週練習時にコミュニケーションもとれるし、スポーツを通じて信頼関係も生まれるが、親とはなかなか接点がない。
- ・ 年に数回の保護者会があるが、理解を求めるにはまだまだコミュニケーションが足りない。
- ・ 親がサッカーに求める意味合いが様々であることも事実だが、もう少し会話が必要と感じている。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ 世代間のギャップというよりは、人それぞれ。
- ・ 理解ある人もいれば、なんでも反対する人もいる。
- ・ そうした社会の中でどうしたら地域活動を進められるのかは昔からのテーマ。
- ・ 少年スポーツもみんながひとつになれる重要な地域活動。

〈家族のコミュニケーション〉

- ・ 家族だから意志疎通できているとは限らない。
- ・ 昔と違って、生産活動も食事の時間も家族全員バラバラのケースがほとんどの時代。努力しないと落とし穴がある。

<コミュニケーションギャップが及ぼす影響>

- ・ コミュニケーションの難しい状況が続くと、すべての社会活動が行き詰まる。
- ・ 何もかも、コストに反映するようになり、意志疎通のないサービスがまん延することになりかねない。
- ・ ただ、すべてを自分一人でスムーズに運ぶことはできない。
- ・ 物事を進めるにはいろんな障害もあるが、少年サッカー活動としては、あくまでも子供成長優先という原点に常に戻ってひとつずつ判断する。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ 団塊ジュニア世代については、まだ消極的に思うが誘えば協力してくれる。
- ・ ポスト団塊世代は、動いてくれるけどいまいちまとまりに欠ける感じがする。
- ・ 団塊世代の人々は、一定のこだわりを持っていて、子供への叱り方も厳しい。
- ・ 団塊世代以前の人々は、落ち着いていて確実なイメージ。
- ・ あくまでもコーチ陣のイメージとして。

<各世代への要望>

- ・ 団塊ジュニア世代には、これからのリーダーの主体となるのでがんばってもらいたい。

<世代の見方変化>

- ・ 子供たちと接していると、若い世代のほうはずっとましなのではと思えるぐらい、素直でしっかりしている。

<自身の変化>

- ・ 会社では、なかなか自分の得意分野を直接活かせる場面はまだ少ないが、サッカーは自分の力がストレートに評価され、そのまま指導の責任にもなる。
- ・ 地域の子どもたちを任されているという認識は大変強くなった。
- ・ その分、親へも注文が多くなっているかもしれない。

〈年金負担〉

- ・ 年金問題というのは、今後自分にとってどういうメリットとデメリットが発生するのか、あまり具体的に考えたことはない。
- ・ しかし、年をとったら多少なりとも年金で生活を支援してもらえるとという安心感が必要だ。国の制度が変わるのはしょうがないけど、お互い様の原理で続けられるべきものだと思う。

● コミュニティ活動について

〈地域への参加〉

- ・ 基本的には少年サッカーのコーチという役割の中で地域と接していきたい。
- ・ 子供とのコミュニケーションは当然だが、それを見守る保護者ともより密接に様々な活動をいっしょにやっていきたい。
- ・ この少年サッカーチーム(小平九小 FC)は、民間クラブではなく、お父さんたちが運営するコーチ 28 名、選手 88 名、総勢 116 名の自主運営組織である。



お父さんたちのコーチ運営による少年サッカーチーム

〈世代間交流に必要なもの〉

- ・ 一生懸命やっていると何かが見えなくなることもある。善かれとあっていても意外なところに盲点があったりする。
- ・ 世代間交流で大事なことは、目的ができるだけ絞られていることと、その活

動は、あまり強制的ではなく、ゆるやかな関係が必要に思う。

- ・ また、お互いに「気づき」が重要で、何か気がついたところは、その場でどんどん言い合って処理していかないと、噂や文句ばかりが多くなる。

〈気になる事例〉

- ・ 別な小学校では、夏に防災訓練を含めて、学校のグラウンドでキャンプ体験を開催している。
- ・ 有事の時のコミュニティの具体的な姿を一度体験しておくことは大事だなと最近つくづく思う。

〈希望するコミュニティ〉

- ・ もっとお父さんにがんばってほしい。

〈地域へのかかわり方〉

- ・ いろいろとやっていきたい気持ちはあるが、時間と体力の問題もあり、自分ができるところから無理をせず参加していきたい。

● その他ご意見

- ・ コミュニケーションギャップが生じているから、そのために何か対策を講じるというやり方は得策ではないように思う。別な目的意識でやっている活動がそうしたギャップを埋めていけるようにすべきで、コミュニケーションというのは形よりも心・気持ちのほうが大事。

(4) 対象者 D

● プロフィール

- ・ 年齢 45 歳
- ・ 性別 男
- ・ 居住地域 東京
- ・ 職業 デザイナー
- ・ 家族 4 人
- ・ 地域活動 小学校活動

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ 毎日の通勤電車に乗っていて、マナーという点からギャップを感じる。
- ・ 化粧、携帯電話、床座り、おしゃべり、座席ゆずり、ゴミや空き缶の置きっぱなし、自転車の違法駐輪、落書きなど、まだまだ理解不能な行動が多いと思う。
- ・ こうした行動に対して、なかなかコミュニケーションできる勇気と方法を持ってないでいる自分がかゆい。
- ・ マンション内でたむろする若者たちへの声かけなども同様である。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ 仕事で海外(米)に行くことが多いが、海外でのコミュニケーションギャップも日本と同じことがおきていると思うが、大人がまずははっきりとした態度をとるのが印象的だ。
- ・ 日本は黙って見ぬふりが多い。

〈家族のコミュニケーション〉

- ・ 地域においても、子は親以上にコミュニケーションをとっている。
- ・ 知らないのは親だけというケースも多いのでは。
- ・ 生活時間の複雑化により、家庭内のコミュニケーションが希薄になっていることも事実だろうから、状況を再認識すべきことかもしれない。

〈コミュニケーションギャップが及ぼす影響〉

- ・ 社会活動にどんどん支障が出ることになる。

- ・ 防犯も清掃も子育てもすべてサービス業のようなコストのかかるやり方でしか対応できなくなるのは危険ですね。
- ・ 祭りまでも外注するようになっては本末転倒です。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ 団塊ジュニア世代については、新しい概念を持ち合わせている人々。
- ・ ポスト団塊世代は、個性を再認識しようとしている人々。
- ・ 団塊世代は自信を持っている人々。
- ・ 団塊世代以前は、力とやさしさを持っている人々。
- ・ というイメージを個人的には持っています。人それぞれで違いますけどイメージとしてはこういうこと。

<各世代への要望>

- ・ 団塊ジュニア世代には、新感覚を実践してもらいたい。
- ・ ポスト団塊世代は、リバイバルものが流行っているように、市場のターゲットでもあるため、コミュニケーションの中心としても復活してもらいたい。

<世代の見方変化>

- ・ 私はよく、散歩のときに自分の考えがかわることが多いです。
- ・ ある日の朝河川敷を散歩していると、早朝からボランティアの人々がゴミ回収をしていることがありました。
- ・ 聞いて見ると様々な支部の人々がわざわざここまでやってきて作業をしているとのこと。周辺住民がやらないで、なぜ地域外の人々がこんなにやってくれるのか不思議な感覚でした。
- ・ ボランティア活動という目的においてこのエリアが対象となったようだが、私含めて、何かやろうという話(コミュニケーション)が地域から出ていないことに何やら納得のいかないことがありました。
- ・ 世代というよりは、それぞれの意識の問題とは思いますが、黙っていることを選択しがちなポスト団塊世代(私もそうですが)が、もうちょっとなんかとなければと思った瞬間でした。

<自身の変化>

- ・ コミュニケーションは、本当に理解してないと言いたいことを言えない。
- ・ デザインもぼやーっとしているイメージだけでは何も伝えきれない。
- ・ 自分は、常に本物の情報や本物のモノを確かめることにしています。
- ・ そうでないとコミュニケーションはいいかげんで希薄になっていきます。

<年金負担>

- ・ 自分のためにも、世のためにも頑張るしかないでしょう。

● コミュニティ活動について

<地域への参加>

- ・ なかなか接点が見つけれないでいますが、まずは私の得意なデザインという世界で何か機会がつかればとも思います。
- ・ 現在、学校の先生方と新しい授業の組み立てなども検討したいというプロジェクトがたちあがりそうなので、まずはそうしたところからがんばっていきましょうと思います。

<世代間交流に必要なもの>

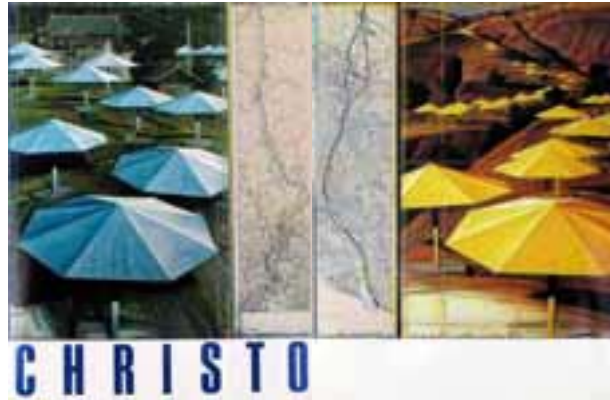
- ・ それぞれ思っていることをはっきりと言う、はっきりと形にすることが大事だと思います。
- ・ 構想の絵1枚でもみんなの理解は進みます。
- ・ よく自治会とか、長い長いつまらない(失礼)会議が続くのですが、それぞれイメージを固めていないというか、ああ言えばこう言うの繰り返しが多いように思います。
- ・ 世代間交流にも目的や実施計画を明確にして進めることが、参加しやすさにもつながると思います。

<気になる事例>

- ・ かなり前のアート作品ですが、水戸でクリストというアーティストが田んぼも含めて町一面に数千本の大きなアンブレラ(傘)を設置していくというプロジェクト(インスタレーション)が開催されました。
- ・ 彼の作品は傘が作品ではなく、それを設置するまでの過程(説明や交渉、制

作や設置の協力など)プロジェクトそのものが作品だというものでした。

- ・ いつもは結成されない、ある日突然やってきたプログラムに町をあげて取り組み、日本中からボランティアが集まるといったコミュニティの形成は大変興味深いものでした。



<http://tonton1234.ameblo.jp/entry-cc1c2f5adfc77f1795e27db01f86a07b.html>

クリストのアンブレラプロジェクト

(三太・ケンチク・日記ホームページより)

- ・ また、同様にアーティストたちが始めた「バザールカフェ」がおもしろい。
- ・ 京都で、様々な社会活動をやってきたグループの共同ミーティングプレイスとして運営されているカフェですが、「コミュニティの中のカフェ」という形態で、いわゆるクイックカフェではない。
- ・ 「お茶のみ場」からはじまる安心感、信頼感、誘発性・・・みたいなことを「場」を提供することから始めている。
- ・ プロジェクトメンバーの小山田氏は、以下のように述べています。

―― 社会の様々な現実に対して、個人がリアリティを感じられるとしたら、それは表象的ステータスではなく、「現場」そのものの成り立ちに左右されるのではないか。良き風景は、良き風景を誘発する。リアリティを持った人々がつくり出す「現場」は、それに接した人の「現場感覚」を誘発する。――

(建築学会誌のカフェ特集号から引用)



バザールカフェ店内

- ・ 詳しくは下記 URL 記事を参照してください。

http://www.dnp.co.jp/museum/nmp/artscape/special/0007/artcafe/taiwa_1.html

<希望するコミュニティ>

- ・ なんでもかんでもということではなく、しっかりとテーマ性をもっているコミュニティ。

<地域へのかかわり方>

- ・ やるからには責任を持ってという気持ちだが、いまだに何かできているわけではありません。

● その他ご意見

- ・ 交流を目的化しないほうがよいと思う。

(5) 対象者 E

● プロフィール

- ・ 年齢 46 歳
- ・ 性別 女
- ・ 居住地域 東京
- ・ 職業 菓子店経営
- ・ 家族 4 人
- ・ 地域活動 中学校保護者会

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ あんまりギャップを感じてはいないほうです。
- ・ いろんな地域で事件や摩擦のドキュメンタリー番組をみたりしますが、自分の地域はまだ大丈夫かなとも思っています。
- ・ ただ、世の中のコミュニケーションギャップは認識はしています。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ コミュニケーションギャップが生じる背景には、社会の様々な課題もありますが、やはりそのご家庭の環境に大きく影響していると思います。
- ・ ご両親が何にたいしても前向きに取り組む姿勢のあるご家族は、子供も必ずそういう育ちです。
- ・ ケーキ教室を開催している関係で、「食」に関する話題が多いのですが、共働きで忙しくても自分の趣味を活かそうとしている方々はコミュニケーションが豊富です。

〈家族のコミュニケーション〉

- ・ 家庭内には様々な話題がのぼるわけですが、わが家では仕事のことよりも学校の話が増えてきました。
- ・ できるだけ子供たちとも話をする時間をつくろうと思いますが、それぞれの時間に制約されているのが現状です。
- ・ おしゃべりのできる空間と時間が必要ですね。

<コミュニケーションギャップが及ぼす影響>

- ・ ギャップが生じたらなかなか難しい局面に立たされるでしょう。
- ・ できることなら、そうならない前にいろいろとがんばらなければいけないのです。
- ・ 人は一度傷つくと癒すのに時間がかかります。社会がかなり低迷ムードとなりその地域に住むことを拒否するでしょう。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ 団塊ジュニア世代については、センスがなかなかよい方。
- ・ ポスト団塊世代は、新しい自分探しをしている方。
- ・ 団塊世代は私から見て少しあこがれな世代。

<各世代への要望>

- ・ 団塊ジュニアは、ハイセンスの持続性に期待。
- ・ ポスト団塊世代は、まだまだ変身の可能性あり。

<世代の見方変化>

- ・ 自分の子供が吹奏楽部に入部してから、保護者や講師の方とも交流が増え、これまでにない世界が広がりました。
- ・ 全国大会に向けた支援活動は、普通では味わえない協力体制と達成感がありました。
- ・ コミュニケーションギャップなど全くなく、各世代とも一丸となれたと思います。

<自身の変化>

- ・ 吹奏楽全国大会進出に向けて、各世代の方とも話しやすくなりました。
- ・ きっかけは重要ですね。

<年金負担>

- ・ しくみとして必要なものでしょう。
- ・ ギャップが年金問題まで影響するほどの社会は恐ろしい。

● コミュニティ活動について

〈地域への参加〉

- ・ 現在はケーキ教室と中学校の保護者会が大きな接点となっている。
- ・ ギャップが発生している要因としては、それぞれの役割がなかったり、メディアが発達しすぎたりということもありませんか。
- ・ 昔から地域のお祭りはそれぞれの担当でやることはいっぱいあったり、連絡もメールはありませんから、必ず寄り合い所で顔を合わせて打ち合わせしているのですが、なかなか放っておかれなかったでしょうが、今は少人数でもあつという間にできてしまうことがよくない面でもありますよね。

〈世代間交流に必要なもの〉

- ・ なんといっても「話題性」というか「何をするか」でしょう。
- ・ なにもないのに、交流しろと言われても変ですよ。
- ・ 必然性がないとなかなか人は動かないし、いっしょにはなれない。
- ・ 地域ではなかなか共通の話題が少なくなっているように思いますね、

〈希望するコミュニティ〉

- ・ いろんな方々が集ってやるのですから、時間をかけても課題をはっきりさせたり、それぞれの気持ちというか意識を確認し合う時間が必要だと思います。
- ・ 大変だけどそこを通過しないとあとで大変なことになる。

〈地域へのかかわり方〉

- ・ せっかくケーキをやっていますので、皆さんの「食欲」を刺激するあたりで何かお手伝いできたらいいなと思っています。

(6) 対象者 F

● プロフィール

- ・ 年齢 57 歳
- ・ 性別 男
- ・ 居住地域 東京
- ・ 職業 会社役員
- ・ 家族 5 人
- ・ 地域活動 中学校活動

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ 都会に出てきてから、しょっちゅうです。
- ・ なかなか道端で話をしたり、縁側でお茶話をする環境がないです。
- ・ 田舎ではそれがギャップを埋めるしくみだったのでしょうけどね。
- ・ 地域では、あんまり人と話をする機会がないので、マンションに住んでいる方々はほとんど知らない。田舎では考えられないことです。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ 会社でも、結論は急ぐのだが、じっくり考えてのことだから疑問の残るケースが増えているように感じる。
- ・ 用はメールで済まし、客先ともちゃんと話していない。細かい部分で意志疎通できていないようだ。

〈家族のコミュニケーション〉

- ・ 父親を中心とした食卓が、テレビやペットを中心とした食卓に様変わりしているわけで、私たちの世代が入れ場所禁煙とともにどんどん狭くなっているのを実感する。
- ・ コミュニケーションがないわけではないが、なあなあというか、威厳がないというか、まあまあという感じですかね。
- ・ 犬が一番大事にされておりますわ。

〈コミュニケーションギャップが及ぼす影響〉

- ・ 田舎にいてと思いますが、こんなコミュニケーション不足で物事進めようとす

ると、自治が成り立たないという危機感にかられますね。

- ・ 誰の意見と誰の力添えで、ひとつひとつが進められているのかが、全く見えない。おいてきぼりにあっている感じするのは自分だけやろか。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ ポスト団塊世代は、紆余曲折あるが、いっしょうけんめいやっているのではないですか。
- ・ 団塊世代はもうちょっと自身もってしっかりやらんとあかん一。

<各世代への要望>

- ・ 団塊ジュニア世代には、この地域でも顔の合わせられる機会がほしい。
- ・ ポスト団塊世代は、働き盛り。なかなか時間がもてないかもしれんが、地域のことやらんと罰があたる。
- ・ 我ら団塊世代は、素直に聞いて、よく考える立場だな。
- ・ 団塊世代以前の方々からは知恵をもらわんと。

<世代の見方変化>

- ・ 近くのマンションでたむろする若者の対応を住民の力で解決していくというNHK番組を見た。こんな近くでそんなことがあったんかとびっくりしたが、最後は若者がマンションの夏祭りを手伝うという落ちになっていた。
- ・ ようは話せばわかるということと、大人がだまっとるから若者もあいさつせんということだったようだ。
- ・ この地域では、世代間のあたりまえの会話がなかなかできていないことにおどろいた。

<自身の変化>

- ・ コミュニケーションに関して、自身がか変わったことはメールです。
- ・ メールができるようになったのです。会社でも必要だが、家族や友人も結構やりとりするもんだという感想。
- ・ ただし、コミュニケーションしているつもりなのかもしれん。

<年金負担>

- ・ 私はもうすぐ世話になる。みんながんばってください。

● コミュニティ活動について

<地域への参加>

- ・ 現在は中学校の課外学習等のお手伝いをしたりしている。いきなり地域で何かといっても大きすぎてよくわからない。
- ・ 声のかかる範囲から参画していきたい。
- ・ また、昨年度高校のログハウス建設にも参画した。
- ・ 林間学校の老朽化に伴い、新しい宿泊棟を建設することになったのだが、保護者会、OB会が中心となって、自分たちの手でつukれないものかということで、専門チームを結成。
- ・ 生徒も含めて、基礎からペンキ塗りまで共同作業による建設にチャレンジした。モノをいっしょにつくるということは、愛着とともに参加した人しかわからない一体感というものが生じる。
- ・ 参加した人は、自分が作業したところ誇らしげに語りながら利用してくれることでしょう。



立科寮のログハウス

<世代間交流に必要なもの>

- ・ 公民館のような「場」は必要だと思う。何かやるときは、どこかに集まって気持ちを確認せんといかん。

〈希望するコミュニティ〉

- ・ 最初から完璧にはできない。
- ・ 行き詰ったら修正がきく程度のやり方をしていると長続きしない。
- ・ まあ、会社も一緒やけどフレキシブルに対応していかんとおさまらん。

〈地域へのかかわり方〉

- ・ これから発見できると思う。

(7) 対象者 G

● プロフィール

- ・ 年齢 55 歳
- ・ 性別 女
- ・ 居住地域 東京
- ・ 職業 教員
- ・ 家族 4
- ・ 地域活動 よさこい踊り

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ 本来、きちっと連携できていないといけない PTA においてギャップを感じている。
- ・ 学校の意見とご両親のご意見がすり合わないケースが多く感じる。
- ・ 学校という立場や役割の認識が多様化していることもありますが、なんともしっくりこないギャップが存在する。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ 教職員間でも、ギャップはあります。
- ・ 意見が違うのは理解できるのですが、価値観が違うという話になるとお手上げです。
- ・ 組合という問題も学校ではおおきいのです。

〈家族のコミュニケーション〉

- ・ 夫婦の会話では、自分の子供や家族の話ではなく、他の生徒や保護者への対応の話が多い。
- ・ 子供たちはありがたいことにまだ私たちによく話をしてくれているのでそんなに心配はしていない。
- ・ ただ、一部のご家庭では話をする時間が短くなっているのが現状。

〈コミュニケーションギャップが及ぼす影響〉

- ・ コミュニケーションというのは意志疎通という面で、やれていないと協調性

もなく、自分勝手な行動となります。

- ・ 学校という場では、素直にだれとでも話せる人物に育ってほしいですし、そういう場が大事だと思います。
- ・ おうおうにして、陰で悪口を言うのはご両親だけです。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ 団塊ジュニア世代については、極端な方もいますが、よく意見を言います。逆にポスト団塊世代は、静かで遠慮している方が多いように思われます。
- ・ 団塊世代や団塊世代以前の人々は、なかなかのパワーの持ち主で意外と元気なのです。

<各世代への要望>

- ・ ご家族の入院が増えているようです。特にポスト団塊世代は健康管理に気をつけていただきたい。体あつての人生ですし、地域活動ですので。

<世代の見方変化>

- ・ 学校での殺傷事件等が続いているので、特に常日ごろのコミュニケーションギャップが気になりました。
- ・ まずは教員同士の意志疎通、形として市民にわかってもらえるような活動とと思い始めました。

<自身の変化>

- ・ 私自身は、「よさこい踊り」に出会ったから、生徒たちへの指導も含めて、地域の方がともずいぶん会話が増えました。

<年金負担>

- ・ 国の計画性は、よろしくお願ひしたいところですが、世代間コミュニケーションの課題に限らず必要なものと思います。

● コミュニティ活動について

〈地域への参加〉

- ・ お祭りのように、誰でも参加しやすいもの、伝統行事的に継続されていくものは、コミュニティとして重要な要素だと思います。
- ・ よさこい踊りを通して、毎年新しいお友達を迎えながら継続的な活動を展開していきたいと思っています。

〈世代間交流に必要なもの〉

- ・ 誰かが思い切って言い出しっぺになること。
- ・ 行動力は協力してついてきます。

〈気になる事例〉

- ・ 最近よくみかける BOX ショップが気になります。
- ・ お店に設置されている 1 箱スペースを自分の作品でディスプレイして販売を委託するしくみですが、喫茶とも複合されたおしゃれな店も多いです。
- ・ 私たち団塊の世代のおばさんたちも一生懸命に自分の趣味の作品を出展して、見せるだけに飽足らず、気に入った方々に販売をしているのです。
- ・ レベルの問題もありますが、そうしたロコミというか、コミュニティ的な流れでの小さなお店が活性化しているのは、おもしろい現象だと思います。

〈希望するコミュニティ〉

- ・ 無理をすると体がきかなくなる年齢になりました。私たちでできる役割を共有してもらえるかたちを希望します。

〈地域へのかかわり方〉

- ・ これまで学校という場を中心に、教員として様々な地域でかかわってきましたが、これからは地域の祭りという役割の中で、一住民としても積極的に参画していきたいと思っています。

● その他ご意見

- ・ 学校という場にながら、教員ではできないこともいっぱいあります。ぜひ学校という場を使った地域活動を地域の方々から推進してもらいたいです。

(8) 対象者 H

● プロフィール

- ・ 年齢 57 歳
- ・ 性別 男
- ・ 居住地域 鹿児島
- ・ 職業 町議員
- ・ 家族 6
- ・ 地域活動 太鼓伝承

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ 地域のお祭り等の実行組織を運営するときに、感じるが多くなった。
- ・ 青年団や消防組織、商店街といった組織が集まりますが、都会とっしょでなかなか後継ぎが少なくなり、人材不足という悩みがクローズアップされるようになってきた。
- ・ だいたい引き継がれてきた伝統芸能も存続の危機にたたされている自治体も多いと思うが、我が町でも傾向は同じ。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ 小さな町でも都市化とともに、次第にコミュニケーションは希薄になっている。
- ・ 農作業を共同でやっていた頃は隣近所よく知った中だったが、若者の現象とともに、そうした生産活動も小規模になってきた。

〈家族のコミュニケーション〉

- ・ 特に変化はないが、子供が少ない分、町内の子供たちはよく知っている。何をしてもまだ比較的いっしょに行動するので、都会よりはコミュニケーションはとれていると思うが。

〈コミュニケーションギャップが及ぼす影響〉

- ・ 町の機能として重大な障害が生じる。
- ・ 小さな町としてのかたまりが薄らぐと、町の生活にメリハリがなくなる。
- ・ 農業生産も祭りも、商店街も一定の流れで町全体としての生活サイクルが重

要である。

- ・ コミュニケーションのバランスが崩れると町役場も何でも屋となり、本来の自治活動が推進できなくなる。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ 団塊ジュニア世代は、町では即戦力。ポスト団塊世代は、まじめなやつが多くよく協力してくれる。
- ・ 団塊世代は、がんこおやじが多いがよくまとまっている。団塊世代以前が一番元気かもしれん。

<各世代への要望>

- ・ 現代の社会状況では、ポスト団塊世代と団塊ジュニアの力の出しどころだと思う。

<世代の見方変化>

- ・ 太鼓坊主(てこぼうず)という青年団を中心とした太鼓演舞集団を結成しているが、この活動から地域の世代間問題は前向きに改善されはじめた。
- ・ カッコいい、エネルギッシュな太鼓の響きは、老若男女問わず感動を与えることになった。
- ・ 祭りは当然だが、各地域での催事やコンテスト、さらには韓国との交流事業の代表メンバーとしても活動するようになり、町の誇りとなっていく。
- ・ 新聞やテレビで話題にあがるたびに町民が自分のことのように話をしはじめる。この現象は甲子園、オリンピックやワールドサッカーといったスポーツ競技とも似ていて町が一丸となって応援する気持ちになれるものである。



<http://www.tekobouzu.com/top.htm>

<http://www.kamou.co.jp/tekobouzu/>

蒲生郷太鼓坊主ホームページより

<自身の变化>

- ・ 私はこの推進役としてお手伝いさせていただいたこともあり、現在は町議員として新しい町づくりとして、太鼓や和紙、竹炭の伝承なども推進している最中です。
- ・ 町内のコミュニケーションに限らず、世界に仲間が増えたことは、町としても私個人としても最大の宝物です。

<年金負担>

- ・ 高齢化の進む我が町では大変な課題。これがないと町民のほとんどは暮らせません。
- ・ 若い連中にも戻ってきてもらい、町内で自立できる経済状況にしたいです。

● コミュニティ活動について

<地域への参加>

- ・ 引き続き伝承すべきものをきっちり守っていくことが使命だと思ってます。

<世代間交流に必要なもの>

- ・ 我が町には、日本一の楠の木がありますが、そこには神がやどっていると信

じて社を奉っています。

- 日本人のコミュニティには、こうした「神」にまつわる神事やお祭り、伝統芸能にまつわる組織がたくさんあります。
- 人々が集まるちょうどよい象徴が「神」なのかもしれません。そうでなければ、なかなか続けられるものではありません。

<気になる事例>

- 紹介していただいて知りましたが、地域の踊りをロボットに伝承するという試みが行われました。
- 二足歩行のロボットが会津磐梯山踊りを踊ったのです。東京大学生産技術研究所が進めている文化遺産のデジタル保存プロジェクトの一環で、産業技術研究所のヒューマノイド研究グループの共同研究により実現したようです。
- 伝承を科学の力でもやれるという部分と、ロボットの登場により、このニュースは、踊りにあまり関心を持っていなかった地域の子供たちにも大変興味をもってもらえた事例だと思えます。



http://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2005/pr20050112/pr20050112.html

(産業技術総合研究所ホームページより)

<希望するコミュニティ>

- 代々引き継げるしくみと、その継続性のためのコンテンツの維持が大事だと思っています。

〈地域へのかかわり方〉

- ・ 太鼓伝承という活動と、新しい音づくりやコラボレーションも含めて次世代型の活動展開を進めたい気持ちはあります。
- ・ 大変難しい課題ですが。

(9) 対象者 I

● プロフィール

- ・ 年齢 64 歳
- ・ 性別 男
- ・ 居住地域 東京
- ・ 職業 会社役員
- ・ 家族 4
- ・ 地域活動 お父さんの楽校

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ 世の中には、いっぱいコミュニケーションギャップは存在すると思っていましたが、ここで話題としているギャップは、私たちの想像以上にややこしい問題となってしまっていることですね。
- ・ これまでは意見を戦えさえすれば、解決の糸口が見えてきていたものですが、現状のコミュニケーションギャップというのは、どうも質が違うようで、相容れない何か微妙な爆弾をかかえているようですね。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ 私の仕事場でもギャップはあります。
- ・ 特に言葉の壁や文化の違いを理解するのは大変難しい。
- ・ ただ、個人の心の中にある特殊な概念を解き明かすのは容易ではありません。

〈家族のコミュニケーション〉

- ・ 家族のコミュニケーションに変化があるとしたら、メールが追加されたことでしょう。電話が減って、メールに変わった。
- ・ もちろん、食卓での会話は基本的にかわらないのだが、母親から「ごはんはいるの?」、「牛乳買ってきて!!」、「今日は娘が塾だから帰りにいっしょに帰ってきてね!!」などと、携帯メールがわが輩を奴隷のように指示するツールと化しているようだ(笑い)。
- ・ とはいいつつ、もうメール無しでは仕事もできないほど普及してしまい、田舎のおじいちゃんたちには孫はホームページで見てね!!の時代である。

- ・ いったいどう理解したらよいのか、決して悪いツールでもいやなものでもないのだが、本当にこれでいいのかという不安も若干残る

<コミュニケーションギャップが及ぼす影響>

- ・ 問題のコミュニケーションギャップですが、これは高度経済成長以降のライフスタイルの多様化や、過疎化による地域の地縁、組の崩壊、市町村合併による自治効率化追及、インターネットの普及などさまざまな要因も関係していることでしょう。
- ・ しかしながら、コミュニケーションがとりにくくなっているという現象は、結構根の深い問題で、子育て、人間形成、教育といった分野にも普及するものとして悩みは大きい。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ 団塊ジュニア世代については、特にイメージはないが、ポスト団塊世代は、つかみどころがない感じ、団塊世代はまだまだ手ごたえがあるが、団塊世代以前は社会のスピードにそろそろついていけない。

<各世代への要望>

- ・ 私がとやかく言うことではないが、一生懸命生きましょう。

<世代の見方変化>

- ・ 私は仕事から、ロボット博士や工学博士、医学博士といった研究者との接点がたまたま多いのですが、何かに没頭している人たちには、共通した魅力があります。
- ・ 世代の違いなんがなく、あるテーマにずっと携わってコツコツ研究をひも解いていく姿に感動するのです。
- ・ そして、本物の研究をしている人々のお話は大変おもしろいし、どんな質問をしても答えが帰ってくる。

<自身の変化>

- ・ 研究を取材する仕事をしている間に、こうした研究者が、小学校の子供たち

を相手に授業をしたらどんなことになるのだろうと思いはじめました。

- ・ 学校ではなかなかできない何か楽しい授業をやってみようかと学校関係者に相談したところ、実現することになりました。
- ・ 私は、自分の中で何か子供たちに教えたいという気持ちがずっとありましたが、自分にそのすべがありませんでした。

<年金負担>

- ・ ギャップが原因で、年金も払わないなんてとんでもない!!が私の意見。

● コミュニティ活動について

<地域への参加>

- ・ さまざまな分野の研究者を招いて、新しいテーマ授業を推進。子供たちとのあたらしいコミュニケーションスタイルを模索するために、お父さんたち有志が集まって「お父さんの楽校」を企画・運営し始めました。
- ・ 少年サッカーのコーチ陣が協力してはじめたのがきっかけですが、絵本作家による第一回お話し会には200名を越える参加者で盛況となりました。
- ・ その後、折り紙博士や夜空の観測会、ミジンコを飼おうなど楽しい次々と楽しい授業が展開されました。
- ・ 今後、世代を越えた様々な研究や体験を子供たちにつなげていく活動をしていきたいと考えています。



お父さんの楽校案内チラシ

- ◇いわむらかずお氏(絵本作家)による自然と動物のおはなし会
- ◇阿部恒氏によるおりがみと算数
- ◇映画監督の羽生進氏(動物奇想天外)の「勇気をもつこと」について
- ◇教育センタープロデューサー伊藤昌市氏による夜空の観察会
- ◇渡辺泰徳氏によるミジンコを飼おう
- ◇国立科学博物館の佐々木氏によるブーメランをつくろう、など

<世代間交流に必要なもの>

- ・ 仲間でしょうか。
- ・ いつでもいっしょにやれる様々な世代の仲間が宝となります。

<希望するコミュニティ>

- ・ 楽しいことをやっているうちは継続されます。
- ・ 楽しさのあるテーマやしくみを採用しましょう。

<地域へのかかわり方>

- ・ これからも様々なアプローチがあると思います。私一人でがんばるのではなく、皆でかかわれる何かをこれからも探しましょう。

● その他ご意見

- ・ 地域コミュニティとか活動には、やりやすい適切な規模があると思います。学校という単位は大きすぎると思うが、とりあえずはフィールドとしてここからはじめてみることにしました。

(10)対象者 J

● プロフィール

- ・ 年齢 67 歳
- ・ 性別 女
- ・ 居住地域 東京
- ・ 職業 専業主婦
- ・ 家族 2
- ・ 地域活動 団地組合

● 世代間のコミュニケーションギャップについて

〈コミュニケーションギャップを感じる時〉

- ・ 特に感じてはいない。
- ・ もしそんなに大変なことになっているのであれば、悲しいことです。

〈地域や職場でのギャップ〉

- ・ 私はお話をするのはあまり得意ではないので、周りに理解してもらえないのは仕方がないかなと思ったりもするのですが、聞いてくれる相手がこの団地にいるだけでも幸せです。

〈家族のコミュニケーション〉

- ・ 私の夫がパソコンをやっています。
- ・ 私は全くわかりませんが、夫が長野の孫の写真をパソコンで見せたり、メールを読んでくれたりします。
- ・ 手紙もうれしいが、今はこうした便利なものがあるようで、それはそれで使えれば楽しそうではあります。
- ・ もちろん子供たちは電話もくれます。年をとると孫からの電話は楽しみなんですよ。

〈コミュニケーションギャップが及ぼす影響〉

- ・ 団地では、いろんな方々がお話を進めています、若い人や私とおなじくらいの方も同様に会議に入ってやっていますよ。
- ・ 年の功で役に立てることもあるのでしょうか。

- ・ 考え方にずれがあるとしたら、どこかで話が折り合わないことになるわけですよ。私たちの田舎でも難しい話には、長老も出で話をまとめていました。折り合わないことをなんとか収めるのは年を重ねた方のほうが上手かもしれませんね。
- ・ そうした方はこの地域に長い間住んでいて、引っ越すわけにはいかないのですから、なんとか解決しないとイケない責任感もあることでしょう。

● 各世代のイメージについて

<世代別イメージ>

- ・ 特にはございません。

<各世代への要望>

- ・ もっといろいろと頼んだほうがよいのかしらね。

<世代の見方変化>

- ・ 子供が結婚したとき(息子がイタリア人と結婚)に、世界の人も日本人と同じだということを知って安心しました。
- ・ 私たちにとっては、世代といっても戦争体験者とそれ以降の方くらいでしかわかりません。
- ・ 戦争という苦しみをともにしてきた方とはやはりさまざまな場面で共感する部分がございます。

<自身の変化>

- ・ このマンションに引っ越してきて、皆さん優しい方ばかりというイメージで実際今でもそうです。
- ・ 田舎よりも柔らかい対応なのです。田舎はきつい部分はきついですよ。いろいろとつきあいも大変です。
- ・ 若い夫婦も多いところですから、幼時から中学生くらいまで、たくさんの方々と毎日会います。声もかけてくださいます。ここに来てよかったと思っていますよ。

<年金負担>

- ・ 私共はお世話になりますので、感謝です。ぜひお若い方々にもがんばっていただきたいですね。

● コミュニティ活動について

<地域への参加>

- ・ 団地という性格から、集まりやすいので、日々の団地組合のお手伝いや、夏祭り等は楽しみにしていますよ。
- ・ 私は毎年、お友達を夏祭りに呼んでいます。他の地域に出向くというのは楽しみなことです。
- ・ 新しい楽しみをいただけるので、私も元気なうちに出かけていこうと思っています。

<世代間交流に必要なもの>

- ・ お互い思いやりがあればうまくいくのではないのでしょうか。
- ・ 若い人のお話や働きぶりは頼もしいですよ。団地組合ももう少し若返ったほうがよろしいかも。
- ・

<希望するコミュニティ>

- ・ 私もまだまだがんばれると思いますので、達成感のあることをいっしょにやってみたいです。

<地域へのかかわり方>

- ・ まだまだ勉強しないといけないですが、ゆっくと、納得のいくことをやるべきですね。

3-3 ヒアリング結果のまとめ

(1) 世代間のコミュニケーションギャップについて

- ・ 今回のヒアリング対象者においては、8割がギャップを意識している。
- ・ 仕事や PTA、地域活動の中でも、そのギャップの存在には気がついており、不安もかかえながら、現状維持というのが現実。
- ・ ギャップを感じている対象は、多くが若い世代や子供たちではなく、その両親だという認識が強い。
- ・ 様々なライフスタイルが混在する社会で、難しいコミュニケーション課題が生じているようである。
- ・ また、インターネットにおける BBS などへの書き込みがいろんな問題が潜んでいることも示唆している。
- ・ 家庭内のコミュニケーションは、足りていないとしながらもそれほどの危機感をもっているわけではない。
- ・ むしろ、携帯メールによる家庭内コミュニケーションを幅広い世代で利用している様子がわかる。
- ・ コミュニケーションギャップによる弊害は、社会活動に大きく影響するという意見が多いが、具体的な対策はとれていない。

(2) 各世代のイメージについて

- ・ 特に共通した特徴的なイメージを持っているわけではないが、お互いそれぞれの世代には期待をしている。
- ・ また、世代の見方が変わったことがあるかという質問に対しては、変化というよりはより世代の特徴の認識を強くしたり、あらためて問題認識を高めたという意見が多かった。
- ・ また自身の考え方の変化についても、ほぼ全員がさまざまなきっかけをもとに地域において各世代との積極的なコミュニケーションを志向していることがわかる。
- ・ また、田舎の自治組織の良さを再認識している意見もあった。

(3) コミュニティ活動について

- ・ 全員が、地域の何らかの役割を担っている。

- ・ 7割が学校関連での活動、3割が地域文化(踊り、太鼓、吹奏楽)といった関わりであった。
- ・ すでにこうしたコミュニティを経験しているため、問題意識も高く、課題も認識している。
- ・ これまでサラリーマンとしてどちらかという会社人間が多かった頃からすると、子供の成長とともに学校や地域との関わりについてもかなり高い意識でとりくみをしている。
- ・ コミュニティ活動の場として、学校の利用が多かった。また、事例にあるようなバザールカフェやログハウスといった新しい場の提供も興味深い。
- ・ さらに、お父さんの楽校のように、開かれた学校として楽しい学習プログラムを展開する事例も、新たなコミュニティを生む事例として興味深い。
- ・ 太鼓や踊りといった文化継承においては、祭りや神事といった日本独特の文化がコミュニティの形成・継続を下支えしている考えも見受けられた。

(3) その他

- ・ 世代間のコミュニケーションギャップを埋めるための活動ではなく、何か別な活動目的が結果としてそのギャップを埋めるものだという意見が多い。
- ・ また皆さんの意識には、コミュニティ活動に強く縛られたくはなく、やわらかな組織、やわらかい関係性を希望している。

第4章 世代間交流の事例調査

ここでは、各地で世代間交流を実践している7つの事例を報告する。

記述の形態は

- 1) 具体的にどのような活動をしているか
- 2) 目的は何か
- 3) どのような経緯で企画されたか
- 4) 活動を阻害している要因はなにか
- 5) 阻害要因をどのように解決したか
- 6) 今後の展開
- 7) この事例から学ぶこと

の順となっている。

4-1 廃校利用のあたらしいがっこう（山形県朝日町）

4-1-1 具体的にどのような活動をしているか

平成12年度から4つの小学校本校を失った朝日町の廃校活用を検討し、以下のような活動を行っている。

- ・廃校活用の意識を高めるための行事
- ・4校合同の研修会（平成16年の廃校を利用した行事と研修会）
- ・4校巡回大掃除
- ・4校巡回映画上映会＋おどろき板工作教室
- ・納豆づくり体験農業（豆栽培から豆腐、納豆づくりまで）＋そば栽培
- ・がっこうまるごとステンドグラス工作教室
- ・実験表現研究会展「寄り道」展
- ・夢見る音楽会 II＋ステンドグラス蝋燭工作教室＋セスナ機より蝋燭人形の人文文字撮影
- ・ドイツの地域づくり研究者を招いた4校合同研修会
- ・先進地視察
- ・詩人海野秋芳シンポジウム＋海野秋芳かけだしミュージアム＋地区の宝展
- ・影絵の夕べ

4-1-2 目的は何か

(1) 事業の趣旨

過疎地の廃校小学校を舞台に「あたらしいがっこう」を開設し、地区内外の子供たちや人々が相互に「おしえてーまなぶ」交流学习を繰り広げ、地域の環境と資源を活かした学びを通して地区コミュニティの核を再生する。

(2) 基本理念（目的）

日本の他の中山間地と同様、過疎化と少子高齢化に悩む朝日町は、平成12年度から4つの小学校本校を失った。小学校は、教育施設と同時に地域コミュニティの核として機能してきた。そのため、小学校がなくなることは、単に教育機関としての学校がなくなる以上に、地域の絆を失ってしまうことを意味していた。このように厳しい状況にある朝日町ではあるが、美しく大きな自然環境と豊かな産物、人々に伝わる生活文化や伝統など様々な“たからもの”に恵まれた土地でもある。それらの資源は、育み、活用していくことで次世代に引き継いでいかなければならないものである。廃校小学校の活用を考えることは、各地域の、そして朝日町の将来を考えることに他ならない。

小学校があることによって「子供のために」と思う気持ちが地域の心の一つにしてきた。そこで、地域の新しい中心施設として地域住民の力で「新しいがっこう」をたちあげ、廃校小学校を中心に地域の自然や風土や生活の中から地区内外の子供たちに伝えたいことを企画し、参加する人々が互いに「おしえてーまなぶ」交流学习活動を通して、小学校とともに失われてしまった地域の絆を再結束したい。

4-1-3 どのような経緯で企画されたか

(1) 大学等の高等教育機関との組織的連携

「新しいがっこう」のカリキュラムを支援するネットワークの構築と事務局は、東北芸術工科大学が担当している。これまでの住民と町役場と大学の関わり方は、平成13～14年度に廃校のある4地域の環境と資源“たからもの”の調査を、朝日町の受託研究と学内特別研究として、NPO朝日町エコミュージアム協会と合同で行い、朝日町学校跡地利用検討委員会では様々な視点から会を重ねて検討し、平成15年6月に全町民を対象に跡地利用計画案の報告会を開いている。そして、各地区を訪れて住民と協議を重ねている。旧水本小学校ではスタッフの一員として住民とともに準備をすすめ、平成15年11月に『夢見る音楽

会』を成功させている。このような流れの中で、住民と町役場をあげて廃校の跡地利用を検討していくことが合意されている。

今年度の事業では、ボランティアの学生や教員スタッフが、本委員会が企画する活動である納豆づくり体験農業で小学生の参加者を引率したり、小さなミュージアムで住民の展示を補助したり、またフェスティバルでは学生や卒業生自身も芸術祭に参加し、教員も補助を行っている。

(2) 住民の事業への参画の在り方

廃校小学校の活用は、各地域の将来を考えることに他ならない。各地域の住民は、「あたらしいがっこう」を立ち上げることで地域コミュニティの核の再生を目指している。これまでの活動は、住民とボランティアスタッフ、大学関係者と役場職員有志による、休日や夜間の無償の労働の積み重ねと各自の費用負担で実現した。

平成16年度は、文部科学省の生涯学習まちづくり支援事業の指定により、事業費の一部を助成金でまかなっている。しかし、行事を準備する人々の負担は未だに大きく、特に地域リーダーの多大な労働と費用負担を軽減することは今後の課題となっている。そのためには、将来的に採算性を考えた事業の展開が必要である。

4-1-4 活動を阻害している要因はなにか

活動を阻害している要因は、公共の財政難、町役場のリーダーシップの欠如、過疎地のメランコリー、豪雪などがあげられる。

4-1-5 阻害要因をどのように解決したか

- ・ 文科省の事業として、資金を調達した。(来年度の見通しは無い)
- ・ 町役場職員との協働を行えた。
- ・ 住民とのこまめな顔合わせによるコミュニケーション。食事を共にすることで母親たちが活躍した。
- ・ 体力を増強すること。

4-1-6 今後の展開

- ・ 5年間ほどを見据えた4校共通の目標を設定し、同時に4校の個性も磨く計画を作ってゆく。

- ・無理のない回数で行事を継続していく。
- ・住民が少しずつ自立していく兆しがあるので、その動きを後押しする。
- ・あたらしいがっこうを町全体の地域づくりリーダーとの交流拠点とする。
- ・国内や国際交流の視点を導入する。
- ・町役場に資金的支援も要請する。

4-1-7 この事例から学ぶこと

6年間で4校の小学校が廃校という事態は、過疎化のすすむ今後の日本の地方ではめずらしくないことかもしれない。小学校というコミュニティの格を失ったとき、親と子という世代間のみならず、子どもと子ども、親と親の関係も失われてゆくことの危機感はこの事例には表れている。それらは、この活動の主催者たちが感じている活動の意義や子どもたちの求心力、老人の知恵や地域をまとめる力のたいせつき、さらに体力のある若者ならでは地域社会での役割分担などの重要性を改めて感じさせる。そこには、危機感を抱きながらも、それらを楽しみに変えてゆく住民とボランティア、役場、大学、外部の人間の協力で生まれる相乗効果も含まれている。



図 4-1 準備会の様子 (提供：飯田恭子)



図 4-2 工作会 (提供：飯田恭子)



図 4-3 映画上映会 (提供：飯田恭子)



図 4-4 音楽会 (提供：飯田恭子)

4-2 学生助っ人隊（山形県西川町）

4-2-1 具体的にどのような活動をしているのか

豪雪地帯で知られ、過疎化がすすむ山間地の集落で行われるイベントに外部の若者たちが参加し、世代間の交流を行っている。

- ・毎年2月最後の週末（土・日）に実施される「大井沢雪祭り」のスタッフとして、地域外の若者が民家に宿泊をして、地域の人々と交流しながらイベントを手伝う。
- ・夏は、防火線の草刈りなどの手伝いをする。

4-2-2 目的は何か

- ・学生たちは、ボランティアとフィールドでの体験学習を行う。
- ・地元の住民たちは、若い人手不足の解消と外部の若者との交流を行う。

4-2-3 どのような経緯で企画されたか。

西川町大井沢地区では、平成2年に外部との接触が極端に少なくなる冬の時期のにぎわいを創出するために雪祭り（花火が名物の一つ）を始めた。10回で一つの区切りにしようという声もあった時に、人手不足とマンネリ化解消のために外部の若い力の導入を図ろうということで始まった。毎年30名前後の学生が参加しており、卒業後も会社を休んで参加するOBもいる。

要請を受けた大学のゼミでは、学生の社会勉強ということもあり、助っ人隊に限らず、様々な機会を捉えて外部の活動に参加するように勧めている。

4-2-4 活動を阻害している要因は何か

特にないが、年によって応募する学生が多すぎたり、不足したりすることがある。

4-2-5 今後の展開

この助っ人隊などとの交流活動が西川町の大井沢地区の農林水産祭むらづくり部門の天皇杯受賞（平成14年度）の理由の一つであるともいわれており、地元はこのような活動を当面は継続してゆく意向があるが、学生を送り出す大学ゼミ側では、もう少し日常的な交流に発展して、研究フィールドになることを期待している。

4-2-6 この事例から学ぶこと

若い学生たちは、その若いエネルギーをぶつけ、心の通う交流をする機会を求めている一方で、過疎・高齢化に悩む中山間地域も外部のマンパワー、特に若い力を渴望していることが実感される。

はじめはゼミの活動として、参加していた学生たちも先輩・後輩のつながりも出来、これらの活動を通じて、秋の熊鍋など、直接地元の人たちとの交流を行うようになり、様々な機会に若者が集まるようになった。さらに、はじめはあまり出てこなかった老人たちも最近顔を出すようになったといわれ、それが村の中の老人と中年の交流の場ともなり、地理的に細長く相互の交流の少なかった地区内の交流も進むようになったという効果も見いだせる。



図 4-5 雪祭り (提供：小川知伸)



図 4-6 雪下ろし作業 (提供：三田育雄)



図 4-7 草刈り (提供：三田育雄)



図 4-8 鍋を囲んで交流 (提供：小川知伸)

4-3 とみおか連 (横浜市金沢区)

<http://page.freett.com/tomiokaren/>

4-3-1 具体的にどのような活動をしているのか

- ・地域の芸能まつりに参加 (3月)
- ・お祭に向けてがんばろう会 (花火大会) (8月)
並木第一団地納涼大会参加
富岡八幡宮の祭礼のための特別練習を週2回ほど行う
- ・富岡八幡宮祭礼 (9月)
- ・PIAフェスタに参加 (11月)

・クリスマス会（12月）

その他 毎月2回、富岡西部町内会館にて7:00-9:00まで練習を行う。

4-3-2 目的はなにか

9月の富岡八幡宮の祭礼にて、町内自前のお囃子を持つことが目的であった。富岡の祭礼は7町会の連合で行なわれるが、西部町内会だけが自前のお囃子を持っている。まず、地元の祭りを他に頼らず運営してゆくことで、祭を将来に向けて続けてゆく。そのことが、次世代に続く街づくり人づくりにつながってゆく。

4-3-3 どのような経緯で企画されたか

富岡西部の祭礼は当初お囃子が無く、神輿会（色々な神輿を担ぎに行く趣味の会。富岡西部の神輿も、担ぎ手が少ないためこのような神輿会に依頼している。）のつきあいでお囃子を頼んでいた。その頼んでいた会は、町内でお囃子をやっていたため、その流れを教わろうというのがきっかけで活動が始まった。

4-3-4 今後の展開

今いる子供たちが下級生に指導してゆけるようにして、お囃子という枠からお祭り（町内）全体を仕切れる人材を育成してゆく。

4-3-5 この事例から学ぶこと

従来は普通に行われていた地域社会における世代間の伝承が、このようなイベントをきっかけとして復活することがある。それには熱い思いで活動を推進してゆく、起爆剤としての人材が必要である。このような熱い思いが子どもたちにも伝わり、地域社会の地縁的なつながりを強固にして、結果として安全に安心して暮らせる町を形成してゆくことにつながってゆくのではないだろうか。

「時間は掛かるが、やってできないことはない」「あきらめる気持ちが前進を妨げる」「環境が人を成長させる」など、まだ30代の活動推進者の言葉に、年配者たちも協力を惜しまない。



図 4-9 お囃子練習 (提供：今村太郎)



図 4-10 バザー参加 (提供：今村太郎)



図 4-11 お囃子発表 (提供：今村太郎)



図 4-12 クリスマス会 (提供：今村太郎)

4-4 長井まちづくりNPOセンター (あやっか) (山形県長井市)

<http://www.ayakka.org/>

4-4-1 具体的にどのような活動をしているのか

(1) あやっか

土壁・土間などの伝統技術である左官を用いて、空き店舗を改装して再活用する。制作は学生中心に行ったが、地域の住民も手伝いながら作業を進めた。完成した「あやっか」は、地域住民の交流の場となっている。

(2) 土壁アート教室

夏休み期間を利用して、昔行われていた足踏みによって土壁の材料を混ぜ、その土を1平方メートルの額の中に塗り、できあがった土壁をキャンバスにして、ビー球・タイル・石・藁など様々な材料を使って思い思いのアート作品を完成させる。

4-4-2 目的はなにか

(1) あやっか

長井市にはシャッター街や空き店舗が多い。新しく建築するばかりではなく、昔からその場にある建物を再活用し、よい意味で街並みの雰囲気を残していくことの必要性を感じている。このため、店舗の再利用や人々が和める空間を造り、できあがった空間を住民が利用することにより、再び多くの人が行き交う

市街地の活性化につなげてゆくことを目的としている。

(2) 土壁アート教室

少子高齢化やシャッター街など共通の地域課題を抱える中心市街地北部において、各自治公民館と長井まちづくりNPOセンターが連携し、伝統的な土壁づくりを通じて、子供同士とその家族、地域の高齢者との新たな交流を育み、地域の活性化を図る。

4-4-3 どのような経緯で企画されたか

(1) あやっか

土壁が好きな学生が卒業制作で実際に塗ってみたいという意志を実行に移したことによって、店舗の改装が行われた。前年度の学生が空き店舗の再活用を行ったため、その制作活動をきっかけとして、学校の協力を得ながら使用できる空き店舗を探していたところ、現在の店舗の所有者が場所を提供してくれたため、「あやっか」が制作された。

(2) 土壁アート教室

「あやっか」制作がきっかけとなり、古い建物や蔵などが残る長井市において、伝統的な土壁を親しんでもらうために企画された。また、「あやっか」の位置する大町通り商店街界隈を「土壁アートストリート」とすることで、様々な世代の人々を呼び込むきっかけとしたい。

4-4-4 活動を阻害している要因はなにか

(1) あやっか

左官という伝統技術による店舗改装を行ったため、技術面での困難な要因はあったが、活動面では特にない。

(2) 土壁アート教室

長井市初の3地区合同事業となったため実行委員の体制に混乱があった。

4-4-5 阻害要因をどのように解決したか

(1) あやっか

他県および地元職人の指導により、技術的な面での問題は克服できた。

(2) 土壁アート教室

何度か実行委員会となるものを開催し、地域の方々への理解を深めた。

4-4-6 今後の展開

(1) あやっか

土壁などの左官技術を用いて空き店舗を改装し、伝統的な雰囲気を持つ店舗を町づくりの格としてさらに増やしていきたい。「土壁」と言ったら「長井」と呼ばれるようになればよいと考えている。

(2) 土壁アート教室

3地区にとどまらず、毎年何度か開催してゆくことにより、伝統技術の継承と土壁をまちに浸透させてゆく。

4-4-7 この事例から学ぶこと

(1) あやっか

土壁という伝統的な技能に興味を持った女子学生に対して、店舗を所有している老女が快く場を提供してくれたことが、町に新たな空間を創出するきっかけとなった。この活動が、さらにまちづくりNPOに発展していったことは、同じような思いを抱いている人が少なくないことを示しており、若者の活動力が高齢者を動かした良い例であろう。若い世代の人たちが、年配者たちが共感するような感性を示したときには、それをきっかけに、今まで霧がかかっていたような世代間の交流を一気に進めることができるポテンシャルを持っているのだということがわかる。

(2) 土壁アート教室

さらに若い世代の子どもでも、伝統的な建物に興味を持っている。今の子どもたちは、自然の中で遊ぶということが少なくなっており、地方の子どもたちであっても、実際に素足で土を踏む体験は珍しく、「土」という自然に触れ合うということの大切さを感じさせる。



図 4-13 「あやっか」制作1 (提供：石川文香)



図 4-14 あやっか制作2 (提供：石川文香)



図 4-15 土壁教室 (提供：石川文香)



図 4-16 土壁教室成果 (提供: 石川文香)

4-5 セントラルイースト東京 (東京都千代田区・中央区)

<http://www.tdb-ce.com/>

4-5-1 具体的にどのような活動をしているのか

ニューヨークのソーホー地区をモデルにして、下町的なイメージのある神田から東日本橋界限一帯において、若手のデザイナーや建築家たちが空き店舗や空き事務所、さらに路上などを利用して、期間限定でアートイベントを行っている。2003年11月7日～16日と2004年9月17日～26日の各10日間で行われた。

4-5-2 目的はなにか

神田、東日本橋などの地域は、品川、六本木、汐留などの大型オフィスビルの供給に伴い、空き事務所・空き店舗などが目立つようになってきており、下町的な雰囲気が残る界限の空洞化が顕著になってきている。そこで、かつてのニューヨークのソーホー地区のように、若手アーティストによるイベントを通じて、実際に若者たちが魅力を感じる空間を創出し、町の活性化を促すことを目的としている。また、この地区では伝統行事である神田祭を行ってゆかなくてはならず、減少する地元の若者たちや、昨今の新興マンションの住民たちを祭へと呼び込むきっかけとなり、神輿を担ぐ若者と伝統を伝える年配者との交流が生まれることを期待している。

4-5-3 どのような経緯で企画されたか

2003年10月に青山・表参道付近で行われた「東京デザイナーズブロック」のような活動を神田・東日本橋の卸問屋街で行ったらどうかと、千代田区の関係者が東神田町内の企業に持ちかけたことがきっかけとなった。2003年は、地元の卸問屋の経営者がデザイナーたちに働きかけ、空き事務所や地下通路などの場を利用してイベントを行ったところ、10日間で3万人が集まった。

4-5-4 活動を阻害している要因はなにか

町内の中には、このような活動に対して否定的な見方をする人もいる。また手伝いに来た若者たちは、自分の住んでいる町の中での行事等に参加したという経験がほとんど無く、大人たちとの共同作業の経験がない。そのため、何をどう行ってよいのかがわからずに傍観するだけの者もいた。

4-5-5 阻害要因をどのように解決したか

場になじめない若者も、路上を封鎖してバーベキューパーティを催したら、一気に打ち解けた。一緒に食べるということは神事にも通じるが、交わるためには良いことなのであろう。

また、町の人には十人十色であるが、少なくともこの地域では古くからの住民同士は顔見知りであるので、新住民をどう引き込むかが課題となった。そのためにもまず、子供会を充実させることから始めて、バス旅行などを行った。年配の者が真剣に町のことを考えている姿を見せることも大事である。

クロージングパーティーでは、700名が路上でパーティーを行ったが、その時には苦情は一切出ず、地元の若者と年配者との交流関係ができた。

4-5-6 今後の展開

2004年は、「セントラルイースト東京 2004」として、古き文化発祥の地という土地柄に新しい価値を見いだすアート・デザイン、建築などの複合フェスティバルを行った。自分の事業所のスペースを縮小してまで、若者に貸し出すことの出来るスペースとして改装する者が現れるなど、このイベントをきっかけに、アートとデザインの町として認知度を高め、さらに神田祭という伝統文化の混在したユニークな町にしてゆく。2005年は、9月30日から10月10日の期間にイベントを行うが、アーティスト150名、ボランティア200名など、総勢

500名が運営するイベントとなる予定である。

4-5-7 この事例から学ぶこと

氏子として地域に生まれ育って祭の担い手となった人たちからは、祭を継続させることは何事にも代えられないことである。それが社会構造の変化から、祭を継続してゆくことに対して初めての危機を迎えているのかもしれない。一方、卸問屋で栄えた地区ではあるが、産業構造の変化などによる店舗や事務所の空洞化は避けられない。地理的にも今時の若者に魅力のある場所とはいえないが、気が付けばきわめて都心に近く利便性を備えた地区でもあり、古い事務所ビルが若者にとってはかえって新鮮に映るのであろう。アートとデザインをキーワードに、ニューヨークのソーホー的な空間を演出するイベントは魅力である。さらにここが神田祭の拠点のひとつであることも、日本の伝統と芸術の先端が会うおもしろさが、世代間交流を復活させ、新たなまちづくりの先例となったといえよう。



図 4-17 セントラルイースト東京の準備風景 (提供：竹内昌義)



図 4-18 アートイベントの鑑賞 (提供：竹内昌義)

4-6 アサザプロジェクト—霞ヶ浦の浄化—（茨城県霞ヶ浦地域）

4-6-1 具体的にどのような活動をしているのか

「アサザ」という水草の名前をつけた霞ヶ浦地域を対象とする自然再生を目指すアサザプロジェクトは、別名「市民型公共事業」とも呼ばれているもので、これまでの自己完結型公共事業への批判的観点から推し進められている。すでに有益な成果を上げており、市民・NPO のリーダーシップによる行政との協働プロジェクトである。

アサザプロジェクト (<http://www.kasumigaura.net/asaza/>) は自然再生の発想、技法、ビオトープ等自然復元手法、行政と市民の関係等多くの側面において提案要素を含むものであるが、ここでは、それらの基礎的な部分を支えている小学校の総合学習によるプロジェクト参加と関係地域住民とともに実施している植生復元計画に着目する。

前者に関しては、小学校を流域内の活動拠点、その学区を事業の基本単位として位置づけている。半径約 2 キロ程度の区域の小学校 170 校が水草の植え付け等のビオトープやアサザの栽培に参加し、環境教育が実施されたという。小学校区の地域のもつコミュニティとしてのつながりに着目したわけである。

後者に関しては、霞ヶ浦の水資源開発以前の風景、様子、草花等の地域植生を復元するものだが、従来の工学的手法ではなく小学生の祖父母や近所のお年寄りや小学生のコミュニケーションによる手法を採用した。つまり、霞ヶ浦の湖面に元々どのような生き物がいて、どのような水草等があったのか、またそこでどんな遊びをしたのかを小学生がそこに住み続けてきたお年寄りに聞き書きをし、絵に画くというものである。

4-6-2 目的は何か

アサザプロジェクトは湖水（霞ヶ浦）の環境の改善と自然再生を基本とした管理を目的とする事業であって、その基礎には、多世代参加の流域地域ぐるみの環境教育プロジェクトである。水辺環境の整備と管理をそれまでの土木工学的な自己完結型の事業として行われていることに警鐘を鳴らし、地域の自然や生活史を基礎とする取り組みを提起したものである。

そこには、世代間交流を志向する小学校と住み続ける古老達が重要な役割を担っているわけである。

4-6-3 どのような経緯で企画されたか

1970年代に霞ヶ浦流域は長い間水質汚濁、漁業衰退、森林減少の3重苦の状況にあった。その対応として、湖岸のコンクリート化、水門閉鎖等の改善を目指す事業が行われてきたが、ほとんど改善がみられなかった。それどころかむしろ、湖岸の整備や水門閉鎖等改善事業そのものが貴重な自然を破壊していた。

建設省の霞ヶ浦開発事業が完了した1995年度に市民提案によりアサザプロジェクトは始まった。「霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議」によって進められ、市民団体の呼びかけにより地元の農林水産関係者、企業、自治体、学校等に広がり、広範な取り組みとなった。それから3年後の1998年の環境白書では「源流から湖まで住民によるトータルできめの細かな流域管理」「市民の協同型事業」として紹介されている。翌99年には、NPO法人アサザ基金が設置され、その下にプロジェクトが進められている。



図4-6-1 小学校におけるビオトープ

(<http://www.kasumigaura.net/asaza/>から転写)

4-6-4 それまで解決できなかった要因はなにか

これまでの25年にわたる開発で霞ヶ浦の湖岸はコンクリートに被われ、小動物の生息地を失い、浅瀬の植物等が失われてきた。そこではだれもが環境を破壊しようとしていたわけでもないのである。

アサザプロジェクトの展開により明らかになったことは、それまでの実施内容がタテ割り、専門分化による行政組織（行政依存の水系管理）によるものであったこと、同時に土木工学的な発想により事業が行われてきたことであった。

また、住民サイドにおいてもこの対象地域が大規模な水系エリアだということもあって、一種のあきらめの気持ちを持っていたということである。

4-6-5 阻害要因をどう解決したか

霞ヶ浦の浄化プロジェクトのイニシアチブを市民サイドがもち、市民的組織により実施したことが阻害要因打破の要因であるが、決定的なのは飯島博（NPO法人アサザ基金代表理事）という市民の生活サイドからプロジェクトを組み立て、実行していく人の存在である。

このプロジェクトは市民、企業、学校、流域自治体、漁業協同組合、生活協同組合、森林所有者、国土交通省、大学・研究機関等を霞ヶ浦の自然再生に向けて支援、協働、連携等のネットワークにより実施された。この推進組織は中心性のないネットワーク組織だといわれている。関係主体がこの明確な目標と理念を共有し、それぞれの能力に応じて連携ネットワークを築いたわけである。

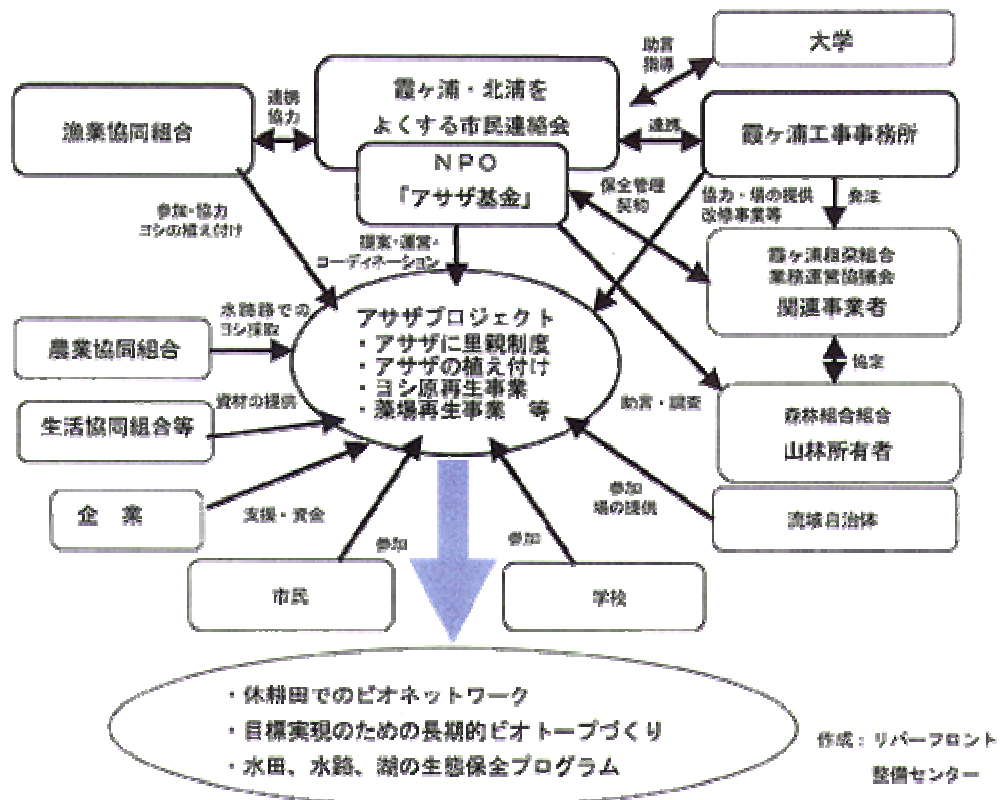


図 4-6-2 アサザプロジェクトの関係図

(<http://www.kasumigaura.net/asaza/>から)

その結果、自然再生コミュニティとでもいえるような小学校区単位のアサザ里親やビオトープのしくみが形成され、未来に残すライフスタイルと環境を地元の高齢者と交流しつつ探し続けている。

4-6-6 今後の展開

アサザプロジェクトは地域振興と結び付けられる循環型事業である。子供たちが育てた水草のアサザを湖岸に定着させるために、周辺の森林からの間伐材や粗朶を埋め、谷津田の再生を図る。そこには新たな角度からの林業、農業、漁業振興、特産品開発等の可能性がある。多様な主体からの提起にこれからの期待がこめられている。

このプロジェクトは10年ごとの達成目標を掲げる100年間の長期計画をもっている。100年をかけて野生のトキを復活させることとしている。日本の近代化100年で失ったものを取り返そうとしているのであるが、同時に、地域の自然を核とした多世代コミュニティも取り返すことになろう。

4-6-7 この事例から学ぶこと

流域圏における自然の再生のプロジェクトにおいて、小学校の環境教育に取り込み、それを基礎に地域の自然、ライフスタイル、遊び等を復活させるという世代間交流の意義は大きく、地域特性に基礎をおく生活文化の形成にとって有益な事例である。

参考文献：飯島博「社会システムの再構築による環境保全—市民型公共事業「アサザプロジェクト」の展開」西尾隆編著『自治体改革9 住民・コミュニティとの協働』ぎょうせい 2004年 262頁～290頁

4-7 森の聞き書き甲子園（全国）

4-7-1 どのような活動をしているのか

2002年度から林野庁と文部科学省主催の「森の“聞き書き甲子園”—FOX FIRE IN JAPAN」が始まった。全国の100人の森の名手・名人に全国の高校生100人が森林に係る仕事や技術のことを「聞き書き」というイベントである。このプログラムはほぼ通年で行われている。年度初めか

ら夏場までに、森の名手・名人と彼らに聞き書きする高校生を公募選定し、8月下旬に高校生への聞き書き研修が行われる。9月から10月に調査地域の勉強をし、11月から12月に森の名手・名人にインタビューを行う。1月にはその成果をレポートにまとめ3月には公開フォーラムで成果を公表するというものである。このイベントはすでに3年目を迎えている。

ここで甲子園というネーミングは高校生のイベントだからという以上のものではないという。8月に100名の高校が東京で合宿して聞き書きの研修を行い、3月には全国の森の名手・名人と彼らに聞き書きした高校生が一同に会して成果が公表されるのだから、夏と春の2回の全国的な高校生集いという点でも甲子園的ともいえよう。もっとも、この甲子園は甲子園の野球のように聞き書きの内容に優劣をつけるものではない。

なお、この名手・名人と高校生を結びつける世話人として、47すべての都道府県から1名参加している。そのほとんどは教諭か教育委員会の指導主事である。



図4-7 森の聞き書き甲子園ポスター（2003年度）

4-7-2 目的は何か

このイベントは、わが国は森の国だという認識が基礎におかれ、地球的環境対応と山村において受け継がれてきた森林に係わる知恵、生活技術、生業等を

無理なく維持することを目的としている。そして、そのためにおそらく高齢化している森の名手・名人とおそらく未来探しをしているティーンエイジの高校生を出会わせて、技術や文化の伝承を期待するものである。ちょうど、教育やものごとの伝承が、両親の世代を一つ飛ばして、祖父母から孫に行くように仕掛けているといえる。

4-7-3 どのような経緯で企画されたか

森の名手・名人を顕彰したいということが最初だったといわれている（林野庁担当者インタビュー）。「森の名手・名人 100 人」が（社）国土緑化推進機構の「もりのくに・にっぽん運動」全国選定委員会において選定され、この技術や生活文化を将来に残す方策が考えられた結果であった。そこでの職業区分は森づくり、森の恵み、加工等の 3 部門できこり、マタギ、養蜂、川猟師、炭窯づくり、宮大工、杉玉づくり、樽職人等の 52 業種であった。

このプログラムの原型はアメリカにある。1966 年にアメリカ・ジョージア州のある高校の授業プログラムとして生徒たちの祖父母やコミュニティの年長者から伝統的技術や知恵を聞き書きして出版し、それが「The Foxfire Magazine」と名づけられたことが出発点だとされている。このジョージア州の教育プログラムは今では全米教育プログラムとして広く行われている (<http://www.foxfire.org/>)。

なお、3 回目の 2004 年度から新たなプログラムが加えられた。その 1 つは第 1 回目に参加した高校生有志の呼びかけによる「共存の森」（フォークロアの森）である。



図 4-7-2 高校生の取材風景

（林野庁・文部科学省 2003 年度報道資料「第 2 回森の“森の聞き書き甲子園”の開催」2003 年 6 月 17 日より）

具体的には、千葉県県有林においてそのOB、OGとそれに賛同する高校生が森と密接に係わっている人々と交流しながら森の手入れを行うというものである。もう1つはこれまでの2回のイベントに参加した高校生が聞き書きではなく映像で記録する森の聞き書き甲子園映像アーカイブづくりを行うことである。そのために再度、森の名手・名人を訪問するのだという。

4-7-4 それまで対応できなかった要因はなにか

過疎化、高齢化等のために、中山間地域の森林は荒廃し、森を守る担い手も急速になくなりつつある。また、教育の分野においては自然体験教育の重要性が認識されていた。これらの課題は経済の高度成長期以降のものであったが、これまで森林管理、教育行政のタテ割行政のもとで別個のものとして扱われてきた。

4-7-5 阻害要因をどう解決したか

1つは教育現場の変化あげることができる。2002年度から新たな学習指導要領と完全週休5日制の導入を受けて、自然・社会体験、観察・実験等、子どもが自ら課題をみつけ、問題解決に結びつける学習を地域社会に協力を求めるようになったことである。それともう1つは森林担当職員のリーダーシップによるものといえる。

さらに、実行に係わる予算を初年度は全額国庫により実施したが、2年目には半額国庫の負担とし、3年目には全額を民間企業の協賛に依っている。

4-7-6 今後の展開

すでにふれているように、第3回目から新たなプログラムが加わっているが、活動自身に新たな展開のシーズがあるために、実施回数が増えると新たな成果をもたらすものと思われる。また、気象温暖化等による災害の多発、京都議定書発効等による二酸化炭素の削減等の要請があるなど、森林保全にとっては追い風が吹いている。具体的なマスコミ等の働きかけにより全国的に注目される世代交流イベントになる可能性がある。

4-7-7 この事例から学ぶこと

この事例から学べることは、たとえ構造的な課題で解決が困難なものであっても、かつての大家族における祖父母と孫のコミュニケーションを擬した世代間交流は解決の芽を生むものだということである。

4-8 その他の世代間交流の事例

テーマ	活動名称	地域	内容	主体	出典
生活支援	スノーバスターズ	岩手県沢内村	村内居住の一人暮らし高齢者などの居宅やその周辺の雪かきボランティアの活動	村民（180名のうち80名程度が中学生、残りは一般村民）	東北電力・東北開発研究センター「先行事例にみる地域づくり：住民参加型地域活動（地域づくり）に関する研究」（02年2月）P62～67
地域通貨	エコマネー支援システム	北海道栗山町	エコマネーの普及活動における高齢者の社会参加に期待	くりやまエコマネー研究会	東北電力・東北開発研究センター「先行事例にみる地域づくり：住民参加型地域活動（地域づくり）に関する研究」（02年2月）P68～74
地域福祉	ゆいまーる共生事業	沖縄県読谷村	公民館を拠点に渡慶次区に住む高齢者（概ね80歳以上）や身障者にミニ・デイサービス、世代間交流を通じての地域貢献を行う	自治会「渡慶次区」（字単位の地区）でボランティア主体	東北電力・東北開発研究センター「地域社会の再生から創造へ」（03年2月）P63

地域学習	森と風のがっこう	岩手県葛巻町	小中学校分校の廃校を利用した大人と子どもが学びあえるがっこうを運営	岩手子ども環境研究所	東北電力・東北開発研究センター「地域社会の再生から創造へ」(03年2月P74~80)
環境保全	アサザプロジェクト(霞ヶ浦浄化)	茨城県霞ヶ浦など	自然再生事業と環境教育を一体化(コミュニティ単位と流域の小中学校のネットワークと霞ヶ浦再生をセット)による公共事業の見直し	NPO アサザ基金等	飯島博「社会システムの再構築による環境保全—市民型公共事業「アサザプロジェクト」の展開」西尾隆編著『自治体改革9:住民・コミュニティとの協働』04年6月P262~290
世代間交流	トライやる・ウィーク	兵庫県	兵庫県下の中学生の職場体験、ボランティア体験、文化活動に指導ボランティアとして保護者や高齢者等がかかわるイベント(平成10年から毎年実施)	兵庫県ヒューマンケア研究機構・長寿社会研究所	長寿社会研究所「高齢者と青少年との世代交流に関する調査報告書」(平成14年度)[ホームページから]
	世代間交流施設の運用	山口県旭村	往還ふれあい塾	山口県旭村	http://www.asahi.townnet.
	ジョイント・スペースおんど	広島県音戸町	中学校と高齢者のクラブ(老友会)が連携して道の里親制度(指定した道路の清掃や緑化を行う)の運用を行う	広島県音戸町	http://pref.hiroshima.jp/doboku/douji/myroad

	世代間交流センター「ひだまりの家」	広島県安芸津町	交流広場、相談・機能回復訓練、作業・創造・調理実習の部屋などがあり三世代で農作業等ができる	広島県安芸津町	中国新聞社説 (02/9/15)
	「出会いの森」「体験の森」「創造の森」の整備	兵庫県市場地区	交流拠点の設置	兵庫県	—
	市の借り上げ農園での世代間交流「いきいき健康農園事業」	横浜市	市内の休耕地を借り上げて、野菜や花の栽培を通じての老人会、子供会、福祉施設等による自然学習の場をつくる（2003年度から開始）	横浜市	http://www.com212.com/212/pubnews/pub0302/03021d.html
農村交流(ツーリズム)	南信州グリーンツーリズム特区	飯田市	これまでの規制特例により、農業の多様な担い手確保・育成等による農業の振興と地域コミュニティの再生を図る	飯田市	構造改革特区推進本部
育児支援	少子化時代における次世代に関する意識啓発事業	全国	こども未来賞（エッセー募集）、シンポジウム、提言募集、子育て支援促進キャンペーン等	こども未来財団	http://www.kodomo-miraizaidann.or.jp

第5章 世代間交流を促進するための社会サービスの可能性

5-1 自治体からみた社会サービス

5-1-1 世代間交流促進という課題

(1) 世代間交流の位置づけ

世代間交流に関する究極の課題は世代間の分断、かく乱された交流状況を修復し正常な地域社会の状態に戻すこととなる。この課題そのものが容易に解決できるものではないが、課題はそれにとどまらない。すでに分断された世代のつなぎ方そのものもまた課題なのである。つまり、世代交流の手法や手順が新たな地域の活性化やコミュニティの創造につながるという点も見逃すことはできない。

さて、ここでの自治体は行政の次元のことだけではない。自治体は一定地域のガバナンスのしくみであって、その深層にはそこに所属する主体の日常生活世界がある。地域社会に生じる課題の多くはこの日常生活の世界において処理されていくのだが、そこで処理しきれないものが行政的ニーズとなって自治体の行政を触発し、行政的出動を促すことになる。地域における世代間の交流は、まずは行政の役割以前の日常生活の世界としての自治体が主なフィールドであるとみたい。まさにこの課題の戦場は日常生活の世界そのものにあると認識したいのである。

ところが、市民社会の経験の乏しいわが国の社会にあって、社会的課題対応に関しては行政への依存度が高く、日常生活世界の課題であってもあたかも自治体行政の役割のように認識されがちである。結果的には、大きな権限と財源をもつ行政の対応が期待されることになるが、本質的には市民の対応こそが重要なのである。

(2) 世代区分と地域の課題

社会保障に着目した区分（この区分は平成13年版厚生労働白書の「ライフステージから見た社会保障」（125頁）を表現するもの）を基礎とすれば、誕生前、就学前（0歳から6歳）、就学期（6歳から15歳、大学までの時期を含めると20代の前半の時期まで）、子育て・就労期（15歳からの生産年齢・60歳までだが、70歳の前半までも含む場合がある）、退職後（60歳以上）、死亡後の6期区分と

なる。この区分に応じて、それぞれの世代の需要に応じた社会的サービスが行われてきた。まさに誕生から墓場まで、行政サービスの側面であれば、不妊治療、母子健康手帳から斎場、埋葬許可、霊園の設置・管理までというわけである。

表 5-1 は八王子市の資料から作成した世代別自治体行政サービス例である。横軸に地域課題をとり、縦軸に世代をとった受ける側からの行政サービス一覧とした。この一覧は世代 6 区分で整理を開始したのであるが、作業過程において世代が特定できないサービスがかなりあることもわかったので、「全体を通じて」という世代区分の例外区分を設けた。

表 5-1 世代別自治体行政サービス例

	健康医療	福祉	生活	環境	教育・文化	くらし
誕生以前	不妊治療助成、健康指導、母子健康手帳、母子栄養食品支給					
就学前 (0歳～6歳)	母親学級、新生児訪問指導、予防接種、心理発達相談	保育園、家庭福祉員、病後児保育、一時保育、子育て広場、ファミリーサポートセンター	児童館幼児活動		幼稚園児保護者負担軽減補助金	
就学期 (6歳～15歳)	こども医療ガイド、中学夜間学級	児童手当、児童扶養手当(ひとり親家庭)、障害手当、	自主学童クラブ、学童保育、ふれあいキャンパチーム等、	交通公園の運営、	小中学校の運営、義務教育就学援助、病弱による就学猶予等、心身障害学級・訪問授業、学校における国際理解・語学教育、小学生交流事業、サタデースクール、こども科学館	
子育て就労期 (15歳～60歳)	結核・がん検診、訪問健康診査、予防接種、医療機関情報(通常・救急)、健康づくり教室、入浴施設(清掃工場の余熱利用)	生活福祉資金の貸付、生活保護	子育て情報、消費センター、勤労者福祉サービス、余裕教室の開放		中学校夜間学級、生涯学習コーディネータ養成	人材開発センター、求人求職援助、創業・開業支援、企業支援、小口事業資金融資、緊急対策融資、ものづくり産業振興資金、物流系産業資金、IT化支援資金、商店街補助、森林づくりを支える交付金、中小企業退職金共済掛補助

退職後 (60歳以上)	入浴券支給、結核・がん検診、訪問健康診査、予防接種、介護保険、医療施設への入院、訪問介護、デイケア、ショートステイ	相談窓口、施設情報、生活福祉資金の貸付、生活保護、家族介護者交流事業、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、居宅介護支援、短期入所生活介護等、シルバーパス	保健福祉センター、シルバー人材センター、高齢者就業相談、授産場、老人クラブ、生きがいデイサービス、高齢者活動コーディネート、緊急ブザー設置	高齢者交通安全教育、	生涯学習コーディネート養成	中高年事業創出支援、高齢者職業相談室
全世代を通じて		身体障害者手帳、精神障害者保健手帳、	市民活動支援、公共施設アドプト、市民企画事業補助、NPO情報、国際交流、町会・自治会設立・助成、男女共同参画支援、防犯	ごみの出し方とリサイクル情報、上下水道の維持、し尿収集や浄化槽の維持、住宅、交通、私道・水路の専用、駐車場・駐輪場の運営、地域循環バス事業	出前講座、社会を明るくする運動、生涯学習フェスティバル、美術館、郷土資料館、公民館、図書館、生涯学習センター、市民センター、市民集会所、ふれあいの里、余熱利用センター、市民会館、芸術文化会館（ホール展示場）、市民体育館、陸上競技場、運動場、野球場、ソフトボール場、テニスコート、市民プール、サイクリング道路、小学校校庭の夜間開放、企業のスポーツ施設開放	市民農園
死亡後			葬祭、埋葬許可、斎場、霊園			

(八王子市ホームページ <http://www.city.hachioji.tokyo/> から 2004 年 2 月に檜楨貢が作成)

この表からは、健康医療、学校教育、くらし（産業支援）に関する行政サービスは年齢や世代を前提としたものが多い。人々の健康や医療に関することは年齢の推移と関係が強いし、学校教育も就学世代中心のものだからである。そして、くらし（産業支援）に関する行政サービスは人材開発、求人求職、創業融資等のサービスが子育て就労世代中心というのも当然であろう。

世代区分の例外区分としての「全世代を通じて」に分類したサービスはどの世代も対象とするということである。この区分のサービスは当初（かつて）は特定の人々や世代によって実施されていたが、すべての世代に拡張されていったと想定される。本報告の主題となっている世代間交流は主にこの区分のサービス領域において展開されているとみることもできよう。

この一覧はもちろん社会サービスのすべてではない。その課題の周辺や別個

の課題枠組みにおいて、市民・NPO、地域社会、企業等が地域性や地域のサポート需要に応じたキメの細かいサービスを創造し、各地で展開されているというのが一般的である。それでも、ここでの自治体行政サービスはその中核的なものであるだけに、そこから大局的なアウトラインをとらえることはできる。

(3) 例外としての緊急サービス

地域において災害等が起ると、自治体においては緊急サービスが求められる。災害等の程度、期間、避難場所等の情報提供、避難指示等が臨機応変に行われることが求められる。ここ数年の自然災害の多発は自治体防災の重要性を再認識させている。避難場所、避難システムの明確化、日常的ライフラインの欠損への対処、復旧までの生活保持等の重要が認識されるようになった。また、災害ではなく、夜間や休日の社会サービス・システムの維持も相変わらず重要なテーマである。

これらの緊急・応急に必要なとされる社会サービスは世代区分でいえば、就学前や退職後の比較的弱い世代において必要とされる。しかし、それらのサービス・システムにつなぐためには、家族、地域社会の連携が必要であって、地域において日常的な生活世界において世代間交流がなされていることが有効である。また、緊急・応急のサービスを支えるのは、そこに自分の問題として何か役割はないかと集まってくる市民ボランティアである。この10年の震災等への市民ボランティアの取り組みはこのことを実証している。

(4) 多元化するサービス主体

社会サービスの必需的なものは、公的サービス主体としての行政により供給されるが、社会の成熟化の下で、サービス・ニーズは多様化し、それに応えるための多様なサービス主体が登場し、社会のしくみの一つになっている。

近年のNPO法人等の多くのジャンルにおける登場は、テーマ型市民活動の領域を形成し、従来から存在した町内会、自治会等の地縁に基づく市民主体を活性化している。また、5-2においてふれている民間主体も着実に増加しており、今日では社会サービスの主体は多元化が進んでいる。

(5) 世代間交流への期待

さて、世代交流に関する社会的サービスであるが、それ自体を目的としたも

のは多くない。一般的には、社会的サービスは一定の関係を形成・排除するためのインプットとしての性質をもち、交流はその成果という位置づけとなっていたように思われる。それゆえに、交流という社会的サービス、世代間交流サービスは個々の社会的サービスの末端に位置づけられてきた。交流サービスは注意書き程度の位置づけというものであった。

しかしながら、サービス需要はいつも一定ではない。人々の生活文化、ライフスタイルは変化するし、経済状態も一定ではない。また、同じ量の世代が継続的に存在するわけではない。そのために、サービスの内容や供給方法等の修正や再構築がたえず求められることになるが、その際に交流サービス需要が生じることになる。

最近では、構造改革特区等の地域特性を踏まえた活性化のしかけが認められるようになって、ますます地域の個性志向の地域間交流や世代間交流が展開されるようになった。

5-1-2 世代間交流を目指す自治体の社会サービス

(1) 地域社会の多世代化

中山間部の過疎地、70年代前後から住宅開発（いわゆる、ニュータウン開発）を志向してきた地域、そして都心地域では、世代バランスが崩れている。一言でいえば、少子高齢化が急速に進んでおり、そのためにそういう地域の基本政策は若年人口の誘致ということになる。

この種のサービスとしては、都心地域では若い夫婦への家賃補助、2世代住宅補助等のいわゆる住宅政策の一環として行われている。もっとも中山間部の過疎地やニュータウン開発地域を含めて、多世代化に向けての決定的な方法は見出しえていない。エコミュージアム活動、環境再生運動等の交流を通して、現代社会における世代間の連携の模索が行われている段階である。これもまた、市民の活動領域が先行し、自治体行政がそれを補完するという対応が期待されている。

世代の分断やかく乱がこれまで志向されてきた社会のファースト化やスピード化にあるという見方からは、地域社会の多世代化は社会のスロー化によりかなり実現できるということになるろう。

(2) 新たなコミュニティ・サービスの展開

少子高齢化という動向の中で、近年では世代間交流は積極的に展開されている。直接的に世代交流をターゲットとしたイベント（たとえば、中学生の職場体験に高齢者が指導ボランティアとして係わるものなど）や自然の再生、地域のまつり、文化活動、介護、エコマネー等のテーマを通じた世代間交流活動は多い。最近では、生涯現役というNPO法人は、元気な高齢者の集まりもあって、ほとんど子育て・就労期と同じような活動を志向している。

地縁関係を基礎とする地域コミュニティは、近年の高齢化の進行するなかで、在宅福祉のしくみを標榜する中で世代間交流を取り込むようになってきている。どこでも祭りやイベントはほとんどが世代間交流をテーマにしているといってもよいであろう。

また、多くの公共施設には、その利用目的に世代間交流が含まれている。公園、体育施設、公民館等の集会施設等には筆頭のものではないが、何番目かの目的として世代間交流が掲げられている。もっとも、世代間交流センター等の公共施設も整備され始めている。

先に示している表5-1の世代別自治体行政サービスのうちの就学前の世代と退職後の世代を連携させる動きも活発になっている。たとえば、保育所サービスを豊かなものとするための高齢者が係わること、その逆に高齢者の施設と保育施設を一体として整備する等である。また、少子化等の影響により小中学校施設の廃校を大人と子どもの交流施設につくり変えて運営しているものもある（たとえば、岩手県葛巻町の「森と風のがっこう」）。

なお、世代間交流が世代間の分断とかく乱にあるのだとすれば、そこでの生活課題はビジネス・チャンスの宝庫であって、世代間をつなぐコミュニティ・ビジネスは今後ますます展開されることになるだろう。

(3) 指定管理者制度活用の社会サービス展開可能性

本節の最後に2006年9月から具体的に始まる公の施設の管理システムの世代間交流の可能性についてふれておきたい。

2003年9月の地方自治法の改正によって「公の施設」（民生施設、衛生施設、体育施設、社会教育施設、宿泊施設、公園、会館・集会所、診療施設等）の管理運営を民間に委任可能であることが決まった。行政の直営か民間に任せるかの判断と新たな対応のための経過措置が3年と決められたのである。前提とし

て委任する行政サイドとの協定等が必要だが、収入となる料金等を施設運営に活かすなどの裁量の幅が広がる。

この指定管理者制度は、結果的に市民・NPO、地域社会、企業（大学を含む社会サービス産業）に公共施設の運営を委ね、これまでのいわば目的外使用を大胆に行うことが想定される。この制度の具体化によって、ここでの世代間交流の活動を取り込む公共施設運営の可能性が高まるという点で注目したい。

5- 2 民間からみた社会サービス

「世代間ギャップ」という現象が存在する社会において、民間において今後どのような社会サービスの可能性があるのか検討してみたい。

(1) 代間交流の支援サービス

世代間交流に関しては、これまでも生涯学習センター、市民センター、エイジレスセンター等をはじめ、世代間交流のための活動スペースは、公共施設としても提供され、今後も充実した設備とサービスが求められている。

公共施設の指定管理者制度導入などにより、運営効率化と、より専門性を問われる運用が望まれている。

世代間交流活動のための共同スペースや事務所機能、催事やワークショップ等を開催するためのホールスペース、サービスを提供するための専門スタッフなど。民間と同様のサービス水準が求められている。

公的機関においても民間サービス市場の原理が適用されることとなってきた。

スペース予約、料金についても携帯電話等を利用した予約システムやポイント制を導入した料金やサービス制度、託児サービスの充実、開館時間の延長、ブロードバンドネットワーク環境やレンタルサーバサービスの提供などの市場は拡大していくものと考えられる。

(2) ブログというコミュニケーションツール

最近「ブログ(BLOG)」という言葉をよく目にするようになったが、「WEB-LOG」の略で、一般的には時系列に並べられた記事とそれに関するコメントが定期的に更新されていくサイトである。

そこでは、個人的な用途として、日記記録のような機能と、グループ用途と

して、友人や家族、そして会社やプロジェクトチームのコミュニケーションツールとしての機能が特徴的である。

様々なブログでの会話が、自分とのギャップを感じられる、または発見できる場にもなっている。

こうしたツールは、デジタルデバイドという問題をかかえるが、お互いの理解を進めるツールとして認識が高まっていけば、PC メールや携帯メールと同様、世代を問わず普及していくものと考ええる。

ボランティア活動、様々なプロジェクト推進においては、ホームページを活用したコミュニケーション、情報共有が主流となっていており、アメリカの9.11同時多発テロやスマトラ沖地震等での大衆メディアチャンネルとしても活用され、効果をあげはじめている。



エキサイトのブログ専用サイト <http://www.exblog.jp/> より

コミュニケーション手段をより有効に運用し、またそのことをビジネスとして活用する企業が増えている。

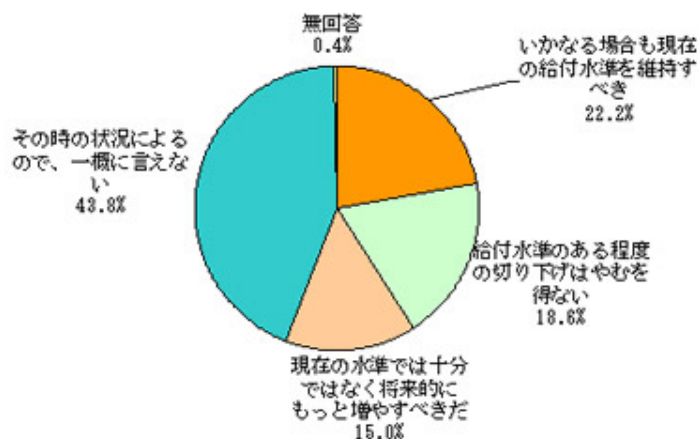
Yahoo!、ライブドアや楽天などのポータルサイト運用会社は、自社サイトへの顧客誘導、顧客囲い込み、優良コンテンツの書籍化、広告媒体としての価値創造など新しい拡大市場としてとらえている。

(3) 自分の保障

世代間ギャップの顕著な事例として、社会保障制度における負担と給付についての意識が取り上げられる。

2004年9月に発表された「国民生活に関する世論調査」(内閣府)においても、今後政府が力を入れるべきことのトップは「医療・年金等の社会保障構造改革」が67.7%と前年度調査を5.8%上回った。前年度のトップは「景気対策」だったが、年金への不信感などから社会保障制度に対する関心が高くなっている。

「あなたは、将来の公的年金の給付水準についてどのようにお考えですか。次の中からあなたのお考えに近いものをお答えください。(〇は1つ)」



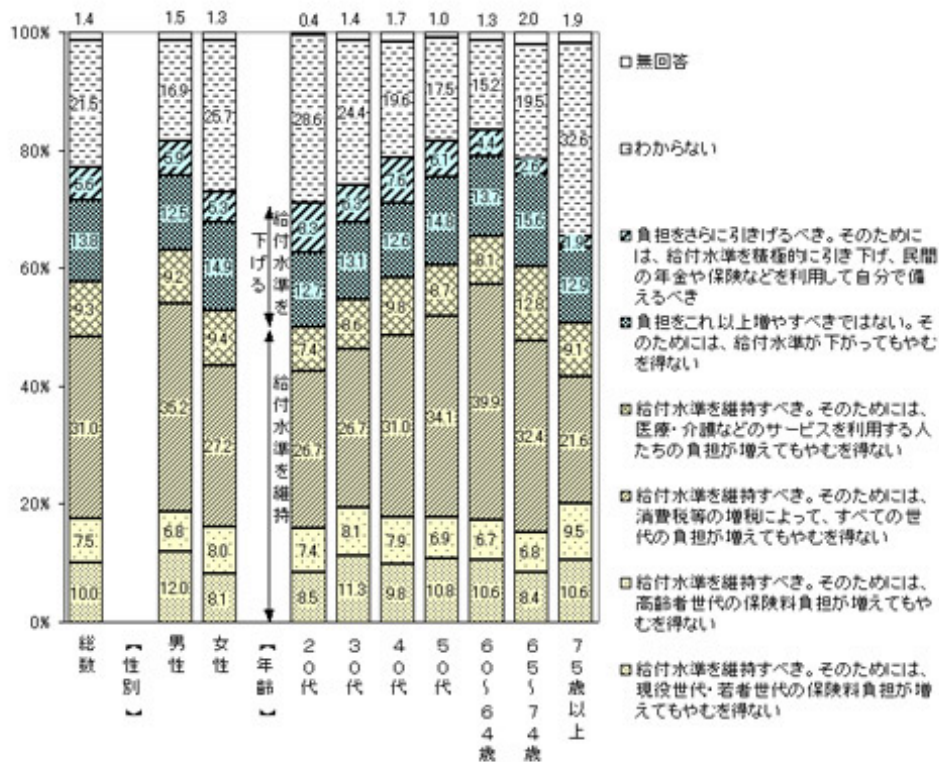
〈備考〉回答者は3,988人。

内閣府資料 国民生活選好度調査(2001年5月～6月度)

アルファ社会科学株式会社 <http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/index.html>より

り

社会保障制度における負担と給付についての意識調査結果(2004年)



	総数	男性	女性	20代	30代	40代	50代	60～64歳	65～74歳	75歳以上
給付水準を下げる	19.4%	18.4%	20.2%	21.0%	19.4%	20.2%	20.9%	18.1%	18.2%	14.8%
給付水準を維持	57.8%	63.2%	52.7%	50.0%	54.7%	58.5%	60.5%	65.3%	60.4%	50.8%

(注)2004年2～3月実施。20歳代から50歳代までの各1000人と60歳以上2000人、計6000人が対象。回収率65.7%
 (資料)内閣府「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」

内閣府資料 アルファ社会科学株式会社

<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/index.html>より

内閣府の社会保障制度における負担と給付についての意識調査では、2001年5月～6月調査時点で「給付水準については一概に言えない」が43.8%とトップだったが、2004年2～3月調査時点では、「給付水準維持」が57.8%でトップとなり、大きく変化している。「給付水準維持」を年齢別で比較してみると、20歳代が50%で一番低く、60～64歳が65.3%と一番高くなっており、世代間の意識格差が出ている。

また、年金をめぐる意識ギャップについては、田中愛治が以下のような整理をしている(『中央公論』2004年7月号)。

	望ましい社会像	年金に対する考え方
新人類・団塊 Jr. 世代 団塊の世代	個々人にチャンスが与えられ、その能力が評価される社会	「自己責任」を意識し、自分の年金は自分で働いて貯めたいという願望に基づく「積み立て方式」
戦前・戦中派 世代	みんなで協力して物事にとりくみ、評価もグループ全体に対して行われる社会	自分の分と言うより、同じ社会の他のメンバーも自分もお互いに支え合おうという「賦課方式」

今後 20 代を中心とした若い世代においては、自分は自分で守るという考え方がますます浸透していくことを考えると、年金に頼らない方法とそれに向けたサービス商品が増えると予想される。

たとえば、「保険商品」においても、老後保障や家族保障を重視した若者向け積み立て保険や、そうしたコンサルティングサービス、またはネットを利用した勧誘サービスなどが顕著になっていると思われる。

また、高齢化に伴う「年金制度」という問題に対して、少子化に伴う「教育制度」という問題もある。子供を持たない世帯と子供を持つ世帯における教育費負担の考え方についても同様のギャップが生じていると思われる。日本の出生率は 2003 年の人口動態統計によると、過去最低の 1.29 となり、東京都は 1 を下回る区も多く、由々しき状態が続いている。

手厚い家族政策や教育制度を導入している北欧諸国においては、教育の公的負担も日本に比べ圧倒的に高い。フィンランドでは、出生率も 1.8(2003 年)を維持し、学生の能力と教育レベルは OECD の PISA 調査で世界一の評価を得ている。

	 日本	 デンマーク	 フィンランド	 アイスランド	 ノルウェー	 スウェーデン
教育機関への公的支出対GDP比(2000年)	4.6%	6.7%	5.6%	6.3%	5.9%	6.5%
教育費用全体に占める公的支出の割合(2000年)	75.2%	96.0%	98.0%	91.1%	98.7%	97.0%

出典 OECD (2003) Education at a Glance 2003

矢崎化工株式会社 <http://www.kaigo-web.info/kouza/hokuou/index.html> より

日本においては、教育制度に関しても公的負担の問題という課題が残る限り、公共教育以外の民間教育に対する期待もより高まると思われる。

特徴ある学校や、塾、通信教育の分野においては、より細分化されたニーズに対応するサービスが登場し、ネットワークを活用した教育システムもより高度に普及していくだろう。

また、逆に公立学校といた教育現場においても、新しい教育プログラム、地域活動プログラムが研究され、公共施設としての特徴や優位性を発揮しながら、社会サービスを推進していくことが望まれている。そこにまた新しい世代間交流が生まれる。

座談会「世代間交流を促進させるためには」

参加者 長谷川文雄 東北芸術工科大学大学院長
檜 貢 作新学院大学教授
斎藤 裕美 多摩大学教授
山畑 信博 東北芸術工科大学助教授
小山田裕彦 シンク・コミュニケーション

日時 平成 17 年 1 月 28 日（金）

場所 ハイライフ研究所内

討論のポイント

1. 調査の中から
2. 世代間交流が起きないままだと地域はどうなるか？
3. 新たな市場サービス、コミュニティビジネスの可能性
4. 世代間交流を活発にするには

（長谷川） 今回の研究は世代間交流の活性化によって新しいコミュニティを創造するというテーマです。現在では、コミュニティでの世代間ギャップが顕在化して、祭事や伝統的な行事の遂行にも問題が生じてきたり、お年寄りのちょっとした手助けも難しくなってきました。このギャップは、物理的に偏った世代しか居住していないことや、いても相互交流がないために断絶が起きています。研究チームの皆さんに、さまざまな角度から議論をしていただきたいと思います。それではまず、ヒアリング調査をしている小山田さんからお願いします。

1. 調査の中から

問題意識は高い

（小山田） 全般的に、世代間交流や世代間のコミュニティに関しては、それぞれの世代でかなり問題意識が高いという印象を受けました。裏返せば危機感を持っているということですね。一つは学校という場において感じます。今までは文部科学省の企画する催事やイベントやPTAや地域の活動など、皆さんいろいろな活動協力をやってきているのですが、もっと別な形で何か係わって

いきたいという気持ちもあります。私が今係わっている「お父さんの学校」なども、その一つの現れではないかと思えます。高度経済成長以降お父さんは会社で、子供さんとお母さんは地域や学校が活動の場というのが多かったように思います。今日においては、より広く世代間において何かやりたいという行動に移り始めているのではないかと感じます。それから、その意志の強さみたいな、何か行動を起こそうという意志がはっきりしてきているという感じを受けました。

それから、お父さんの楽校のメンバーのお話の中でいうと、あまり組織化したくない。以前もお話したことがあります、柔らかい組織でいたいということが皆さんの気持ちの中にある。あまり組織だって動こうとすると無理があるし、柔らかい形態を保ちながら、無理のない範囲でお手伝いできるというのが、コミュニティの心地よさというか。何もしないわけにはいかないと思っている。何かやりたいのだけど、正式にメンバーになってくれませんかと言われるのは非常につらくて、何となくすーっと入っていけるようなきっかけ作りであったり、組織の在り方であったりという、柔らかい関係を非常に求めているということがあります。

それから、民間や行政も含めて、いろいろな形で世代間交流というイベント的なものがあったり、仕組みを考えたり、シンポジウムがあたりと、いろいろあると思うのですが、行政も公共施設が指定管理者制度になって、運営が民間委託される。運営コストという面ではそれもよい方法ですが、だんだん民間の色が強くなってくると、何の組織なのか、何の集まりなのかというのを、非常に気にしながらやっていくケースが多くなっているという気もします。

わたしの実家は鹿児島島の田舎ですが、狭い田舎で何か起こそうとすると、「〇〇は、何とかさんの家の何とか君が始めたんだ」と、よく知った仲なのですが、東京みたいな大きな新興住宅等では、いろいろな組織もすでにあたりする中で、あるコミュニティを新しく作っていく、もしくは継続してやっていくというのは、またいろいろな問題も発生してきています。ただ、先ほど冒頭に申し上げましたが、皆さんの意志は非常に高いレベルにあるなというのを強く感じました。

祭りから生まれる新たな交流

(長谷川) 山畑さんが調査して感じられたものは。

(山畑) 山形と東京・横浜という地区を例に、地域による世代間交流の違いがあるかと考えていたのですが、それはあまりないですね。今の小山田さんのお話のように、昔の社会では自然に交流しあっていたことが今は欠落しているということに関する危機感を、感じている人と、そういうものに無頓着な人がいます。ただし、そういう世代間の断絶などは当たり前のこととして受け止めて、普通に暮らしている人の割合は、都会である東京・横浜のほうが多いという感じはします。ただ、危機感を持っている人たちの思いというのは、それほど地域の差は無く、とにかく何かやらなければいけないということを考えています。

東神田と東日本橋で行われている東京デザイナーズブロック・セントラルルイーストではお祭りを挙げるために人が集まらざるをえない訳ですが、過疎化も進み、一方ではマンションができて新住民も入ってきている。そういう状況で、お祭りを続けるために彼らが始めたのは、まず子供会・PTAを味方にしながら、その次世代のお神輿の担ぎ手を養成してゆくことです。それで、そういうところから入っていく。それからあのあたりは問屋街で、今は空き店舗や空きオフィスが多いのですが、そこに若い芸術家たちが日本のSOHOみたいなものを作り出そうとしています。そこで地元の若い人と、外から来た若い人との交流が起こっています。

いわゆる郊外で暮らして育った若い20代の若者というのは、自分たちの住んでいる町で何かをやったことがないし、近所づきあいもあまりなく、下町に来て地元の人たちと一緒に道を歩いていると、みんな顔なじみであることに驚いたりするようです。この地域の若者は東京とはいえ、そういうつきあいができているわけです。だから、世代間ギャップ以上に、同世代における地域ごとの育った環境の差があるという話も伺います。

(長谷川) 今の地域というのは、ある地区に人が生まれながらに住んでいて、郊外で生まれ育った人がそこに移り住んできたということですか。それともたまたま・・・。

(山畑) 移り住んで来る人もいますし、デザイナーズブロックというイベン

トに、ボランティアで若者がどんどん集まって来ています。そうすると、ボランティアだから別に拒む必要はないのですが、やはり人とのつきあい方を知らない、マナーを知らない若者もいて、そういうところから教えなければいけないというようなところもあるようです。

(長谷川) そういうときにリーダーシップを執るような世代はちゃんといるのでしょね。

(山畑) 東京の場合、地元で会社を経営している50代の方が、お祭りを通じて顔が利くので、それを利用しながら、学生をまとめていくというような形です。ただ、あえて何か教えようとかするわけではないのですが、実際参加している中で若者たち自身がいろいろと覚えていくことを期待しているようです。

森の“聞き書き甲子園”

(長谷川) なるほど、とりあえずありがとうございました。檜楨さんもやはり調査していただいたのですが、その中で今と同じような。

(檜楨) わたしは二つほどの議論をまとめている最中なのですが、一つは「森の“聞き書き甲子園”」というもので、子供の世代と森の世界にどっぷりつかっている世代の交流イベントです。森の聞き書き甲子園のイベントは、2004年度で3回めになっていて、森林の管理、いわば名人とか名手のところに高校生が100人くらい行って、聞き書きをします。大体それが始まるのが5月の初めで、実際に研修をやるのが8月で、ヒアリングに行ったりするのは9月で、最後の発表が3月ということで進められています。このイベントは2002年度に全額国の資金で、2004年度から全部民間からお金を集められるようになりました。それから、これまでの2年間森の“聞き書き甲子園”に参加した学生、つまりOG・OBが中心になって、千葉県の県有林で名手・名人との交流会を行うようになっています。

この場合に、なぜ世代間交流かという議論なのですが、それははっきりして、日本の森や川がこのままでは、山地過疎の問題と重なって、生活の文化ごと失われてしまうという危機的状況に対する一つの提案なのです。これは林

野庁の平野さんという方が言い始めて、あれこれやって進められているようですが、それは一つ形を示しつつあって、これから長年進められるべきものだと思います。

アサザプロジェクト

もう一つは、同じ環境問題なのですが、一般には市民型公共事業という既にも有名になっている自然再生を目標としたアサザプロジェクトというものがあります。これは直接的には霞ヶ浦の汚染問題への対応としてはじめられたもので、アサザという水草を小学生が定期的にずっと維持していくような仕組みで、全体の水環境を守っていこうというものです。それが大体 120 ぐらいの小学校とタイアップして、ずーっと流域をやっているのです。小学校はいわば総合学習という形で、それを毎年やり続けています。同時に霞ヶ浦の流域の小学生がそれぞれの学区の地域でおじいちゃんおばあちゃんから昔からあった地元の草花や遊びを聞き書きしているのです。世代間の交流を通して地域の生活史を残そうとしているのです。それらは市民型公共事業という言い方をされていますが、この場合にはむしろ公共事業というのではなくて、そういう生活排水あるいは水辺に関して、多世代がどのように絡んでいくかという読みかえをしてやっていったら面白いかと思います。

世代の不連続

ところで、逆にいうと、リサイクルや先ほどのお祭り文化とか、ああいうもので再結集しようとする、コミュニティ作りをする動きが 90 年代から出てきているわけですが、これを世代間交流のメインストリームとして位置づけるべきかどうかというのは気になっているのです。というのは、やはり高齢化、少子化、都市化、情報化という中で、世代の連続的な構造が失われている。つまり世代というのは、10 代、20 代、30 代、40 代、50 代という世代があって、その世代には通過儀礼も含めて、日本の社会の仕組みの中で、これがどこかで切れたり、あるいは私は団塊の世代だから特に思うのですが、世代間のすき間が大きく空いてしまった。あるいは少子化の中で、とにかく若い人たちのアシストが欲しいから今フィリピンからの看護師さんがいるというような、そういう世

代の不連続という状態が生じている。そういう不連続の中で生じた世代間を結びつけるというテーマに対して、どういう手があるのか、あるいは結局は地域から積み上げていくという議論、あるいは地域コミュニティというところに戻りし直し込んでいって、上げていくしかないという、社会のシステムとして、これから提案されていくのだろうと思います。そのことについての議論がどこかなければいけないのではないかと。というのは、世代間戦争とか、特に年金をめぐる議論が片方であることを意識しながら議論を進めなければならないでしょう。

さて、自治体の視点からの世代間の議論は、やはり健康・医療・福祉と教育のジャンルで主に扱われているのではないのでしょうか。加えて、先ほど小山田さんがふれられましたが、公共施設などの問題も指定管理者制度になっていく中で、管理をしていく中で、どのような世代間交流的要素をつけていくのかというテーマも、確かにあるだろうと思います。

ただ、もう一つ気になっているのは、先ほど小山田さんの話を聞いて特にそう思ったのですが、コミュニケーションするときの従来の地域の枠組みとか、地域のコミュニケーションの枠組みではない枠組みを、つまり自分たちの活動を通して探してろうとしているということです。これは地域の中でも行政ではなく、どちらかというと市民なのです。市民として自立しながらやっという動きがかなり強く出てきていて、そのネットワークをコミュニティとしてきちんと認めてあげることが重要だと思います。はっきりいって自治体行政の、特に行政マンにとってみれば、特にこうやって自治体側で動いているからかもしれないけれども、どちらかというと、あれは趣味の人たちがやっているだけだみたいな、コミュニティとして認めていない。しかし、片方では公私協働という形で、そういうものが出てきていますが、この我々の新たなコミュニティ議論のところで、そういう既存のものを打ち破っていくという提起を出していくということなのだろうと思います。

まず横のつながりをつくる

(長谷川) ありがとうございます。世代間の問題は、社会学的な難しい問題もたくさんありますが、では、なぜそういうことが起きたのだろうかと。マクロ的にいうと、やはり一つは、戦後から都市化という現象で、山形県でも秋田

県でもどこでも、みんな東京に来てしまいましたよね。そうすると、結果として残っているのが高齢者だけになってしまって、そこで構造的に何かやろうとしてもできなくなってしまっている。一方、東京に来た若い世代たちはどうなっているかという、なかなか一軒家を買うのも大変だし、例えばマンションなどに入ってしまう。やはり居住の形態にしても、自分の世界に入ってしまった、横のつながりをしなくても生活できる都会の利便性みたいなものもあると思うのです。若い人にはそのほうが生活しやすいし。

それともう一つは、檜楨さんはたまたま八王子のほうに住んでいるわけですが、戦後それこそ団地とか、大規模な宅地開発をしてきましたが、そこに移り住んでくる人たちは、新婚や、初めての持ち家とかある限られた世代しか入っていない。

(檜楨) 大阪の千里ニュータウンが典型的なものと言われました。今では多摩ニュータウンなどもそうです。

(長谷川) そうですね。ある限られた世代が同じ地域に住んで、時間だけ経っていく。世代が平行移動していくようなもので、その移動につれ様々な問題が起きてくる。一斉に幼稚園が必要、その後は小学校、中学校、というように。

(斎藤) 凶らずもおっしゃったのですが、要するに団塊の世代という言い方をするじゃないですか。そこに入っていない、そのあとの世代から見ると、ある意味で固まりだし、何か一つのまとまりとして生きているのだなという、うらやましさがあるのです。わたしたちのところはその下になっているから、何も経験していないです。高度成長期のいいところは経験しているわけですが、苦労も何もしない。そのかわり学生闘争も経験していない。気がついたころには終わっていて、物心つくとなりの代は団塊の世代とあって、一固まりになっている。その下は何もないのです。ぽこんと空いてしまっていて。だから、今回の問題意識として、世代間というのを取り上げているというのが、まず、正直いうとあまり意識していなかったことなのです。地域活動はそれなりに多摩地域と下町葛飾などでやっていて、少し見ているのですが、多摩のほうも先ほど言ったようにある一つの世代しか来ていない。その人たちがこのままでは、世代は一つなのですが、その横のつながりもないのです。だから、

そこをまずつなげなければいけないのをどうしたらいいかという。

(長谷川) 横のつながりがまずないと。

(斎藤) まずないです。団塊の世代はそれなりに何か通じ合うものがあるじゃないですか。それが何もないのですよ。横がないのです。横をつなげるためにどうしたらいいのかという動きがけっこうあるのが、我々の世代なのかと思います。

(小山田) 世代間の固まりはあるのだけれども、横がないと。

(長谷川) それは面白いですね。

横の繋がり創造

(斎藤) それで、多摩ニュータウンのほうで一つ知っている事例は、柔らかい組織なのですが、まず隣の家や隣の団地に挨拶をしにいこうということから始めて、今はライブ長池のNPOとして、けっこう出てきています。NPOぽんぽこ(NPO・FUSION長池)という、富永さんという人ですが、その人もやはりこのままではいけないと。団地に住んでいるのですが、職場はそこ東京だったのです。これはいけないというので、けっこうフレンドリーにいろいろなところに挨拶に行ける人だから、挨拶にいこうということで、どんどん行ったのだそうです。それで、地域誌を出してみようと。それを配る人をやろう。それから、それこそお祭りをやろうと。お祭りも組織を作らずに、来たい人はどうぞというやり方で始めた。そのうち、そうはいつでもそれに保険がないと困るからということで、最終的にNPO化したという形です。やはり横をつなげる動きだったかと理解しているのです。

同じ動きが実はわたしの住んでいる葛飾にもあって、葛飾のほうは高齢者はそれなりに元気な地域なのですが、ちょうど産業をつかさどっている若手のところが、やはり横のつながりがない。このままだと全部が沈下してしまうということで、葛飾の場合には若手産業人会という、45までと一応決めて、大体親の跡を継いだか、今度継ぐという世代の集まりです。その人たちが何かや

らなければいけないということで集まりを持って、地域を活性化するためのコンサートを開いてみたり、要するに若手の歌手さんや音楽家を育てようというためのコンサートを開いてみたり、公園を利用して大きなイベントを開いてみたり、そこから派生して、ネットワークを利用した教育システムを作ってみようということになったり、そういう活動はしているのです。その地域活動の中で、確かにその上もないし、下もないという状況です。それを確かに世代間交流がないまま動いているといえれば、そうなのかなという気がしました。たまたま今のお話を聞いていて思い当たったことですが。

(長谷川) 確かにそう言われると、団塊の世代は横のつながりはあるような気がしないでもないですね。だけど、今の世代は横のつながりすらもないと。

(斎藤) 多分、我々の世代ではないかと思います。30代になると、今度はガンダム世代といって(笑)、どうもガンダムでつながっているらしいのですよ。ガンダムを知っていて、リアルタイムでアニメを見て育った人たちで、今ちょうどその人たちが産業界の中心になりつつあるので、ガンダムグッズがたくさん出てきているじゃないですか。それにも乗れないのです。だから、多分30代はガンダムの何を見たかというのでつながるのです。

(檜) 共通項がないということですね。つながっているかどうかより、共通項が共有できない。

(斎藤) たまたまわたしは子供がいないから、子供がいれば、またもう少し違う、下の世代とつながることもあるのではないかと思うのですが。

問題を契機に生まれる動き

(長谷川) そこが一つのパラメーターなのですね。阪神の大震災が起きてちょうど10年ですよ。それで10年間何をしてきたかといういろいろなテレビ報道番組が、流れていた。僕も幾つか番組を見ていて考えさせられたのですが、特に今回の問題に即して思ったのは、例えば震災で崩壊しかけたマンションに住んでいて、今後どうするか。管理組合として、建

て替えをするか、それとも補修をするかと。マンションというのは典型的に「隣は何をする人ぞ」の世界ですね。一応管理組合があるけれども、基本的に管理会社が管理していて、普段それほど積極的にコミュニティ活動があるわけではない。震災を契機に実はみんなで考えないとにっちもさっちもいかなくなるということに気がついたと思うのです。それで、集会にも熱心に参加してくる。家の問題だから、参加してきて、いろいろご意見を言って相互理解も深まっていく。

そうこうしているうちに、みんなでもちつき大会をやろうとか、コミュニティ意識が芽生えてくる。それをずっと番組として、10年間の流れみたいなものをしていました。自分の家の存在を揺るがすぐらいの大きな問題が起きると、住んでいるさまざまな世代の人たちが団結しなければいけない事に気づいて、世代間交流が始まっていく。

(檜 榎) 世代間交流の必然性がでてきているのですね。

(長谷川) そうです。そういうことが起きないと。一方、先ほど檜榎さんが自発型みたいな、むしろ身近なすぐの問題ではないけれども、森林が大事だとか共通の問題ですよ。こういうのも世代間交流を促進させるきっかけになりますね。

(山畑) 東京デザイナーズブロック・セントラルイーストでは、都心部の過疎問題からくる空き店舗の活用やお祭りに結びついている問題が根底にあるわけですね。

(小山田) それぞれのコミュニティには何らか根っこの課題が存在しますよね。何か問題が起こると、昔の話が発掘されたり、気持ちが結集していったりするわけで、世代交流の種は結構潜在化しているのではないですかね。もともと問題というものも日ごろ捨ておかれていたか横においていただけでも、あるきっかけで顕在化すると、すーっと本来感じていた課題認識や団結心みたいなものも一緒に出てきて、それがコミュニティ活動のエンジンのような動きになっていくという状態があるような気がします。

(山畑) 西川町の学生助っ人隊などというのは、雪下ろしをする人手がなくなって、それを若い人に手伝ってもらおうというようなことがきっかけです。

(斎藤) これはどちらが言い出しっぺなのですか。若い人ですか、それとも。地元の人が言い出しっぺ

(山畑) 地元の人たちです。

(檜楨) 先ほど、山畑さんの話を聞いていて気がついたのですが、災害というのはどうだったかという、つまり恒常的にあった、提供した仕組みとか、特に行政の仕組みなどは全部有効ではなかったということを見せつけられたわけですね。既存の仕組みがだめだったというのが猛反省して、それで地域社会で「もちつき」などの交流イベントまでやるようになっていくわけです。結局やっておかなければいけないと、気がつかされるわけです。そういう点では、この世代間交流という大きな要素の中に、今、緊急制度だの災害とかという、行政とか既存のものに頼れないという、ある種のリスクヘッジというか、そういうものが一つのきっかけになるのではないかという気がします。

都市に内包された仕掛けが動かない

だから、普通にみんなやるのではなくて、もともとはそんなものどこか都市の仕組みの中に内包されると思っていたというか、先ほど言われた公共施設など、小学校、中学校、保育所、老人センターと、全部まさに世代ごとにできているわけでしょう。ところが、いったん震災が起こって、今度の新潟もそうですが、いちばん大変だったのは病院はあったけど使えなかったのですね。だから、そういう皮肉なのですが、結局みんなを体育館に入れていかなければいけないというような構造の中で、自分たちで、まさに世代間のつなぎ方をしていけると、生きていけないというようなことを見せつけられて、改めて、そういうコミュニティができるという要素は出てきていますね。

だから、もう一つ言わせてもらおうと、さっき言った指定管理者制度というものは、2006年9月までに適用されるものですが、今行政やその息のかかった団体がみんな管理しているのではないですか。それを市民生活の専門家の市民グル

ープに渡していく先駆的な動きとしてとらえるべきだと思っています。かつてのように施設の管理と公権力の行使と位置づけて、それを民間に出していくという見方がまだまだあるのですが、行政や行政の息のかかった団体が管理していたから全然機能しない。この制度でようやく生活する人たちのところに、世代間の交流をする人たちの中に下りてくるきっかけになるということを、きちっと言っていくべきだという気がするのです。

そういう意味では、これまでの地域のつながりの中で、自治体であっても行政に依存しすぎた部分が、全体の流れで、要するに我々は、社会が動くという新しいステージを迎えつつあって、地域に居住する市民で世代間交流をしていくということが明らかになっている。もともと行政に全部「おんぶにだっこ」だったことが良くなかったということが、僕は山畑さんの話を聞いていて、感じます。要するに、都心でどうして過疎になるのだと。どうして人がばらばらになってしまうのかというのは、やはり行政依存なのですよ。

2. 世代間交流が起きないままだと地域はどうなるか？

(長谷川) ここで視点を変えて、次の視点に入りたいと思います。次の視点というのは、もし積極的であろうと何であろうと、世代間交流があまり起きない状態がずーっと続いていったとしたら、どうなるかです。地域社会で一体どういうことが起きてきてしまうのだろうか。

先ほどの山畑さんの例など、雪かきも行政に頼むと、財政負担が必要になる。では自分たちでやれといっても、お年寄りが屋根の上に乗って雪を下ろすわけにはいかない。だれか業者に頼んで下ろしてもらうとなると、またお金もかかります。やはりだれかその中でボランティアみたいなところでやっていくということが現実的な解決になると思います。あるいは少なくとも実費だけ負担するとか。

公共サービスが膨れ上がる

(小山田) ちょっとまだ思いつきでしかないですが。一つはこのまま何もしていないでいると、やはり今の仕組みで対応するしかない。より公共に頼るしか

い。国や行政に頼るとなると、「公」にお金がかかって、どんどん膨れ上がっていく。高齢化が進み、少子化が進むと同時に、コミュニティ活動も公共サービスに頼るようになると、お金がかかってしょうがなくなりますよね。金の問題に大きくぶつかることになると思います。それではだめだろうというので、自主事業というか、自分たちでやろうとします。あまりきちっとした組織は嫌うわけですが、何かやっていきたいなという気持はあるわけです。コミュニティ活動はネット上でもさかんですし、ネットワーク社会は便利で有効ですが、何もかもネットで済ますようになってしまうと、地域での何か自分の居場所がどんどんなくなっていくのだろうという気もします。

わたしもポスト団塊の40代ですが、今の時代、会社だってどうなるか分からない。大きな企業も分からない。行政だってつぶれるかもしれない。いろいろな事件が起きていて、自然界でもあんな大津波が来て、世の中一気にくずれるかもしれないという危機感の中で、今、地域でも何かやっていたいという思いが強い。同世代のわたしの周りにはいる人たちも、このままでだと自分自身がなくなるという危機感がどうもあるのではないかと。

(長谷川) 自分の存在すらも危うくなってくる。

(小山田) 会社においても、それぞれの組織の形も変わってきたし、やらなければいけない立場も変わってきているのだと思います。地域や家庭の中で、何かやはり変わっていかないと、自分がいなくなるなという危機感を非常に感じます。先ほども申し上げたように、このままの社会だと、とにかく金がないとどうしようもなくなってしまう。気持ちも安らぎもすべて金の力が優先される。どうしたもんかとちょっと感じています。

学童保育での親のつながり

(長谷川) では、山畑さん、どうでしょう。例えば先ほど言った文化的な継承、お祭りとか、おみこしを担ぐ人だっていなくなってしまうわけでしょう。そうすると、やめざるをえないですね。

(山畑) 横浜のとみおか連の例ですが、実際にお囃子などは、外部から人を

呼んで祭りとしての体裁を整えていたわけです。地場の人ではないのですが、そうやらないと、もうお祭りが成り立たない。しかし、自前のお囃子が欲しいという人がいて、それで子供のお囃子を作って、今までお祭りに呼んでいた人たちから一生懸命教わりながらやっているうちに、もう第一世代は育ってきて、彼らが小学校の低学年に教えられるような仕組みに成りつつあります。一方、並木の埋め立て地では、町がニュータウンとしてできた時に、そこに新しく入ってきた親たちが将来のことを考えて、子供が大きくなって町から出ていっても、帰ってきたときに集まれるイベントとしてサマーフェスティバルを作って、そこでは毎年フリーマーケットが出たり、屋台が出たり、そういう祭りの的なものをあえて作っています。このように文化的なイベントでのつながりを欲しているというところがあります。

（長谷川） では、そういうものをなくしたら、一体どのようになると想像しますか。

（山畑） 自分自身がいま住んでいるところは、中学3年で引っ越してきたところなのです。それで、中学は地元の中学に通っていませんでしたので、全く同世代の友達が近所にいません。弟は地元の中学に行きましたから、正月などに帰ってくれば友達のところへ遊びにいったりするのですが、僕は住んでいても周りに友人がいないのです。今ようやく子供が学童保育に行って、学童での親どうしの地域的なつながりがすごく面白くなってきているので、そのような住民どうしのつながりの無いのは、とてもさみしいことなのだなと感じています。学童の親の世代もまちまちです。第一子の子供が小学生の若い親と、いちばん末っ子が小学生だという親では15～20ぐらいの歳の差があるわけです。そうすると、親どうしでも世代間のギャップというか、考え方も違うのです。ただそれが、学童の役員などを一緒にやっていると、そういう年齢や職業の違う、いろいろな人間が集まって、地域の中で顔を作っていくという面白さを、僕自身は今初めて体験中という状態です。

しかも今、横浜市は学童保育に対する補助金をカットしつつあって、学校の中に「はまっ子」という放課後のクラブを作っています。そこは基本的に無料です。ただ、監視をしている人がいて、自由に子供を遊ばせているということなのですが、要するにそれがあるから、もう学童保育は要らないだろうという

スタンスなのです。

学童保育というのは第2の家庭といわれているので、指導員が子どもをしつけて、小学生どうしの上下関係をうまく作りながら、低学年は一人っ子であってもお兄ちゃんお姉ちゃんがいる上下関係を学ぶことのできる場がすごくいいなと思って、子供を行かせています。それが子供の自由に任せると、やはり同じ学年の好きな友達とゲームをやるとか、それだけで終わってしまうのです。僕らの子供のころは、近所のいろいろな年令の子と遊んできたのですが、今の子供たちはほうっておくとまずやらないですね。それがたまたま学童というところで実現できているし、また親どうしのつながりも持っています。今の指導員が若いのですが、その若い指導員に対して親がああだこうだと、逆に指導したり（笑）、その辺が面白いのです。

町の中を歩いていると、子供にあいさつされたりするというのは、子供が小学校に入ってからですね。

（山畑） もう一つ、ちょっと話は違いますが、PTA活動をできる親のグループと、共稼ぎでPTA活動ができないでいる親とに分かれる気がします。PTAのような学校の場でお母さんたちが集まる場所には、今は父親は出てこないのですが、学童だと父親も母親も出てきて、そこはそこでグループができ、母親が中心のPTAには父親はあまり出てこない傾向にあります。同じ近所付き合いでも、専業主婦のグループと共稼ぎのグループ間の交流が少ないような気がします。

コミュニティビジネス

（長谷川） なるほどね。齋藤さん、どうですか。もしこのままこういう状態がずっと続いていったとしたら、どのような地域社会のイメージになってしまうのでしょうか。

（齋藤） 一つは、小山田さんがおっしゃった自主事業という中に出てくる、コミュニティビジネスという言い方をして、うちのほうの先生が言っていますが、やはり、この際だからビジネスを起こしてしまおうと。それは大きくするのはなくて、自分がちょっと気持ちよくなればいいというようなビジネスだ

と。地域に、何かちょっとした、それこそ先ほどの雪下ろしサービスをして対価を頂くとか。一時期はやったコミュニティ通貨までいってしまうと、ちょっと違うのではないかと思うのですが、若干ビジネスになるものを目指すものが出てくるのではないかというのが、一つ希望としてはあります。ただ、これも変な話、やはり若くて元気なときでないと思いつかなくて、だんだんそういうものも考えるのも面倒くさいし、立ち上げてずっと継続していくのに面倒くささを感じる。これは思いついて5年続けばいいほうで、それを10年20年というスパンで考えていくのはなかなか難しいので、最終的にはやはり地域はばらばらになっていくのかなという気はします。

(長谷川) 今のコミュニティビジネスというのは、ちょっとうがった見方をすれば、一つの要因として、地域の中における世代間の交流がきちんとできていないがために、そこにある種の間隙が出てきてしまうと。そこを逆にビジネス化すれば、という意味もありますよね。

(斎藤) そうですね。ただ、それはやはり大きな組織にだんだん乗っ取られるという大変ですが、ネットワーク化されていってしまうのではないかという気はするのです。だから、コミュニティビジネスがコミュニティビジネスとせずとやっていけるとは、ちょっと思えないところはあるのです。そうすると、先ほどの話ではないですが、お金があればできると。ない人はもう何もなしということ、だいぶ格差が出てくるのではないかという気がします。格差を楽しめるぐらい資産がちゃんとたまった人は、このままでいいじゃないかということになるでしょうし、そうでない人は本当にいろいろつらいのではないかという気はします。

世代間交流は地域社会の血液

(長谷川) それについては、後でまた少し議論したいと思います。檜楨さん、どうでしょう。このままだったら。

(檜楨) コミュニティを壊しやすくなる。産業資本といいますか、例えば東京などもそうですが、つまり大手の企業用地をどんどん作っている。景観の間

題やいろいろな問題を言わなくなるから。それから、こだわりがなくなるから。さっきの特に山畑さん、地域のこだわりなのですが、そういう意味では一言でいうと地域崩壊に至るだろうと思うのです。ただ、さっき言われたように、高齢所帯ばかりになって、集落が多分このままでは、このままで何も発信しないでほうっておくと、ということでしょう。そうすると、やはりなくなるしかないわけですよ。だけど、高齢者の中でもそういうこだわりを出してやっていたら、新たな人たち、若い人たちがやってくれる可能性はあるのですが、やらないと多分消えていくということはね。

(長谷川) 都市の中はどうか。

(檜 榎) 都市の中でも、今の話に出てきたように、穴が空いているでしょうし、そこは有効な開発用地として、どんどん活用していけばいけるわけじゃないですか。こだわりがないわけだから。だから地域のこだわりを、別の言い方をすると、地域や近隣の血液なのですよ。地域間、世代間の血液でしょう。

世代間交流とは何かといったら、地域社会の血液みたいなものです。それがなくなると情報は行かないし、それから、それぞれの人たちのネットワークが動かない。そうしたらどうなるかという言うまでもなくて、血が止まるのだから死ぬしかない。そう言っておいていいのではないかという気がするのです。だから、それを何とか支えていこうとって、先ほど公共施設がお金を出して、頑張っただけで死なないようにしている状態というのはたくさん出てくるかもしれないけれども、それはもう生きていく価値がないみたいなものかもしれません。ホスピス医療になってしまうでしょう。

(長谷川) 生きていく価値がないとは、きつかったですね (笑)。

(斎藤) 神経網がどこまで広がっているかが、やはり地域の縄張りみたいなイメージですね。

(檜 榎) 交流するというのは、その確認が行われて、随時行われていなければいけないという状態です。もうちょっとというと、公共施設が全部だめになるわけですよ。先ほども少ししか言えませんでしたけど、全部世代別に造ってある

わけじゃないですか。乳幼児の施設から墓場までというか、火葬場まで全部、地域社会にあるわけじゃないですか。それをそれなりの社会システムとして維持していくというわけでしょう。それに関心を持たなくなったら、動かなくなったら、それはだめになるわけですね。小学校、中学校が廃校になっても黙ってしまうという、地域社会というのはそういうときに大変不幸だということです。それは地域間交流が行われていないからでしょう。それを行うエネルギーがあれば、神経が動き出せば、それなりに未来まで続くのではないのでしょうか。大事なことではないかと思えますね。

(長谷川) もうちょっとドラスティックにいうと、血液というのは大変面白い表現だと思いますが、都市という空間で考えてみると、それがなくなるとまず安全性が非常に問題になる。みんな見て見ぬふりをして何も言わないから、セキュリティの面でも問題が出てきますよね。恐らく町の中も荒廃してくるといふか、美的な面でもあまりみんないわなくなってくると、自分が住んでいる空間なのに、あまり楽しくない。結果として活力がどんどん低下して行って、自分のところだけ守ればよいというようなエゴイスティックになってしまつて。さらに全部それを公共でやろうとすると、ものすごくお金がかかる。例えば安全を担保するためにお巡りさんの数を増やしてぐるぐる回る。結局高い税金を払わなければいけなくなるということにフィードバックしてくる可能性がありますね。

(檜楨) だから、世代間交流というのは民主主義の一面なのですよ。民主主義の具体的な展開で、それをちゃんとやっていないと、自分自身が安全も防災も含めて、やっているから、討議できて、いつだって何かできるという条件設定になる。だから、市民として生きていく一つのツールとして、世代間交流があるのだというくらいまで、いっていいかもしれません。そういう、具体的に何を表現しているのだろうかという、もっと原理原則みたいなものを、実は世代間交流という枠を通して、我々自身のアイデンティティも形成していくし、それから直接民主主義としてそこに参画していくということになります。

3. 新たな市場サービス、コミュニティビジネスの可能性

(長谷川) では、今度は少し市場ベースで、マーケットへのサプライとして考えたときに、逆にこんなことが起きるのではないかと、そのあたりを議論しましょう。例えば、象印がお年寄りの安否を確認するのに、毎日使ってる電気ポットにITを組み込んで、遠隔地からそれを確認できるシステムを開発しています。これもコミュニティビジネスに関連していると考えられます。

(齋藤) コミュニティビジネスは多少受け売りで、自分の専門でもないのですが、一つは例えば、若干ハンディキャップを持った子供たちに、ワインを作ってもらおうというようなことを地域で起こそうとしています。何でいいかというと、その子供たちはものすごく丁寧に、ゆっくりとワインの樽をひっくり返すのだそうです。ちゃんと教えられたことをきちんとやってくれる。そうすると、とびきりのワインができるということで、子供たちの生きがいにもなるし、地域は地域でそれを生かしたものをやると。ただそれは、最初は荒れた土地で、そもそもはそれを耕すところから始めたのだそうです。ワイナリーを造ろうとして。ところが子供たちは、それまであまり元気がなかったのが、斜面を歩いているうちに丈夫になったしということで、全部うまくいきだして、1回火事に遭ったらしいのですが、そのころにはだいぶ認知されていたので、各地域からばーっと「大丈夫ですか」という話が来たりして、うまくいっている。それは調べた先生はうまくいっているとおっしゃっているのです。そういう例があります。

多摩ニュータウンのNPO

それから、コミュニティビジネスになるかどうか分かりませんが、先ほど言ったNPOぽんぽこ(NPO・FUSION長池)などは、そういうことで、例えば住宅を共同で買うというようなことをしたり、多摩ニュータウンはやはり教育レベルが高いのかと思うのですが、危機意識もほかの地域より高かったのではないかと思うのです。世代間交流ももちろんないし、自分たちはどんどん年をとっていつてしまうし、若い世代は戻ってこないということで。ちゃんと自分たちで何かしなくてはいけないというときに、共同の住宅を造るのに専門家がいるということで、チームを作って、土地を探して、共同住宅を造る勉強会をしてやったとか、物の修理をするグループを集めて、子供のおもちゃを

直すとか。最近では自然館の委託を受けて管理をしているということらしいです。

それに、ちょっとこれはビジネスとは違うのですが、むしろ最後のテーマのときに言おうかと思ったのですが、多摩地域は大学が多いので、学生アルバイトはけっこう行くのだそうです。そして地域の自然館のインストラクターになって、地域の子供たちを教えたり、自分たちの卒業論文を、そこでテーマを見付けて書いたりということをやっているらしいです。何か自然にそういうものができているということを知っています。

大学生の活用

今、小学校、中学校、高校、あるいは小学生がいるところは本当に地域の中だし、親もその近くに住んでいるし、交流ができているのだらうと思うのです。小学校自体が今つぶれているところもたくさんあるので、またそれも問題ですが。それで、大学生がどこにいるかということなのです。一時、ちょっと前までは、大学は研究機関だったから、何も学生がうろうろしなくてもよかったのですが、最近は大学は、この辺は私立だからあれですけども（笑）、地域サービスをしないと生きていけないというところがあるのです。

（長谷川） 密着型ですね。

（斎藤） 密着型。ところが多摩というところはみんな山の上に大学を造ってしまったので、よほど何か仕掛けていかないと、学生は町に下りてこなくなってしまうのです。それでも何人か意識のある先生たちがいれば、コミュニティビジネスを考えるために、わざわざ学生をフィールドワークさせたり、うちの大学だと、自己発見ということで、グループを組ませて何が問題か探してこいという授業をやったりします。花火をもう一回復活させようとか、留学生問題があるとか、落書きを消そうとか、いろいろなことを探してくるのです。バス停にイスがないところが幾つもあるって、高齢者が困っているから、イスを置いてみよう、それで何人ぐらい座るか調べようといったことをやったりしているのです。そういうことが起きてくると、そこから今度は空き商店街があるから、そこに学生がベンチャーと称して、ネットワークビジネスを始めるために

入ってみたり、ということが始まってきます。そういうチャンスがあるのではないかということです。今、大学生といっても、研究のために来ている大学生はほとんど少なくなっているのです、実際に社会に出るための勉強をするのだったら、地域で何かやってみなさいというやり方もあるのではないかということの一つ思います。

ところが、その恩恵にあずかれない地域もあって、実は多摩はまだいいのです。大学がたくさんあるから。都心もまだ大学がたくさんあるから、いろいろな仕掛けができます。下町が全然ないのです。5地域で一つもないぐらいです。

葛飾や台東など全然ないのです。だから、それはどうしたらいいかというのが、言って初めて気づいたらしいのです。わたしなどが葛飾で言って、初めて先ほどの若手産業人会、自分たちは事業をしているから全然問題ないと思っていたのですね。ところが「学生いないじゃない」というので初めて気がついて、これは大学誘致など考えないといけないという話になってきたのです。そのために動いてはいるのですが、やはりこれはなかなか簡単には実現できないですけどね。ちょっと趣旨に外れたかもしれませんが。

ネットの世界・ブログのコミュニティ

(長谷川) いえいえ、そういうところから、よく観察することによって掘り起こして、それを市場化すれば、ささやかながらも社会サービスにもなるし、またビジネスにもなる、そのような面がたくさんあるではないかということですね。ネットの世界から見て、何か積極的に世代間交流を図るような事例はないでしょうか。

(小山田) 具体的にどこのサイトというのは難しいですが、一つまず今、電子日記というか、ブログ、あれはやはりある一つのブームというか、形ができてきていて、いいも悪いも、非常にリアリティがあるものですね。新しいコミュニケーションツールとしては大変面白いのではないかと。

(長谷川) その辺、「電車男」は面白かったですね。

(小山田) ネット上のログが出版になるのもありますね。現実を扱うものも

架空のものもあるだろうし。今回のスマトラ沖地震の大津波のときも、世界のブログサイトからいろいろな情報を発信したりしていました。阪神淡路大震災のときもそうだったのですよね。そういう面においては、世代間交流ではないのですが、世代間を渡って、ネットにアクセスできる環境と意識がある人は、ネットの相手は世代間というのはあまり感じていなくて、だれが発信しているかあまり気にしていなくても、その話題について、何か話題を共有する、もしくは問題意識を共有するという仕組みは作りやすい環境はあると思います。

こうしたネットコミュニティは、悪いほうにとれば集団自殺など大変なことが起きるわけですが、良い面においては意思疎通をしたり、知るきっかけになったり、何となく自分で頭を整理するときに、ずっと読めるとか、そういうツールにはなっているということがありますね。

カフェ、スペース事業

それから、ビジネスなのかどうか分かりませんが、コミュニティカフェともいえるべきものがありますよね。京都にバザールカフェと呼ばれる場所があります。様々な社会活動をしているグループの共同運営のカフェで、運営や労働を通じて自立支援の場を生活の中に作り出す試みをしています。お茶を飲むだけの喫茶店ではなくて、かといって交流をするためだけに集まるわけでもないのですが、お茶をする（話をする）時間を共有できる場、その場の提供というか、場に集まって何かやっているときに、他のチームともたまたま何かが始まる、共感するコミュニティが増えるといった感じ。公民館やどこかの会議室などではなくて、そういうカフェという場所を使って、クイックカフェではなくて、何かそこにいることによって何かが生まれていくような仕組みをやっていきたい。必ず会員になりなさいとかではないやり方で、いろいろな人が来ていいのですよという中で何か生まれてくるようなところにしたい。カフェという大きなビジネスにはならないけれど、そういうコミュニティを、どこか芯に据えたカフェ事業というか、スペース事業というのはあっていいですよ。

それは、市民農園だったり、いろいろな形があるのかもしれませんが。森で何かやるというものもありますね。何か集まる場やきっかけを作って、ちょっとした運営費をその中で賄えるというような小さな事業がたくさんあったらいいのではないかと。

ロボットの可能性

もう一つ、今、万博でロボットプロジェクトにかかわっていますが、2010年はロボットが生活の中に入ってくる。ロボット工業会のデータではロボット全体の50%、経済産業省でいうと40%が生活分野に登場するということになっています。それだけロボットが自分たちの生活の中へ入ってくると、ロボットとのコミュニティというのも遠い世界ではないのです。今はペットブームですが、ペットと同様に〇〇ロボットはかわいいとか、ファッションやえさ(エネルギー)にこだわったりというブームがそのうちやってくるのですかね。

(長谷川) アイボなんかそうですね。

(小山田) コミュニティや地域社会の中において、ロボットはどのような立場にいるのだろうと。今回経済産業省でも安全委員会というのがあって、安全という基準を作るに当たって、ロボットと人間の関係性をもっとよく考えようという動きがあります。何だったら安全なのか、ロボット三原則というものもありますが、基準が非常に難しくなっています。今後コミュニティの中でのロボットの役割というのは、これからいろいろな形で研究がなされて、会話やしぐさ、形など進化していくでしょうから面白い市場ではあるなと思います。

(長谷川) それこそずばり世代交流型ロボットとか(笑)。

(小山田) そういうロボットって何かありそうですね。先ほどポットで一人暮らしの確認というのがありましたが、東大の佐藤研究室にロボティックルームというものがあります。そこは部屋全体がロボットなのです。その中の一つに、植物ロボットがあるのです。この植物は新潟にいるおばあちゃん、この花の咲き加減でそのおばあちゃんの行動状況や健康状況が分かるというロボットがあります。センサーコントロールとネットワークで可能な遠隔システムです。センサー収集情報を、ある一つの植物という形に表現しているのです。部屋全体はセンシングルームになっていて、どこを歩いたとか、ベッドに寝ている、寝ていないとか、食事はしたかどうか、冷蔵庫には何が残っていて何を飲んだ

か、全部データベースができていきます。さらにコミュニティをサポートするというAIソフトでスムーズな人間との共生を図ります。こうした研究を東大の研究所が一生懸命やっているのです。人間が豊かな生活をするためには、そういうロボットが介在するコミュニティがあっても、楽しいなということで、非常に興味を持っています。

(小山田) ロボットのテーマは面白いと思いますね。

(長谷川) 有名なアシモフのロボット三原則がありますね。あれだっている矛盾点がたくさんあって、ロボットは人間の言うことを聞かなければいけない、ロボットは人間に危害を与えてはいけない、これに反しない限りは自分を守らなくてはいけない。だからロボットどうしは喧嘩してもいいのですね。

(斎藤) なるほどね。

老人会と子供会をくっつける

(山畑) 昭和40年代あたりに分譲された住宅地では、子供を抱えた世代が戻ってきている2世帯の家とそうでない家、要するにおじいちゃん、おばあちゃんだけの家というのが、地域の中で半々ぐらいあるわけです。そうすると、孫のいる家と高齢者たちだけの家というのは、高齢者どうしの交流、いわゆる老人会という集まりはあるのですが、世代間の交流ということではなかなか機能していないのです。もちろん機能しているところもあるでしょうが。それで、うちなどは、一人で住んでいるおばあさんに自宅でのクリスマス会に来てもらったり、逆に何かあったときには相談にのってもらったりするようにつきあいが個人的に何軒かあります。そうすると子供たちも、自分のおじいちゃん、おばあちゃんでない高齢者と接するという経験を得ることができますが、そのような家庭は少ないでしょう。そういうことが個人的にできるところとできないところがあると思うので、そのあたりで老人会と子供会が何かうまくくっつくような組織とかイベントとか、そのような市場とはいえないけれどもある種の場が自然にできてくるような気もするし、だれかが仕掛けるような気もします。

蔵プロジェクト

(長谷川) あと山畑さんが山形でやっている「蔵プロジェクト」というのが新聞やテレビなどでも報道されているようですが、蔵というのはそういった意味では地域に根づいた古い伝統的なものですが、それをただ残すだけではなくて蔵というオブジェを残しながら、積極的に交流の場にしたいという考えでしょう。いろいろな人がそこに来ますよね。その辺で何かちょっと。それはもちろん運営していかなければいけないわけでしょう。

(山畑) 蔵というものに対するイメージが・・・。

(長谷川) 「暗」くないですね(笑)。

(山畑) 蔵の暗さが若い人には面白いわけです。蔵を持っている人たちは、子供のころに閉じ込められたりして、あまりいい思い出がなかったり、あるいは山形には蔵座敷が多いので、そこにおじいちゃん、おばあちゃんが住んでいる蔵を、将来どうしようかと考えたときに、維持するだけでもものすごくお金がかかるということに気づくわけです。それで、壊して駐車場にする例が多いのですが、それを、過半数が山形県外から来ている芸工大生が蔵の中に初めて入って、収蔵されている見たこともない物にも興味を持って、そこからいろいろなイメージをわかせて、蔵という空間をこのように使いたいというアイデアが出てくる。そうすると、蔵を持っている人や、蔵とはこういうものだと思っている人たちが、こんなことができるのかとか、こんなものになるのだという、今までとは違う使われ方やデザインなどが出てくることに興味を持つ。そこで自分も何かやってみようとか、学生たちを手伝って自分なりに工夫を始める人が出てきます。そこから何となく交流が生まれてきています。

(長谷川) 蔵という場を介在させてね。「蔵しっくの生活」とか(笑)。

人間関係の確認

(檜 楨) コミュニティの中での世代間交流の議論とは、非常にマッチングしにくいですね。先ほど斎藤さんが言われたコミュニティビジネス、これも実はビジネスというよりも、やはりお互い人間関係を確認し合うことの中で、少しお金を出し合おうというような約束だと思うのです。そこには地域通貨なども入ってくるのでしょうか。では、それをいったん市場性という枠組みを取り出すと、やはり今の市場性だと、あつという間に壊されてしまうような気がするし、やはりどうもコミュニティや市民活動といったことと市場性というのは、あまり矛盾させてはいけないということ。ニュービジネスは、以前、我々はどんどん言いましたが、ちょっとこれは簡単ではないなと感じるようになりました。もしやるとすれば、コンビニエンスストアみたいなものが、どうやってコミュニティの中である種の、特定郵便局のようなものを、どう作っていくのだからかというのはいえますね。指定管理者制度に戻すのですが、自分たちで施設を守り育てるという気持ちが多分きちっと指定管理者制度を有効に働かせると思うのですよ。住民の人たちがいるみたいな、そのようなものを世代間交流のネットワークがそれを支えるというようになれば、日本の都市社会の中の施設というものが、みんなもっとよくなるわけですから。その程度のビジネス感覚しか、わたしの感じでは、ちょっと超えきれませんね。

市場経済から私情経済へ

(長谷川) 多分このところの落としどころもできているのですよ。コミュニティビジネスが、「市場経済」から「私情経済」へと。そういうことでないと、多分成り立たないだろうと思います。だれかがおっしゃったように、回していくためにはね。

(檜 楨) たしかにコミュニティビジネスというのは私情経済ですよ。

(斎藤) 少しの運営費が入ればいいのに、その手だてがない。

(檜 楨) 経済をやっている人がコミュニティビジネスという言葉を使ったときに、むかっとすることがよくあるのです。社会をやっている人が使う分には何となく安心できるのですが。

(齋藤) 経済じゃないですね。

4. 世代間交流を活発にするには

(長谷川) 最後の一つの大きなくくりとして、今までなぜ世代間交流が必要なのかということはずっといろいろ研究してきたと思うのですが、一つは、現状から考えていくと、世代間の交流をしない限り地域の中で断絶が起きてしまって、一つは町自体に活力がなくなって、場合によっては町が荒廃して、セキュリティの面も担保できなくなる。それをまた少しでもよくしようとすると、今度は公共的なお金を使っていかななくてはいけない。結果として税金を上げなくてはならないという形になってくる。一方ではまた、その地域にある古くからの地域に根づいた伝統的なもの、民俗的なもの、お祭りなどはその例だと思えますが、そういったものがそこで断絶してしまって、継承されていかなくなっていく。もっといえば、長期的には、日本文化そのものにもいろいろ問題が出てくるのではないかとということです。

また、やや人間的な面からいえば、人間としての、しつけや、生き方のようなものが、世代交流をすることによって形成されていくのですが、それが極めて限られた仲間だけといびつな人間が形成されてくるという問題も出てくるのではないかと等々、さまざまな問題が指摘されたと思います。

僕も時々面白いなと思って見ている番組で、NHKの「ご近所の底力」というのがあります。地域に問題が起きると、そこに住むいろいろな世代からの知恵を出すことによって、少しでも解決の方向にいくのではないかと協力体制、連帯感が生まれてくる。そういうのをテレビで見て、コミュニティも捨てたものではないと安心したりします。

世代間交流の今後をどのように考えるか、お聞かせ下さい。

地域の新たなルール

(檜) 今、多分たくさん世代間の継ぎ手が出てきていると思うのです。一つ目は、非常に厳しい状態であることは確かで、世代間交流がないとか、コミュニティが薄れているという一方で、やはりたくさん継ぎ手が出てきている。その継ぎ手をちゃんと認める、それをきちっと各地域で捕まえるような作

業が要るだろうと思います。それは環境の条件として悪くなくて、情報関係とするなら、片方では地域機能の絡みだということもあるし、人のつながりを残してきているから、地域の中も変わってきている。けっこう可能性がある。

二つめは、実際に大学の周辺でうちの大学に、これはよけいなことかもしれませんが、押し花ギャラリーを作ってほしいという先生が来たのです。話を聞くと、我々の大学周辺ではもうほとんど咲いていないだろうと思われる野の花を採ってきて、それを地域の自然資源の、しかも有名な花じゃないもので作っているわけです。その地域の、大学ということはとりあえず置いておいても、センターあたりに飾っていくということをしながらか、彼女はきっとそういう地域の自然環境と地域のつながり手だと思ふのです。リーダーだと。そういう新しい試みをたくさん今から作ることが必要で、新住民とか旧住民という言い方をすると、どちらかというとな住民です。それは例えばわたしの地域は宇都宮から7～8キロ離れたところなのですが、宇都宮中心部ではそういうことができるけれども、端のところではないといっているわけです。我々大学としては、ギャラリーを造ろうと。造るのですが、ただ場所毎ではないから、それを一緒になって、どういう住民生活とかもを全部チェックしながらやろうではないかというので。教育を含めてね。要するに大学を日常に取り込もうと考えているのですが、それは一つの例であって、多分いろいろな人が何かしたがつていると思ふのです。特に女性の人たちなどは。そういうものを芽をちゃんと拾っていききたい。

それから、三つぐらい言わないといけないと思ふのですが、ずっと地域を追いかけてきたつもりでいるのですが、ようやく30年くらい続けてきた中で、継承というか、自分たちのルールみたいなものが、地域間交流のベースに作れる時期に来ているのかもしれない。

(長谷川) ルール？

(檜楨) 要するにチャーターですよ。地域のチャーター作りが、ようやく地域社会でできるのではないか。この間までは、チャーターと称して、市町村で市民が自分で生活議論みたいなことを、自然環境を守りましょうと言っていたのですが、もう少しこういったいい部分を紡ぎだしていけばできるかなという。要するに、改めて世代間交流の議論をしてみると、一人一人の住民が主体的に

動いていることが見えてきたし、地域を支える芽がたくさん出てきたということが、それをルールとして、まとめていくことがそろそろ始まっていいかなと。

だからそういう面で、片方で地方分権の議論がされているのですが、もう少し生活弱者、世代間交流ということによって、地面から立ち上げられたというか。実をいうと、上からずっと地方分権の議論をしたじゃないですか。それで何か中抜けしている感はまだあるのですが、まさに世代間交流の議論をたくさん出してみると、結局自分たちも何か手伝わなければいけないという情報が見えてきた。それは見えてきたのだから、その辺のところで、コミュニティとしてまとめるということをやっていくことによって、次の世代につながるかなと。あまりここから先は少し違う話になるのですが、コミュニティビジネスの議論が出てくると思いますが、あまりあせってもよくなくて、だから、そういうデータがあって、それから幾つかリーダーが出てくる。そしてそれを検索するというくらいのことがあるのもいいかと。多分、もう次の世代には、あと20年ぐらいたつと、もっと行政の機能が小さくなるでしょう。先ほど指定管理者制度などはその一環だと位置づけたいと思うのですが、こうやって世代間交流の議論がされていく中で、育っているじゃないですか。これを見ていくと流れが確実に僕は出てくると思います。

(長谷川) そういう仕掛けを作ってあげるということですか。

(檜) 仕掛け屋さんになっていくということだろうと思います。アサザプロジェクトを市民型公共事業という形で、公共事業だということを認定するわけですが。結局、市民がやらなければいけなくなるというところまで、どんどん進んでいくじゃないですか。そういう事例がどんどん積み上げられていくから。それを従来型の、国を中心として、小さな市町村などの自治体をいちばん下のところに入れたという、そういう段階的な構造ではなくて、さまざまな受け入れ方、あるいは描かれ方がされていくだろうと思うのです。これから実験に入っていくのではないですか。行政国家から社会国家みたいな、そんな議論だと思います。

学校という単位で

(長谷川) 分かりました。では、小山田さんお願いします。

(小山田) わたしはまず、地域の中でコミュニティをやっていくのにやりやすさとして、まず学校という単位を考えてみました。お父さんの学校などもそうだし、サッカークラブも基本は学校区に近いメンバー構成です。学校という組織の中で何かできるのか。または学校という単位のなかで何ができるのか？

前も申し上げましたが、これまで地域活動には父親があまり出てきていなかったかなど。でも、企業戦士と呼ばれた時代からすると、今は少し父親も地域にかかわりたいと思っている人は非常に多いなど。地域にかかわれる時間も企業での働き方が変わったがゆえに、個人差はあるにしても変化してきていると思います。さらに女性もどんどん進出してきて出てくるし、お父さんが家事をしていても、別におかしくない。父親の復権ではないですが、お母さんたちの多いPTAも含めて父親が地域に入ってくることによって何か生まれる仕組みやきっかけがあるのではないかと思います。

先ほど「ご近所の底力」とNHKの番組の話が出ましたが、私の住んでいるマンションはあれに出たのです。

(長谷川) 本当ですか。

(小山田) 学生たちの夜のたむろ問題がテーマでした。住民側が学生たちに積極的に声掛けや、あいさつをするようにしてから、一緒にもちつき大会をするまでになりました。あさってがそのもちつき大会なのですが。最初はお母さんたちが「困ったわね」と言っていたところに、番組に出てきたようなお父さんたちががんばりはじめました。結果は、排除ではなくて仲良しになったのですよ。当時マンション内の広場でたばこを吸ったり、火遊びなどの夜遊びをしていたメンバーが、あさっての餅つきイベントの企画をやっているのです。

(長谷川) 彼らがやるようになったのですか？

(小山田) はい。彼らにとっては遊ぶ場所がないのです。

(長谷川) それは自分たちの仲間だけではないのでしょうか。みんな世代を巻き込んで。

コミュニケーション不足

(小山田) よく話すと、いいやつだった(笑)。かつてに変に見ているという。本当に変なやつはいるにしても、そうではない人もたむろしているだけで変に見られる時代というか、居場所がないとか。要は会話をしていなかっただけなのです。どちらも人見知り状態だったですね。

(長谷川) 要するに、コミュニケーションする機会がなかったのでしょうかね。

(小山田) そうですね。それは親の、大人の責任があったということに、あの番組ではなっていました。

変な言い方ですが、非常に役に立つのですよ。非常によく働くのです。新しい関係が生まれてよかったです。別にうちのマンションだって外から入れるのを嫌っているわけではなくて、マンションの真ん中に川があって、そこが市の公園なのです。合築しているというか。一般の方もそこは入っていい空間なのですが、マンション組合としては、あまり他の人が入ってくると困るということもあったりして。

あとは同じく、「ようこそ先輩」でしたか、授業をやっているのがあるじゃないですか。あれがいいなと思っていて、立派な先輩がうちの学校から出ているわけではないのですが、その地域で一緒に考えてくれたり、きっかけを作ってくれたりということに賛同してくださる、先輩の授業というのは非常に効果があるなというのは感じました。要はフジテレビの「きっかけは〜」みたいなものですかね。

その中でいちばん重要なのは、リーダーという存在です。リーダーというとその色が強すぎると難しい歪みが出てきます。事務局というか、何かお手伝いをしてくれるサポーター的な動きで、ちょうどバランスがとれるというところを維持するのは意外と難しいのです。

地域のアーカイブ

それから、地域アーカイブということに関してひとこと。世代間交流においてお祭りや伝統などをやるというのは、非常に意義があります。それをアーカイブしていく活動の中で、おもしろい事例がありました。奈良のある美術館のプログラムです。敷地内に咲いている野草を子供たちに収集させて、それを電子レンジでチンする方法で押し花をつくります。それをアーティストがきれいに作品に仕立てて、「わたしの自然図鑑」を一人ずつ作ってあげる。それを自分の学校や地域で発表させるのです。もちろん参加した子供たちは自慢をします。そして美しい図鑑や作品がポスターになったり、町のキャンペーン広報誌になったりすると、「こんなお花どこにあるの」というので、周りでまたそういう地域の宝探しが始まったりしてムーブメントが起こります。またこのことで新たなコミュニティも生まれます。地域をこうしたかたちで何かアーカイブしていくことは、地域資源や人材を発見していくという意味でも、非常に重要だと思います。

先ほどロボットの話が出たのですが、産業技術総合研究所（産総研）が、地域の踊りをロボットに覚えさせて、地域文化をアーカイブする研究を発表しました。

（長谷川） 面白いですね。

（小山田） これは単純に踊り手が少なくなっているという問題も一方であるのですが、ロボットに覚えさせたことによって、子供たちが喜んでロボットの真似をしたりして、この踊りにも大変興味を持つようになったりします。ロボットがこういう踊りや技の所作を覚えて、次の世代がこれを見て、何かつながっていくという意味では、一見関係なさそうだけど、非常に重要だと思います。

面白いことの結果としてついてくる世代間交流

（小山田） 伝承していくということに関して、一生懸命いろいろクラブをつくったり、公民館でセミナーをやったり、踊りの練習をやったりしますが、爆発的には興味がわかない。しかしロボット踊りがいきなり出てくると、子供は

目の色かえて面白いわけですよ。というように、僕ら大人がもう少し視点を変えれば、もっと面白い形できっかけをつくることができ、後で世代間交流がついていくと。

だから、世代間交流の間を埋めるためにみんな何かをやるのではなくて、何か目的があったり、何かをやろうとした結果、世代間交流がうまくいく。そうしないとうまくいかないよと。世代間交流をすることが目的になってはいけない。

(檜 槇) コミュニケーションができていない中で、コミュニティとっているから、だからコミュニケーションができるかどうかですよ。今ロボットを入れることによって、コミュニケーションできる。だから面白かった。それはなかなか重要なことですよ。

(小山田) 面白いかどうか。地域にいて楽しいかどうかということは、すごく重要だと思うのです。面白ければ面白いほど、賛同してくれる人は多いし、活動のパワーもアップしていくのです。先ほどの「ご近所の底力」も、最初は防犯対策ということで600世帯がローテーション組んで見回ることなど大変じゃないかというのもあったのですが、ちょっと視点を変えてやり始めると、スムーズに事が進み始めました。みんな地方から都心に集まって来た人たちばかりなので、昔を思い起こして、「うちは田舎に聞けば、もちつきの道具一式はあるから」と言って意外とやる気まんまんで面白い。

(檜 槇) もちの良さとか面白さというのを、あまり世代間交流の場には今まで持ってこなかったですね。だから、何かもう教育者の目だったでしょう。教育者であり、本来志に燃えてやっているだけで。だけど、そうではなくて、それではみんながついてこないということは随分分かってきたのだから。だけど、いきなりロボットにするとお金がかかりそうだなという気がしますが、それはともかくとして、面白いことをもっと考えなくてはいけないということですね。

(小山田) 踊りロボットのように、伝統を保存するというテーマに国がお金を出したのです。実際に産総研がロボットを開発しているということですから、これからも期待したいですね。アーカイブというのは、そういう意味では情報

を共有すると同時に継承していくという点も重要です。

(檜 榎) 一生懸命使命感に燃えたおじさんが子供を集めると、なかなか毎回やるごとに、子供たちが来なくなるような中で。我々もそうですが、学生を連れて、どうしておれの授業をまともに聞いてくれないのだろうと。おまえの話が面白いというのはよく分かっているのですが....。

(長谷川) それは世代間直流というのですよ (笑)。

(小山田) これは先ほどのガンダム世代ではないですが、ガンダムで育った親がもう連れて行ってしまった。絶対面白いですよ。

横のつながりから広がる世代間交流

(長谷川) 檜榎さんが言ったように、コミュニティができていないところで、コミュニケーションするからおかしなことになってしまう。では、山畑さん、最後をお願いします。どのようにしたら。

(山畑) ポスト団塊の世代として、横のつながりの希薄さをちょっと感じています。あと僕らの世代だと、4年制大学に進学したのが3割ぐらいですかね。そうすると、自分自身が大学を出ているため大学卒の人間とつきあうというのが自然になってしまって、そうでない大学へ行かなかった人たちの集団や職人などの世界に飛び込んだ人たちとの、同世代どうしの交流があまりできていません。

今学童をやっていて、いちばん仲がいいのは、とびをやっている人です。お互いに知らない世界を背景にして、何かやろうというときに、それぞれの分野・業種では当たり前のことでも、知らない人には全く初めての知識を活用しながら事に当たることで、今までとは異なる同世代どうしの交流が生まれています。考え方はもちろん違ったりすることもあります。

現代都市の縮図のような地域なので、母子家庭も少なくなく、虐待問題や地震などの災害にどう対処するかなど課題はたくさんあるのですが、そういうことに対しても子どもの安全を第一に考えて、地域の中で育てていこうという共通認識が根底にあれば、いろいろな価値観がぶつかっても話をしていると、す

ごく面白く、今まで考えつかなかったようなことがアイデアとして出たりします。もちつき大会では、子供をメインにしながらも、地域の人たちも呼んで、とにかくみんなを巻き込んでやろうとしています。そういうものが希薄になりつつあった地域ですから、僕らの世代と、もう少し下の世代が集まって、何かをやろうという気運は高まっています。それで先ほど小山田さんがおっしゃったように、最初から世代間交流を目指したわけではないのだけれども、結果としてそういう交流が生まれてくるということはありませんね。

地域の単位・モジュール

(斎藤) わたしのはちょっと夢物語半分、今まだ研究途中の話なのですが、市民、住民でもいいのですが、地域がまとまって行動できる単位というのはいくらかということはずっと考えているのです。考えるきっかけは、それこそコンピュータ技術のホームページをやる技術やブログをやる技術の中に出てくるモジュールという単位なのです。あるポータルサイトを立ち上げるのに、今そういうシステムがあって、自分で好きなモジュールを持ってきて、はめ込むだけでコミュニティサイトができてしまうのです。天気予報のモジュールを持ってくると、自分のコミュニティサイトに天気予報を映し出すのができるとか、会議チャットができるモジュールを持ってくると、ぱかっとそれが入り込む。それをずっと考えていて、1年前からなのであまり大きいことは言えないのですが、都市計画で今まで教わってきた地域の単位というのが、先ほど言われた近隣住区などの考えを教え込まれたので、一小学区という形はものすごく大きいのではないかとずっと思っていたのです。要するに、駅をはさんで反対側の人とはほとんど交流もない。

では、自分が地域と考えられる範囲はどれくらいかと、ずっとこの間から考えていて、そうすると、町内会ぐらいの小ささではないだろうと。もう少し大きいだろう。ただ、小学校区まで大きくないだろう。どれくらいかなというので、これは学生を使っていろいろやっていたのですが、一辺300mぐらいの範囲ぐらいかなと。これは具体的に地図にはめていないので、まだ本当に研究途中なのですが、例えばそれぐらいの範囲というので、だんだんに都市計画のいろいろな単位をちゃんと集約していけないかということを考えているのです。

というのは、防災生活圏というのも与えられていますが、それも住民には何

のかかわりもないし、先ほどの小学校区も住民には何にもかかわりもない。自分たちがかかわっているのは、せいぜい駅までの間にどんな商店街があるかとか、どこに何屋さんがあるとか、子供のいる世代だと、だれだれさんのお母さんはどこら辺にあるとか、その辺の範囲しかないわけです。その辺の範囲だったら、自分たちの問題として物事が考えられる。例えばそこにドンキホーテが建つということになったら、きっと反対したり、気にしたりするだろうとか、廃棄施設が入ってくるということになると、やはりどうしてそこに来るのかということ、集会に出なければいけないと思う範囲ではないかと。

学生を取り込む

(長谷川) 一つは、モジュールということに注目すると、けっこう面白いことができるのではないかと捉えておいたらいいですね。あと何かご指摘の点ありますか。

(斎藤) それ以外だと、先ほどちょっと言いかけた学生の世代、要するに一番いい世代ですね。まだ今は18になったら大学へ行かなければならない、22になったら社会に出なければいけない、ちょうど間のいちばんいい、活気あふれる学生の世代が増えてきていて、意外に目的もあまりなく(笑)、これをうまく使うというのがこれからの地域の狙い目です。だから、今のモジュール論は少し先の話ですが、現実の世代間をもっと交流させるというのであれば、やはり学生をどう取り入れるかですよね。ということは、すごく思います。学生とっているのは大学生です。小学生は取り込みやすいし、親がちょっと動けば、学校の動きとしてすぐできるのですが。

(檜) 随分各地域の学生の動きがあり、文部科学省でも特集していたりします。将来の目的をつかんでいない学生をどうやって地域内の協力の一環に入れるかという。

目的は何とか地域を歩かせて、そこに何か面白いなというものを学生が把握してくれるとよいですね。

(斎藤) 意外な発見をしてくれるので。

温かい、コミュニケーションのあるコミュニティ

(檜楨) コミュニティ論のケースからすると、やはりもともとの住民運動みたいなものが出発点ですね。歴史的には地域コミュニティは国家や行政にのっ取られたわけじゃないですか。取られたというか、戦時中には翼賛体制のもとで・・・。

戦後は米軍によって、取られてしまうわけじゃないですか。20年代の後半になって、ようやく地域コミュニティ(町内会、自治会)が復活する。でもその間地域はちゃんとコミュニティを守るわけです。守っていて、少しずつそういう世代間交流を続けてきていたわけですね。70年代になって、例の経済企画庁国民生活審議会のコミュニティ政策が出てきます。人間疎外の回復を旗印にして、それをきっかけに自治体は集会所をたくさん造ったわけです。だから日本中に集会所がたくさんできた時期があったじゃないですか。そこから福祉コミュニティが80年代に言われた。90年代はみんながまちづくりをやろうとやってきた。ここへ来て、どうも世代のところに注目すると、もう1回その世代から立ち上げるコミュニティをつくろうという、21世紀型のコミュニティの作り方が出たような気がします。時間軸の中でも、ようやく温かい、コミュニケーションのあるコミュニティ、それは世代どうしが助け合うみたいなことがある。

(長谷川) ということで、皆さんからいろいろご指摘を頂いて、これをすればすぐに活性化がうんぬんということではなくて、そもそも活性化しなければいけないという盲目的な目的のためではなくて、やはり地域の問題解決型であってもいいかもしれないし、あるいは文化の伝承とかでもいいかもしれないですが、このままで手をこまねいていくと、結局自分自身も含めて楽しい、活力のある生活ができないのではないかと。それはやはりさまざまな世代の持っている知識や知恵で、どうしたらお互いに共有して、それは地区単位で、例えばモジュールという概念もあるかもしれないし、場合によっては学区域という単位もちょっと広いかもしれませんが、そういうところを利用しながら、温かいコミュニケーションのあるコミュニティ創造を図るきっかけが一体何なのだろうかというところがポイントのようです。

世代間交流の活性化による新たなコミュニティ形成に関する研究

2005年4月25日 発行

財団法人 ハイライフ研究所

〒104 - 0031 東京都中央区京橋 3-6-12

正栄ビル 5階

TEL 03-3563-8686

FAX 03-3563-7987

<http://www.hilife.or.jp>

* 本書の全部または一部の複写・複製・転載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。